

253

253-694

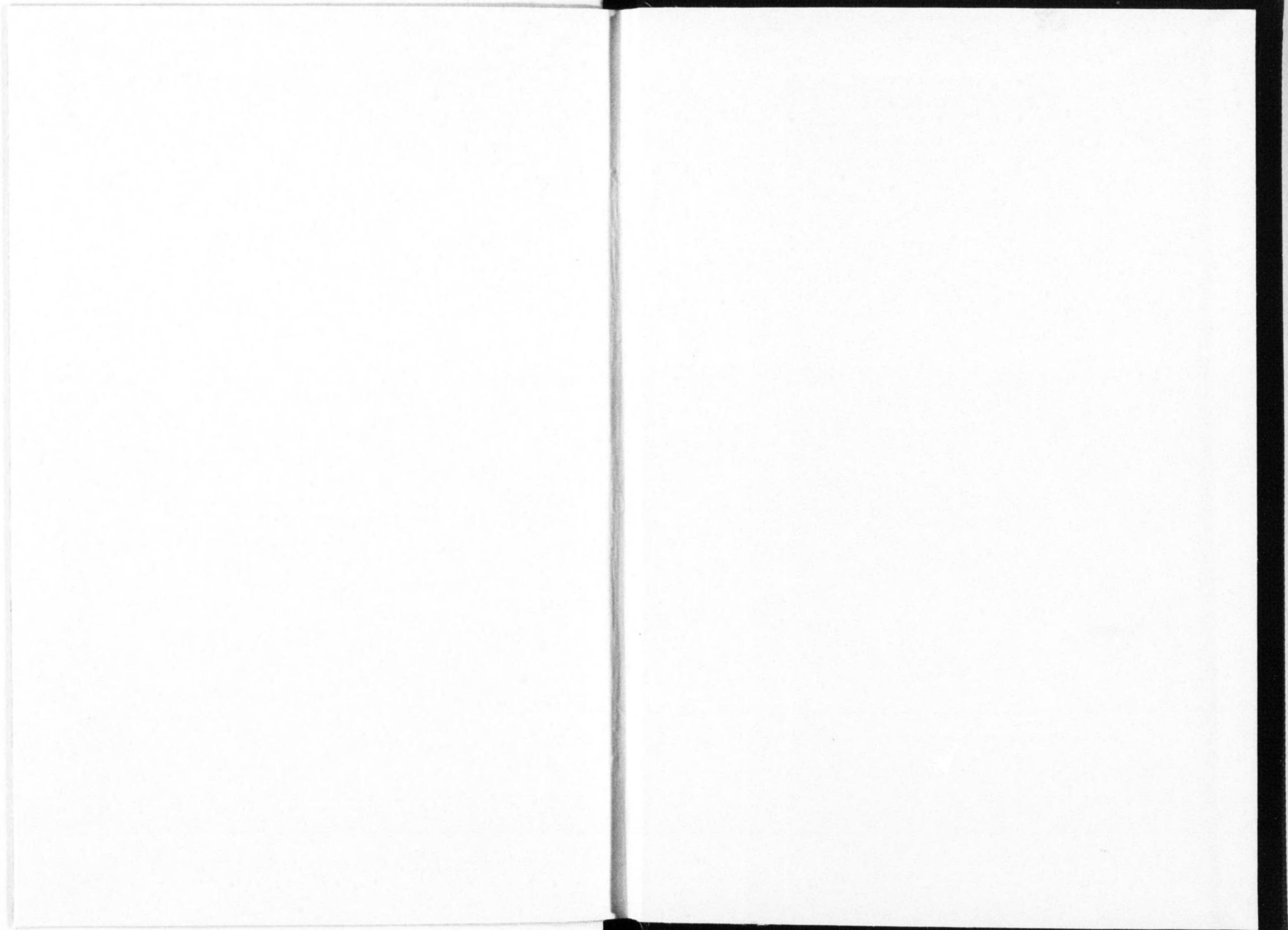


1200501344598



始





48 3U 48



# 宗教的信仰と教育

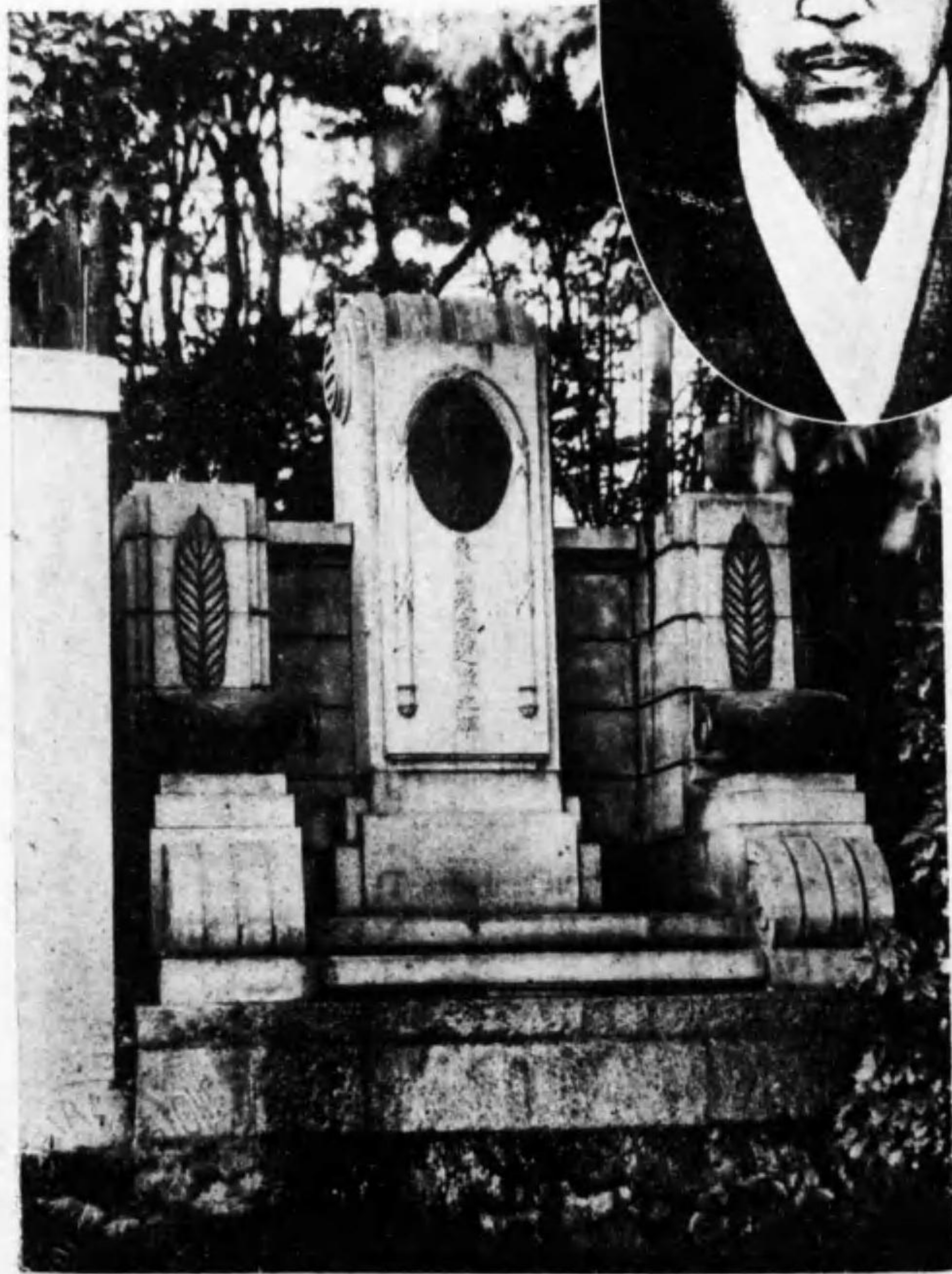
大 阪 帝 國 大 學 大 學 教 授  
京 都 帝 國 大 學 名 譽 教 授  
教 化 振 興 會 理 事 長

青柳榮司著

全



人 文 書 院 刊



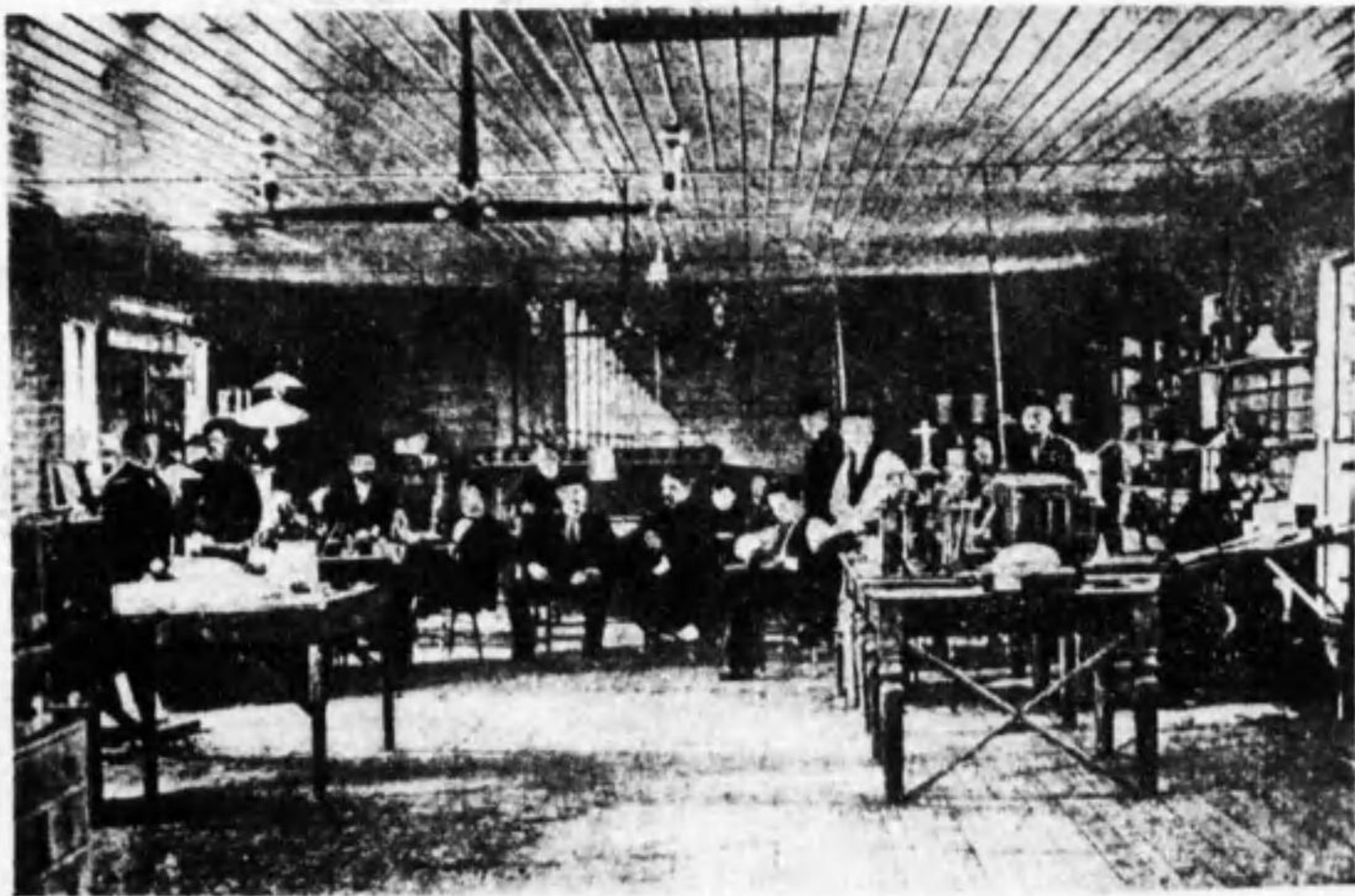
(上) 佐久間象山先生肖像(宮本仲氏著「佐久間象山」)  
(下) 先生遭難之碑(京都木屋町二條下ル)



たし明發の翁ソチエ  
球電素炭的用實の期初



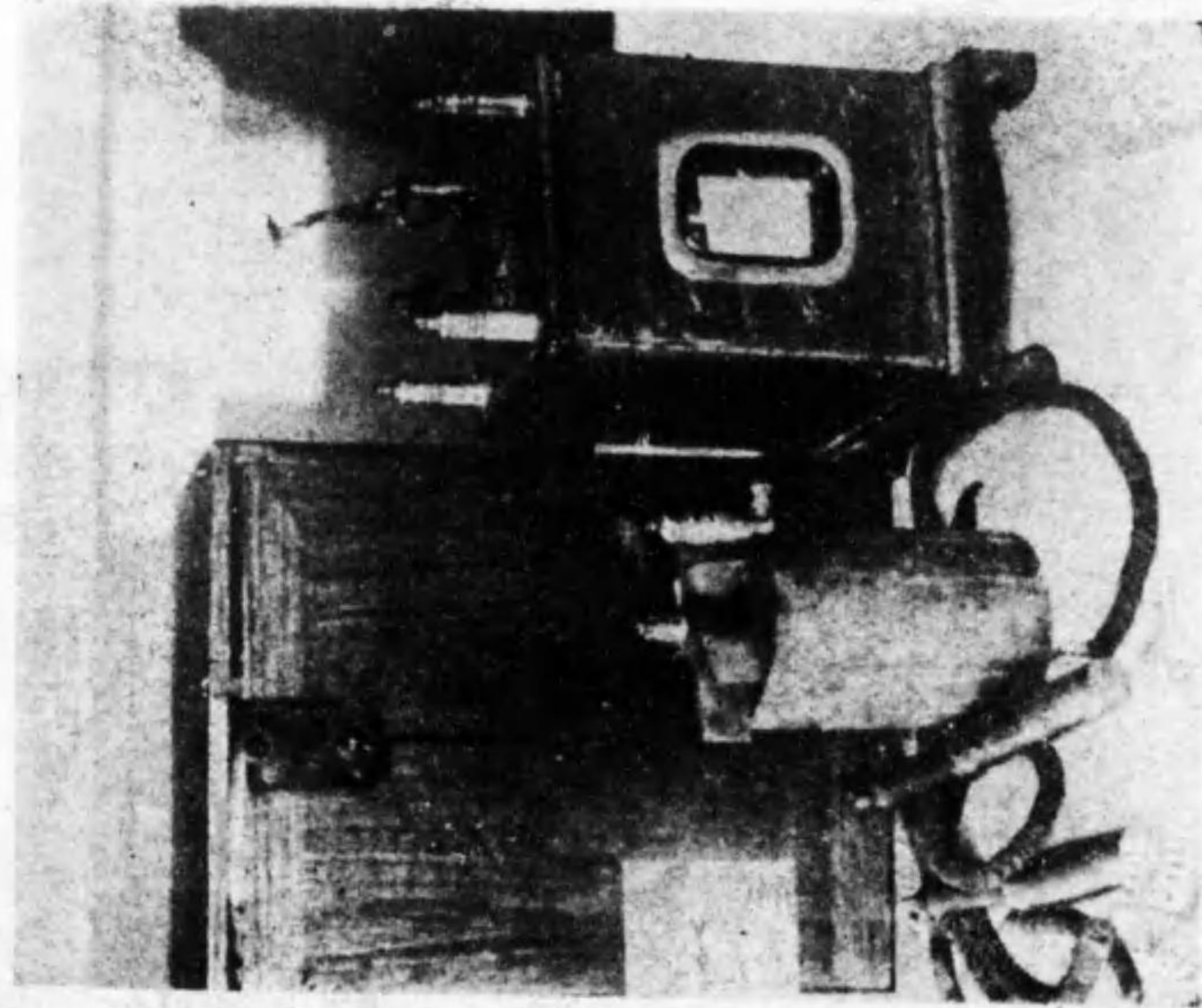
翁ソチエ  
(年九二九一 年四和昭) 歳三十八



(頃 年〇八八一 年三十治明) 所驗試ソチエのターバーロンメ



象山先生實驗の地震計



象山先生實驗の電気治療機

253-694

てへ代に序

### 序に代へて

既往三十有六年間、京都帝國大學奉職中、隨時發表した數十篇の拙稿の内、今春還曆を迎ふるに至る迄の體驗を基とした宗教的信仰と教育とに關するもの若干を取集めてこの小著を刊行することとした。内容の重複せるものや記述の推敲を缺ける點なども少くないが、今その改修を加ふるに違がないので他日に譲り、茲に私見の趣旨を要約して序文に代へ、以て識者諸賢の斧正を乞ふ次第である。

凡そ神中心の生活と自己中心の生活とは、假にこれを幾何學的に云へば、その目標とする所は百八十度の正反對を意味して居る。即ち前者は宗教的信仰に依る無我の奉仕を第一義とし、後者は利己的動機に依る我慾の擴充を第一義とする。これ明かに、人間生活に於



翁ソヂエるけ於に室驗實學化  
(ヂンレオ外市育紐)



年少ソヂエ  
(頃歳六五十)

ける、正反對の二つの目標を表すものである。

我が日本帝國に在りては、畏れ多くも 天皇陛下は萬世一系の天孫として神の御延長にあらせらるゝが故に、所謂皇室中心の生活即ち 天皇中心の生活と神中心の生活とは取りも直さず相合致するものと申さねばならぬ。従つて自己中心の生活は 天皇中心の生活と全く相反し日本國民たるの本分に背く虞あるは固より明白である。

宗教的信仰なき人は所謂御都合主義に支配せらるゝが故に、自己中心の生活を脱却することが出来ない。従つて信仰ある人の生活とは正反對の行爲や結論に立到ることの少くないのは敢て怪しむに足らない譯である。人若し自己中心の生活を捨てゝそれと正反對の目標による神中心の生活を辿りつゝ、宗教的信仰に入るならば、自己本位の欲求より生じた種々の悪徳は自然に正反對の美德に置き換へ

らるゝと共に深き感謝の念を以つてこれを實行するに至るであらう。例へば虚榮情弱の弊風は質實剛健の美風と變り而も喜んでこれを守り、自負心優越慾は謙虚遜讓の精神に轉じ而も満足してこれに従ひ、又安逸は勤勉に、憎悪は信愛に、放縱は謹直に、貪慾は無慾に、何れも自ら進んで改められ、その他日常生活に於ける卑近の惡習例へば飲酒、喫煙等の如きも寧ろ易々としてこれを放棄し却つて禁酒、禁煙に満足を覚え、これを感謝するに至るであらう。要するに、眞の宗教的信仰を有つ人は、利己主義、打算主義、御都合主義、享樂主義、唯物主義等を排して、これ等と正反對の 皇室中心の生活に基づき、利他主義、犠牲主義、奉仕主義、勤勞主義、精神主義等を辿り而も感謝、満足、喜悅、憧憬の念の裡にこれを遵奉實行して止まないであらう。従つてこれ等の人々には決して左傾思想などの

起るべき道理もない。何となれば、人間性の眞の向上進歩は唯物的生活を離れて高き靈性乃至神性の活動に由ることを深く體驗し得るが故である。

明治維新前までは、我國民には、一般に宗教的信仰があつた。殊に世人の師表たる地位にあつた學者、武士等は皆宗教的信仰を根柢とする教育と武道とに依つて心身の鍛錬を勵み、常に、人格の三要素たる智情意の圓滿なる修養を心掛くると共に益々確乎不拔の宗教的信仰を體得するに努めた。その結果として、彼等は居常、義勇公に奉ずるの熱誠と實行力とを失はなかつたものである。

明治の初頭に來朝した米國の文學博士神學博士グリフィス氏が更に昭和二年頃來遊の上、具に日本を観察せる結果、公表したる「親愛なる日本國民に忠告す」と題する論文の中に、明治維新の大業の

遂行せられし原動力の第一は維新前に於ける日本國民の信仰の力ではないかと強調して居るのは最も注目を要する點である。

然るに、維新後の新教育を興すに當り、この最も大切なる宗教的信仰を度外視して諸學校を設立した。帝國大學を始めその他多くの最高學府に於ても、その教育方針は遺憾ながら何れも宗教的信仰を考慮に入れたものと認むることが出来ない。斯くの如く宗教的信仰を輕じて専ら智育に偏したことは實に明治教育の一大失敗であつて、これが爲め明治の教育を受けた人々の家庭は、概ね宗教的信仰を無視する弊風を生じたのである。従つてその子女、後進たるものも亦多くは家庭に於ても學校に於ても信仰教育を與へられず、徒に御都合主義、打算主義等の間に成長し、更に又所謂智識階級の人々は、終始清き心を以つて實行勞作すること、即ち眞の體育の趣旨をも閑



却するの有様となつたので、不知不識の裡に情操と意志との陶冶を怠り、而も殆んどこの缺點に氣付かずして今日に至つたものである。元來、情意の鍊磨は叙上の如く主として信仰教育と正しき體育とに依る生理的・心理的醇化に俟たなければならぬ。然るに今日の如き唯詰込主義の智育と競技の勝敗にのみ囚はれ易き體育とに依つて教育を行ふのみでは、適正なる情意の鍛鍊を失ふことゝなるが故に、次第に生理的・心理的悪化を生じ、徒に利己主義、打算主義、物質主義等の人物を作るに止まり、到底、義勇公に奉じ感謝して犠牲となる如き熱情と實踐力とを涵養することが出来ない。曾て英國のウエーリントン侯は「宗教なくして人間を教育するのは利巧な悪魔を作るに過ぎぬ」と斷定したが、洵に至言と謂ふべきであつて、若し侯をして今日の我教育状態を批評せしめたならば果して如何なる論定を

下すであらうか。

要するに、明治以後の教育は維新前のそれと反對に宗教的信仰を閉却したことは争はれない。然らばこの時に於て既に「赤化」の原因を胚胎したものと斷じて、敢て否定することは出来ないであらう。教育の大本山たる最高學府にして既に右の如しとせば、それ等の出身者に依つて直接間接に指導教育せられた今日の所謂智識階級の人士に至る程却つて信仰心に乏しく従つて宗教を蔑み、専ら打算主義、物質主義等は走る者の多きことは、寧ろ自然の成行たるを疑はない。此の如くその根本の目標を誤まれる以上、果ては、これ等教育ある人々の中より少からざる赤化思想家を輩出せしむるに至つた所以も亦自ら首肯せらるゝであらう。

教育界の或る有力者が、去る大正十一年以來十箇年に亘り、主に

某々高等學校等の學生の赤化せる者百數十名に就き考査した結果に據ると、彼等の殆んど總ては所謂小利巧者であり且つ自負心と優越慾とが特に熾烈なものであることが判明して居るが、斯くの如きは畢竟信仰なき教育の結果に外ならないことを思ひ私は尙かに戰慄を禁じ得ないのである。

私は本年五月二十七日北海道に於て、偶然、共產主義より轉向せる某有力者に會ひ、その告白を聞いたが、少くとも同氏の知れる限りに於ては共產主義者の殆んど大部は各々自己中心的である爲め眞の協同一致を保つことが出來ず、只管各自の優越慾を満足せしむるに汲々たる有様であるとのことであつた。果してこの言の如しとせば、これ亦無信仰の弊弊を裏書して餘りあるものと思ふ。これ等の事實より窺つても、獨り前述の學生達のみならず、凡そ世の赤化主義者

等の正體が如何なるものであるかを推察するに難くないであらう。

又今夏私は、滿洲、朝鮮方面を旅行したが、その際、内地人と朝鮮人、或は日本人と滿洲人との親和融合が、内地人側の自負心や優越感の爲めに如何に阻害せられつゝあるかを親しく目撃して、今更ながら信仰なき生活の弊害の絶大なることを沁々感知せざるを得なかつたのである。この旅中七月二十八日、溥儀執政に謁するの光榮に浴したが、この機會に於て私は何か精神的の贈物を捧げたいと念願した結果、執政に對し「眞の王道國家を建設する爲めには是非共宗教的信仰が根柢とならなければならぬ。これ固より御承知のこととは存するが敢て御参考までに進言致したい」といふ意味のことを申述べた。すると執政は殊の外満足せられ「今日まで幾多の人士に接したが誰一人この事に觸るゝ方はなかつた。全く貴下が始めて」

ある。實は、我祖先たる康熙皇帝が家法として傳へた教訓の第一はこの事に外ならない」との意味を答へられた。そこで私は「それを伺つて實に光榮と感激とに堪へない。以て多幸なる滿洲國の將來をトすべく、洵に祝福措かざる次第であります」と結んで退下せんとしたが、感激せられた執政は自ら進んで堅き握手を賜はつたので、私も劣らじと力を籠めて御別れを惜しみつゝ、「日滿親善の本髓實に茲にあり」と衷心の熱誠を捧げたのであつた。その時共に謁見した勝山鼎一、橋尙藏の兩氏も覺えず感涙に咽んで居られた。嗚呼我日本國は神の御延長たる 聖天子を戴き、滿洲國は敬天を第一の家訓とせる元首を仰ぐ、日滿友邦の仕合せこれに過ぐるものがあらうか。而も私の苟かに懸念を禁じ得ないのは、日滿兩國の人士が概ね口には皇道、王道を唱へながら、その根本たる宗教的信仰を輕じて居るので

はあるまいかとの一事である。如何に精神文明を要望しても、宗教的信仰を離れては到底眞の精神作興を企圖することは出来ない。

近來、我國の各地に頻發する種々の不祥事は何れも宗教的信仰の缺如に基因するものと斷定して憚らない。實に恐るべきは宗教なき教育、信仰なき生活である。宗教的信仰あるものは決して破壊的ではなく必ず建設的であつて、飽くまで最高の理想の爲めに奉仕することを本義とするから、その生活に於て情痴、殺戮、破倫等の不徳義の起るべき道理がない。然るに今日の如き憂慮に堪へぬ無信仰の社會と人間とを作り上げた主たる原因が我教育界の過誤にありとするならば、吾々教育事業に關與せる者の責任は特に重大なるを痛感すると共に、宜しく慚愧報謝の念を以て斯界の一大革正の爲めに率先奮起する所がなければ全く相濟まぬ次第であると思ふ。實に昭和の

維新は信仰の復興にありと絶叫せざるを得ないのである。

人或は言はん、家庭、學校何れに於ても夙に倫理道德を教へて居るではないかと。併し假令その教を聞いて感銘する所ありとするも、信仰なき者にはその實行が永續し難く、その感動が冷却すると共にその實行も亦休止せらるゝを常とし、従つて、生理的・心理的醇化を起すの域に立至らないから、人格の修養、品性の向上は期待され難く、所詮、打算主義、御都合主義によつて行動するに止まるであらう。然るに若し倫理道德の實踐が斯かる御都合主義や打算主義にあらざる、眞に清き心を以つて永續することを得るならば、茲に始めて生理的・心理的醇化を生じ人格の陶冶を實現することが出来るべきである。而してこれ畢竟、神の道を辿るものに外ならないが故に、その人は遂に神を見出し信仰を得るに至り、益々斯の道を遵奉すること

が愉快と感謝に堪へざる状態となるであらう。即ち信仰なき人と雖も常に清き心を以つて倫理道德を永續的に實行することを怠らないならば、臆て確乎たる信仰に到達せざるを得ない。若し果して然らば、我國教育の缺陷は斯かる實行の伴はない倫理道德を教へながら、而もこれを改めざる點にありとも謂へるであらう。

叙上の見地より、今日に於て我國上下の最大急務であり、且つ又國家永遠の大計に合致する所の要綱は一に、我日本建國の大精神たる惟神の大道に立據せる、高き國民的信仰心を涵養助長し、これに基いて我皇道主義の理想に邁進し、この皇道精神の表徴たる尊き教育勅語をば、神の下し給へる聖經典として信仰し、飽くまで神中心の生活即ち 皇室中心の生活のもとに、感謝、歡喜、満足、憧憬等の尊き情操を以て常にこれを遵奉實行しつゝ、國家社會の爲め將

た又世界人類の爲めに奮闘努力し得るやう國民を教育薰陶するにありと私は信するのである。若し學國一致斯くの如き宗教的信仰信念に徹底し正しき目標に向つて精進することを得るならば、内は社會の廓清、思想の善導、政黨の淨化等刻下の諸問題も立處に解決せられ、外は日滿親善の實現は勿論、進んで全世界の平和、全人類の福祉に貢献することも決して難事でなく、斯くて、眞に光輝あり意義ある大日本帝國の使命を遂行し我皇道精神を宇内に擴充することが出来るであらう。何となれば、これ畢竟天壤無窮たる惟神の道を辿るに外ならないからであり、而もこの眞正なる皇道に對し必ずや神明の加護のあるべきは疑ひを容れないからである。

昭和八年神嘗祭の佳辰に當りて

青柳榮司識

## 宗教的信仰と教育

### 目次

眞正の教育……………	一
人生と研究……………	三
眞劍味……………	六
科學上より見たる弘法大師……………	八
神の國日本……………	一〇七
エチソン翁に就て……………	一四
我國の現狀に鑑みて日蓮聖人を憶ふ……………	一三四

偉人としての象山先生……………	一四九
生活の合理化と超合理化……………	一八三
明治天皇と教育勅語……………	二〇三
生活の更新と禁酒……………	二二三
移殖民精神と信仰……………	二三七
至誠通天……………	二七五
日本國民の覺醒……………	二八四
……………	
附 錄	
……………	
我國教育の科學的缺陷と強制的補習教育の必要……………	二九〇
學制頒布五十年……………	三三八

人間として最も大切なものは云ふまでもなく人格である。即ち人格を完成することが人間の最後の目的でなければならぬ。蓋し各人が其の人格を完成することに依つて始めて最高の文化を有する理想の社會が實現される筈である。此の人格の陶冶は第一に教育の力に俟たねばならぬこと勿論であるが、之に就て考察するに當り、先づ吾人の「習慣」なるものが甚だ重要な意味を有することを見逃してはならない。

# 宗教的信仰と教育

青柳榮司 著

眞正の教育

人間の最後の目的

今日心理學者の説に據れば「習慣」とは吾人の身體内に於て一種の「カーレント」が特定の部分に流通し易くなる結果の作用であるとされて居る。尤も此の「カーレント」の正體が如何なるものであるかに就ては未だ十分に説明されて居ないやうであるが、ともあれ、此のことと關聯して、私は次の事實の存することを信じ且つ之を認めて居る。即ち吾人が常に清き心を以つて善き行ひを度々繰返して居ると、次第にそれに適應する如く心身の組織及機能の全系統に或る心理的生理的變化が起り、所謂、心身が鍛鍊され馴致されて、一層容易に善行を爲し得るやうになるものであつて、これが即ち「良習慣」であり、之に反して、「惡習慣」とは、不純な精神で惡しき行爲を度々重ねる中に右と反對の結果を馴致するに至つたものである。即ち『習慣は第二の天性』とは此の事柄を指すに外ならない。例へば、平常利己主義によつて生活して居る者は自然と總ての行爲が利己的に傾き、偶々何等かの理由で利他的な行爲をなさんと欲しても異常な困難を感じ或は全く不可能に終るのである。其の反對に努めて利他主義を奉じ之を實行して居る者は一舉一動期せずして奉仕的となり、時に利己的行爲をなさんと試みても却つて苦痛を感じ遂に之を能くせざるに至るのである。更に卑近な例を取つて云へば、若き婦人殊に女學生などは、何でもないことによく笑ふ癖があるが、其の結果は、決して笑つてはならない場合に而も其の笑つてなら

ない理由を知りつゝ自ら禁じ得ずして失笑するが如き非禮に陥ることが少くない。之れ即ち習慣の爲であり斯かる習慣を馴致した彼等自身の責である。若し平生から、笑ふべからざる場合には決して笑はないと云ふ心得と習慣とをつけて置くならば、敢て意を用ひずとも斯うした不作法は自然に起らない筈である。訓練に依る習慣の効果の顯著なことは彼の自轉車の稽古などに就いて見てもよく解る。即ち最初は顛覆衝突など様々の失敗を演ずるが、練習を積む中に、段々自由に乗りこなし得るやうになり、果てはハンドルを手離したり或は他の事を考へながらでも、宛ら歩行する場合と同様、間違ひなく目的地へ到達することが出来る。

吾人の目的とする人格の陶冶も亦全く如上の習慣を道程として遂行されるものである。即ち清き精神を以つて善き行爲を絶えず繰返すことに依つて、腦、脊髓、神經、血管、内臟(機關及腺)、大小筋肉等に或る生理的的心理的變化を興へ、之が爲め益々善良な行爲を容易ならしむると共に惡心惡行に遠ざかり、依つて以つて次第に人格價值を向上せしむるものと謂ふことが出来る。

之を他の方面から觀れば、後に説明する如く、人は幼少時代より是非共宗教的信仰——それは舊來の既成宗教でも或は今後開始せらるべき新しき宗教でも敢て問はないが、要するに缺點や弊害の伴はない、よく時代に適應した且つ科學や道德と背馳する如き傾向のない健全なものでなけ

ればならぬ——の素地を培ひ、之に依つて清き精神を養ひ、此の精神のもとに凡ての行爲を統制することに依つて、次第に心理的生理的醇化を興へ以つて人格の陶冶を圖ることが最も肝要である。換言すれば、身體の發育期から絶えず注意して、適當な智育と共に敬虔な信仰教育及び正しき體育を併せ施すことを忘却してはならない。

人格完成と智情意

人格の完成は智情意三要素の圓滿に調和せる發達に在る。故に此の三者は修養上決して引離すことが出来ないのであるが、今日我國の狀況より見れば特に情意の鍛錬に重きを置かねばならぬことを痛感する。三者の内、智は主に學校教育に依つて興へられ、これを生理的に云へば、智育は即ち大脳皮質の發達を意味し、所謂理智を司るものである。又情意は主に信仰教育及體育に依つて陶冶され、生理的に云へば、情育は腦、脊髓、神經、血管、内臟(機關及腺)及大小筋肉(主に表情筋)の鍛錬であつて即ち情操を養ふものであり、意育は腦、脊髓、神經、大小筋肉等の鍛錬、即ち意志を強固にし實行力を賦與するものである。これ等の關係を假りに表示すれば第一表の如くなる。

表 二 第

米國大學學生宗教調查 (一九二七年十二月發行)			
ク リ ス ト 教 信 者	ユ ダ 教 信 者	他 宗 派 信 者	一〇九名
グ ア ン チ ス 宗 教 的 家 庭 に 成 長 せ し 者	グ ア ン チ ス 宗 教 的 家 庭 に 成 長 せ ざ る 者	問 答 も 答 へ ざ る も の	一〇二〇名
カ ン サ ス 州 教 會 に 屬 せ る も の	カ ン サ ス 州 教 會 に 屬 せ ざ る も の	教 會 に 屬 せ ず 教 育 に 無 頓 着 な も の	四〇九一名
七三九名 一〇〇名 三〇名 一五〇名	七二% 一〇% 三% 二五%	八二% 一七三% 〇七%	八二八名 一八五名 七名
三二四六名 六五名 二九名	七八% 一六% 六%		

表 一 第

智	識	情	操	意	志
學校教育	腦脊髄神經血管内臟(機關)並腹(及)大、小筋、肉(筋)の鍛錬	腦脊髄神經血管内臟(機關)並腹(及)大、小筋、肉(筋)の鍛錬	腦脊髄神經血管内臟(機關)並腹(及)大、小筋、肉(筋)の鍛錬	腦脊髄神經大、小筋、肉の鍛錬	大脳皮質の發達に依る
智情意の發達					



斯くの如く其の鍛錬せらるゝ身心の部署が夫々異なるのであるから、其の何れの部分にも偏せぬやう全體的に圓滿に調和發達せしむることを主旨とせねばならない。是れ學校教育と共に信仰教育及體育の常に閑却すべからざる所以である。試に米國に於ける大學々生の宗教調べを示せば第二表の如くであるが、我國では之と著しく異なり信仰に無關心なる青年の多いのは大に考慮すべき事柄である。

勿論學校に於ける教育の中には、單に智育のみならず情意の教育をも含まるべき筈であるけれども、併し今日の我が教育界の有様では、此の方面に對して極めて貧弱なる期待をしか置き得ない。現に世人も云ふ通り、今日の學校教育は専ら智育に偏し、兎角理窟の末に奔り、從つて温か味のない且つ實行力の乏しい人物を作り易い傾向のあることは否定されない事實であつて、之れ全く一方に於て情意の錬磨を忽にせる結果と謂はねばならぬ。併し茲に注意すべきは、例へば、智育としての倫理學も、若し之を修養の深い人格の高い教師が講義するならば、生徒は自ら感激に打たれ清き精神を奮ひ起し、所謂血湧き肉躍り或は涙下るの情を味ふことが出来る故に、斯うしたことが屢々繰返される裡に次第に情操が醇化されて智育と共に情育をも兼ね行ふ結果となるのである。更に進んで生徒が此の清き精神のもとに教師の教訓を永續的に實行するに至るなら

ば、乃ち意育も亦遂げられたと謂ふべきであらう。之に反して、若し其の教師の人格が低劣であつたならば、生徒にとつては單に倫理學説の講釋たるに過ぎないから別段の感動を與へず、從つてそれは精々智育に止まり到底情意の訓練にまで及ぶことが出来ない。即ち如上の感激と實行、これが吾人の情意の發育に甚だ重要な關係を有するものであつて、此のことは單に智育のみでは決して庶幾するを得ない問題である。右の點より見て現在我國の學校教育は果して如何であるか。若しも生徒等が、教師の講義中不眞面目な氣持に捕はれ、或は體操や實驗等に嫌や／＼ながら參加し、又は寄宿舎等に於て無精放逸な起臥を續け、嚴肅な儀式にも出席を厭ひ、運動競技や室内遊戯等の際にも互に清からざる心を以つて相争ふやうな事が度重なり而も之が匡正を圖らず放置せらるゝとしたならば、彼等の情操は次第に劣下するのみである。斯かる状態のままにして唯知識や理窟のみを教へ込んだとて抑も何の教育ぞや。正に我が教育界の猛省を要する點である。情意の修養には信仰教育と正しき體育とが不可欠の要件であることは既に述べたが、信仰教育は主に情操の陶冶を旨とし體育は特に意志の鍛錬を主とする。而して此の兩者は互に相倚り相俟つて智育と共に、恰も鼎の三足の如く、人格の完成上最も大切な要素であることは之亦繰返すまでもない。然るに、我國の現状では、指導の地位に立てる人々でさへ動もすれば信仰教育と體育と

を等閑に附し、而も在來の既成宗教は今や殆んど權威なく、又所謂體育は、往々競技の巧拙に囚はれて、其の本來の目的を自覺せる清き精神が伴はず、従つて種々の弊害を免れない有様である。斯様な狀勢を以てしては、到底満足な情意教育の効果を擧ぐることは出來ないと思はれる。現に、小學校、中學校、高等學校等に於て何れも此の情意教育が甚だ振はないことは事實であつて、恐らくそれが主なる理由となつたものか、遂に先年大學令を改正して「品性の陶冶、國家思想の涵養を兼ぬ云々」の文句を殊更附け加へざるを得ない始末となつたことは、之れ實に我國教育界の大缺陷を自ら告白したものではなからうか。

更に他方では、内容實質の至つて不備貧弱なることは勿論、我が教育の大綱を明示せられたる唯一無上の聖典たる「教育勅語」をすら殆んど生徒の前に捧讀する機會の無いやうな學校さへもあり、而も世の父兄達は大切な子女の教育を斯かる學校に一任して晏如たる有様を觀るとき、私は實に長大息を禁じ得ない。さればこそ近時我國の上下を通じて、情場の不純なる薄志弱行の人物が充満して居ることは敢て怪しむに足らないのであつて、邦家の前途、全く寒心に堪へないものがある。今や正に我國の教育界は一大覺醒を以て根本的改革を斷行するの必要に逢着せることを痛感せざるを得ないのである。

### 善を爲すは樂し

私の見る所では、信仰教育も體育も矢張り智育と同じく、特に成年期に達する迄の間に於て適當な方法に依り之を施行しなければ十分の効果を期待することが出來ない。即ち信仰生活の素地は、先づ幼少の頃から家庭の内外に於て、常に神佛を始め 皇室、祖先等に對し禮拜、感謝、誓約等を行はしむる宗教的薰陶に始まり、この間に於て神、佛、或は天等の——何れの觀念でも歸する所は皆同一であるが、要するに或る至高至善の理想者——超人間的の絶對な力の存在を信じ之に憧憬し歸依するやうに仕向けてゆくことが大切である。さうして更に長するに従ひ組織ある信仰教育と智育とを相伴はしめ、宗教に依つて與へらるゝ清き氣分のもとに進んで善を行ひ努めて惡を斥け、これが右の偉大なる最高者即ち神佛の心或は天意に叶ふ所以であるとの信念を以つて、之に近づき之に合致すべく努力することを最大の満足、愉悅と感ずるやうに絶えず情操を醇化してゆく方法を講ぜねばならない。

又體育に就いては、兒童の時から常に年齢相應の運動を必要とすることは云ふまでもないが、殊に十二三歳頃からは著しく思考力を増進せらるゝものであるから、體育も此の時分から特に注

意して奨励するのが有効であり決して之を閉却してはならぬ。彼の英國の名文相フィツシャー氏が大戦中一九一八年進んで教育令を改正し青年子弟の體育を一層盛んならしめんとしたのも同様の趣旨に基くものと推察される。然るに我國では今日まで運動競技が比較的少數の青年や學生々徒の一部に限られ、未だ一般的に普及されないのは意志教育の上から見ても甚だ遺憾とすべく、而も其の競投たるや、多くは勝敗の決に重きを置き、之がため往々不純なる精神を伴ふものがあるのは甚しき誤謬である。されば各人は宜しく常に適宜の運動體育を怠らないやう、而も徹頭徹尾清き心を以て之を實行することに主眼を置かねばならない。

要するに少年少女の頃から修身や倫理で教へられた正しき道を、神佛の命する所として喜びと憧れの裡に實行するといふ習性を養ひ育て、ゆくことが最大の眼目である。此の神佛の心に叶ふといふ尊き信念に出づる所謂良心が、凡ゆる行動の基本となることが第一の要件であつて、而も之は唯一時的でなく不斷に繼續することに依つて、之に順應せる心理的生理的變化を生じ、其の結果、情操は淨められ意志は強くなるのである。換言すれば、幼年時代から夙に宗教的信仰の素地を養ひ、之により、善を行ふに喜びの情を以つてするといふ訓練を積むことが必要であり、又總ての運動體育も一に此の清き精神を以つて行はるゝのでなければ其の本旨に副はないばかりで

なく、却つて有害な結果を招くものであることを了解せねばならぬ。

元來、宗教心——言ひ換へれば、神佛に對する人間の信仰とは、丁度、純眞な子供が慈愛深き親に對するが如き感情を極度に發展し、醇化したものであると見ることが出来る。それ故、例へば、斯くすることが親に賞められ、親を喜ばせる結果になるのだと考へると、然うすることが子供自身にとつても愉快であり満足を感じるのと同様、宗教心を興へられた子供は、善いことをすれば神佛に賞められ、その心に叶ふといふ確信を持ち、進んで之を努めんとするから、長ずるに従つて益々此の信念を鞏固にし其の情操が醇化せられて、遂に、何處までも眞理を辿り理想を追ふこと、而も之を永續的に實行することに於て無上の價值と意義とを見出し且つ絶大の満足と感謝とを感じる體驗を得るに至り、こゝに確固不動の宗教的信仰が築かれ、健全なる人生觀が確立されるのである。是に於て信仰教育は其の目的を達成し得たものと云ふことが出来るであらう。

樂しけれまことの道を踐みわけて

理想の峯に憧るゝ身は

拙き一首はこの心持を詠じてみたものである。

後漢劉蒼の所謂『善を爲す、最も樂し』の氣分や、眞の研究精神、至誠奉公、質實謙虛、勇往

敢爲等の習性は皆之れ内に確乎たる宗教的信念があつて、始めて發揮せらるゝものである。されば我が國民精神の眞髓たる大和魂の如きも亦同じく此の宗教的精神に立脚せるものであることは云ふまでもない。然るに今日の所謂教育は既に指摘した通り主として智識を授くることを能事とし『善を爲すべし惡を爲すべからず』『研究を要す』『努力すべし』など、理窟を教へるのみで之に伴ふべき情操と意志との鍛鍊が甚だ不十分であるから、人は之を面倒に思ひ困難に感じ、喜び進んで實行するといふ氣分と力とが湧いて來ないのである。要するに、人は幼少の折から常に神佛を尊崇し敬虔眞摯の氣分を養ふことに依つて先づ宗教心の素地を培ひ、更に長すると共に組織ある信仰教育と眞正の體育とに力を注ぎ、以つて智識のみならず情意の鍛鍊を併せ全うすることを忘れてはならぬ。此の意味よりして彼の祈禱、念佛の如き習慣も頗る意義あるものと思ふ。

### 明治天皇の御信仰

畏くも 明治天皇には、儲君におはしませる御時より、毎朝清涼殿の御苑に於て、御父君 孝明天皇の御伴を遊ばされ、天照皇大神を始め八百萬の天神地祇に御祈願を籠めさせられしと洩れ承はる。明治天皇の偉大なる御信仰の素地が如何にして御涵養遊ばされしかは、此の御事に

依つても拜察することが出来るのである。

國民は一つ心に守りけり

遠つ御親の神の教を

の御製を拜しても、天祖天照皇大神の御教訓を遵奉せる國民を嘉せられ且つ之を鼓舞し給ふ大御心と共に、天皇御自身は天孫、即ち神の御延長であらせらるゝことを深く御自覺相成り、其の模範を垂れさせ給ふ御信仰の偉大さを伺ひ奉ることが出来る。

千早振る神の御代より一筋の

道を踐むこそ嬉しかりけれ

これは即ち萬代不易の惟神の大道を守らせ給ふことが無上の御満足であり御歡喜であらせられるとの御意に拜せられ、天祖に對し給ふ 天皇の御信仰御憧憬の情の如何に深く篤くおはしましゝかを拜察致されて尊き極みである。

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ

天皇が神靈と御交感遊ばされし高き御情操が表はれ、益々以つて其の御信仰の偉大なりし御有

様が伺はれる。儒教に「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」とあるのも其の意味に於ては同一であるけれども、此の字面には情操の現はれがない、即ち右の御製は「智情」の尊き御發露であるが後者は單なる「智」の表現である、従つてそれより受くる感銘の深さに於て非常な相違のあることを見逃すことが出来ない。

明治二十三年十月三十日御發露の教育勅語は、實に此の崇高なる御信仰に基き 皇祖皇宗の御遺訓として億兆上下其の嚮ふべき所其の實行すべき道を御明示遊ばされたる有難き大經典に外ならない。故に苟も日本帝國の臣民たるものは只管敬虔眞摯の氣分を以て之を拜讀するは勿論、之を拳々服膺して以て聖旨に副ひ奉ることに於て無上の光榮と感謝と歡喜と満足と憧憬とを感ずるやう堅き宗教的信念を體得するにあらざれば、大御心に對し奉り誠に相濟まぬ次第である。

尙其の他多くの御製や尊き御事蹟の數々を拜するにつけても、偏に 明治天皇が 天祖皇祖に對し給ふ高き御信仰と惟神に受けさせられし建國の大精神の御發露にあらざるはなく、實に明治天皇こそは神人合一の大偉人にましまし萬國の龜鑑、帝王の儀表として仰ぎ奉るべき御方である。

基督教を奉ずる西洋諸國では、幼時より祈禱、禮拜等の習慣に依つて宗教的素地を與へ長ずる。

に従ひ組織ある宗教々育を授け次第に信仰を堅實ならしむるやうに仕組んである。殊に獨逸の如きは近年に至るまで、國民は必ず信仰を持つべしとの法律を設けて居つた程である。思ふに、基督、釋迦、孔子の三聖は云ふまでもなく、其の他古來世界の聖賢偉人たる人々にして何等かの宗教的信仰を持たなかつた者は一人もない。之は一々例證するまでもなく、其の生涯を知る者の齊しく認むる所である。近くは彼の米國の大發明家エヂソン翁の如きも、「吾が背後に偉大なる力あり吾をして發明を成し遂げしむ。此の偉大なる力とは世人が呼んで神となすものである。云々」と云つて居る。之を換言すれば『宗教的信仰なき者は偉大なる人格者たることを得ず』と斷定しても敢て差支ないであらう。

獨逸の大宰相ビスマルク公は嘗て我が伊藤公に向ひ「日本に憲法を布くには先づ國民の宗教的信仰がなければ駄目である」と忠告し、又島田三郎氏は或人の質問に對し「現時の日本人は一般に信仰心がないから普通選舉を實施しても恐らく其の効果は擧がらないだらう」と答へたさうである。此等は正に我が國民に對する頂門の一針として味ふべき言葉である。

### 量より更に質の變化

さて宗教的信仰の大切なること——信仰教育に依つて吾々の情操が醇化せられてゆくことは右の通りであるが、此の醇化は量に量の問題でなく亦質の變化でもあることを注意せねばならぬ。例へば次の第三表に示す通り、信仰を得ることによつて、それまで安逸を好んで居た者が労働を喜ぶやうになり、或は贅澤が質素に變り、驕慢が謙遜となるが如きである。其の何ものかを欲求する氣持は兩者同様であるが其の方向は全く正反對である。此の見地より私は假に、醇化された高潔な情操を正(プラス)の情操、醇化されない劣等な情操を不正(マイナス)の情操と呼んで居る。而して修養の如何により其の質が正反對となるのみでなく、其の量にも亦非常な逕庭を生ずることは明かである。心理學者の區分によれば、元來、吾人の情操には宗教的、道德的、智的及藝術的の四つの方面があるが、就中最も大切なものは宗教的及道德的の情操である。智的並びに藝術的の情操も無論必要には違ひないが、少くとも我國現時の有様では特に前二者の方に重きを置かねばならぬと思ふ。即ち此の兩者の結合せる宗教的道德的の情操の陶冶を第一とすることが國民教育上、最大の要件である。其の理由は改めて繰返すまでもなからう。

今叙上の關係を例を引いて説明すれば、恰も物體が引力に依つて一定の方向へ運動し、或は電子が電氣力に依つて特定の活動をなすと同様、人間も亦偉大なる絶對の力即ち神に導かれて始め

第三表

情操の區別例示

プラスの情操		マイナスの情操	
一	労働を愉快に感ずること	一	懶惰、安逸を好むこと
二	利他、親切、奉仕、貢献を喜ぶこと	二	利己、私利を食ふこと
三	質素、儉約、質實、剛健を好むこと	三	贅澤、虚榮、懦弱に走ること
四	贅澤の無自覺を氣の毒に思ふこと	四	贅澤を眞似ること
五	禁酒、禁煙を喜ぶこと	五	飲酒、喫煙を好むこと
六	人の成功を喜ぶこと	六	嫉妬心を起し、人の失敗を喜ぶこと
七	眞の戀愛、眞の愛、神の愛を知ること	七	不純の戀愛、不純の愛に溺ること
八	感謝、報恩の念に燃ゆること	八	感謝、報恩の念に缺けること
九	穩健なる思想の持主たること	九	危険思想の持主たること
一〇	懇懇、叮嚀なること	一〇	無禮不作法なること
一一	眞實の苦學生たること	一一	虚偽の苦學生たること
一二	不潔を卑しみ塵埃紙屑等拾ひ清めざれば氣の済まぬこと	一二	猥りに塵埃紙屑等を打捨て、顧みざること

一三	所謂縁の下の力持たるを厭はぬこと	一三	縁の下の力持たるを嫌ひ虚名を追ふこと
一四	謙虚、遜讓なること	一四	尊大、傲慢なること
一五	智識を活用すること	一五	智識を悪用すること
一六	自覺と覺他とを悟ること	一六	無自覺なること
一七	愉快相な顔色を有すること	一七	不愉快なる顔色を有すること
一八	勿體ないことや罰のあたることを知ること	一八	勿體ないことや罰の當る事を知らざること
一九	感謝の生活を營むこと	一九	不平不満の生活を營むこと
二〇	皇道、徳治主義に立脚すること	二〇	霸道、權力主義に立脚すること
二一	階級不闘争、互に敬愛すること	二一	階級闘争、互に反抗すること
二二	宗教心、信仰心、宗教的信念を有すること	二二	無宗教、無信仰なること
二三	光明の世界に生きること	二三	暗黒の世界に墮すること
二四	人格の高潔なること	二四	人格の低劣なること
二五	神中心の生活を送ること	二五	自己中心の生活を送ること

て永遠の理想を目標とする意義ある生活を爲し得るのである。斯かる宗教的信仰を持たない間は、マイナスの情操に支配せられて自己中心の生活を維れ事とし従つて墮落の道を送りつゝあつ

た者も、信仰の境地に入ると共に次第にプラスの情操に轉化し（或は忽然として大悟徹底することもあり得るが）自ら覺醒して正しき向上の道を歩むに至るのである。而も靈なき物體や電子は、唯外力の支配に依つて無意識に作用するに過ぎないけれども、人間は神中心の生活を目標とし自ら感謝と喜悅と満足と憧憬とを意識しつゝ進んで眞理を辿り理想を追うて止まないものであるから、彼と此とは天地雲泥の相違ありと謂はねばならぬ。人間が萬物の靈長として尊き所以は實に茲に存するのである。

然るに斯く宗教的信仰を以て眞理を辿り理想を追ふことに感謝、歡喜、満足、憧憬を感じる所の生活を爲し得るやうに人格を養成するといふ最も根本的の要訣は、既に述べた如く、我國近時の教育に於ては殆んど等閑に附せられて居る。而も今日の所謂社會不安や國家的難問題の主原因は概ね此處に胚胎せることを氣付く人々の甚だ少いことは洵に慨嘆に堪へない。現代の我が國民は、智識の有無多少に拘らず、一般に利己本位で、犠牲や奉仕を嫌ひ虚榮放逸に流れ、眞理を究め理想を追ふの實行力に乏しく、恰も舵なき舟、轡なき馬の如き御都合主義の生活を送れる人物の非常に多いのは、之れ皆、内に確乎たる宗教的信仰を有たないが爲めであると謂はねばならぬ。今、例へば、酒呑みが酒の害を理窟の上より知り得たとしても、之と共に正しい情意の働きが

足りないならば、到底禁酒は實行出來ないのである。これは其の人の心身が酒を好むやうに馴致されて了つて居るから、此の習慣を棄てるには、先づ其の生理的的心理的作用から改めてかゝらねばならず、唯理窟で抑へようとしても結局駄目なのである。然るに若し宗教的信仰を得て、斯かる有害な行爲を廢止することに愉悅を覺えるやうにプラスの情操へ醇化されるならば、自ら進んで易々と禁酒を實行するに相違ない。世には宗教の力に依つて所謂忽然大悟するの實例も少くないが、これは即ち信仰心の働きに依り腦細胞の生理的的心理的作用に急激な變化を起す結果に外ならないと思ふ。右の禁酒の例で云ふならば、酒を飲みたいといふマイナスの情操が、飲まぬ方が心持が好いといふプラスの情操に一變するのである。此の場合若し他から強ひられていや／＼ながら禁酒するのでは、未だ其の情操はマイナスの域を脱せないものであつて、飲酒の害を悟り自ら喜んで之を廢止するに及んで始めてプラスの情操に醇化されたものである。

懶惰を貪る者と勤勞を好む者、利己を念とする者と利他を旨とする者、他人の失敗を快とする者と其の成功を喜ぶ者、奢侈贅澤を欲する者と質素儉約を尙ぶ者等の如き、全く正反對の性格を生ずるに至るのも畢竟如上の生理的生理的作用の相違に由るのであつて、即ち其の人の情操の正、不正の依つて岐るゝ所以である。他人の補助を受け、或は他家に寄食する苦學生等の中にも

御都合主義的の者と感謝報恩の念を有つて居る者とがあり、彼等の情操は全く正反對で従つて其の人格にも高下の別を生ずるを免れない。又彼の「愛」なる感情にも、マイナスの情操より來る不純の愛と、プラスの情操より來る眞正の愛とがある。『神は愛なり』『博愛之を仁と謂ふ』の如き「愛」は即ち後者であつて、之に反し、家族の迷惑や社會への悪影響を顧みず、只管男女間の我儘なる慾望から發する不倫の戀愛の如きは即ち前者である。(第三表参照)

### 教育の根本大綱

政治、經濟、社會等の凡ゆる問題に關しても如上の相反する二つの動機によつて自ら其の見解乃至對策を異にするものであることを知らねばならぬ。例へば人口問題にしても、唯一途に産兒制限を唱へるのは、即ちマイナスの情操のみを見てプラスの情操を忘れた短見に過ぎぬ。若しも人間が總てプラスの情操を持つやうになれば、むやみな所有慾を捨てると共に擧つて生産業に努力し互に奉仕することを愉快と感ずるに至るであらう。尙又斯かる優れた人種の移植民は世界何れの地に於ても排斥される筈なく否大いに歡迎されるに違ひない。然らば決して人口を制限する必要はないのみならず、却つて其の増加こそは國力の發展を意味するものでなければならぬ。



學者、論客等の中にも自ら叙上の宗教的信仰に依る情操醇化の體驗を持たない人は、とかく智識的のみ物事を判断するが故に非常な錯誤に陥ることが稀らしくない。蓋し情操は體驗に依つて始めて味得せらるゝもので、智識を以て律することの出来ない「心の感じ」である。然るに我國では此の點に對する了解が徹底し難いのは、即ち信仰教育を忽にせる結果であると思ふ。尙序に言ひ添へておきたいのは、種々の研究が夫々専門的分業的に行はれるのは一に便宜上の手段であつて、現實は常に総合的的一般的であるといふことを忘れてはならないことである。即ち一方の専門のみに囚はれて他方を逸したり或は同じ専門の範圍内に於ても凡ゆる方面から周到な考察を遂げなければ、問題の中正なる核心を掴むことは出来ない。之を怠る時は自ら重大な誤謬に陥るのみならず、延いて一般社會を誤ることが少くないのは明かである。而も我國には從來斯かる通弊が認められるから、特に學者、識者等の指導的地位にある者は、最も慎重なる態度を要すると思ふ。之を要するに、人は宗教的信仰の力に依つて始めて完全に其の情操を醇化すると共に、其の品性を陶冶し堅實なる處世的信念を持ち得るのであつて、人格完成の第一要素、人間教育の根本大綱は正に此の點に存することを國民全般に徹底せしめなければならぬ。

今日學者間には、過去及現在の状態より推察して、將來も必然人類の鬭争は避くべからざるも

のと斷定する説があるやうであるが、若し世界各國共に齊しく如上の大方針のもとにそれ／＼信仰教育を十分に發達せしむることを得たならば、各國民の情操は非常に醇化せらるゝと共に世界中が極めて宗教的となり、従つて國際間の鬭争は根絶して完全なる協調友好を保ち、相互に謙讓奉仕の精神を發揮しつゝ全人類社會をして最高理想の文化文明に到達せしめん爲め共同一致の努力を捧ぐるに至るべきことは強ち空想ではあるまいと思ふ。

### 體育に就て

次に體育に就いて一言せねばならぬ。

世間には同様の實例があることと思はれるが、私の知合の或る人は少年時代から中學時代にかけてどうも胃腸が弱く、又屢々頭痛を起し、感冒などにも罹り易かつたので、信用ある醫師に篤と相談したら、今の間に十分運動をやるがよい、成年後になつて始めたのでは効果が薄いといふことを告げられた。そこで彼は十八九歳の頃から學業の傍ら精出して擊劍、柔道、漕艇、野球、庭球、水泳、冷水摩擦、さては種々の労働をさへ試みた。併しながら競技の選手になることなどを目的としたのではなく、只管心身の鍛鍊を念とし、一方のみに偏らないやう心掛け、さうして

大學を卒業した後も之を忘らなかつた。果せる哉、彼の健康は次第に恢復し、勉強も一層よく出来、従つて學業成績も悪くなく、大學卒業後何時の間にか總ての持病が癒り、流感にさへ殆んど罹らなくなり、頭痛だの腹痛などは拭ふが如く消え失せて了つた。胃病の無くなつたのは一つには節食を勵行したことも有効であつたらしいといふ。而も體育の効果はそれのみでなく、彼は次第に意志の堅い、実行力の強い人間となり得たのである。又一方に於て、彼の家庭では特に宗教を重んじて居たので、彼の受けた學校教育では全然此の方面に觸れなかつたにも拘らず、彼の宗教心は次第に啓發せられ段々發達して遂に堅實な信仰にまで成長し、さうして此の情操と、かの意志とが、學び得た知識と相結合して、彼に正しき人生の針路を示し眞の價値ある生活を教へた。今や彼は老境に入つて居るが元氣猶衰へず、幸福なる活動を續け、心中常に感謝と満足とに満ちて居ることを私に語つて共に喜ぶのである。

### 體育の必要と誤解

又一方には斯ういふ實例がある。それは或る學校の校長で、頗る運動に熱心な人であるが、聞く處に依ると、恐らく競技の優劣を重視する爲めか、生徒に或る一種の運動しか許さないさうで

ある。併しこれでは其の運動筋のみは特別に發育するとしても他の表情を司る筋肉などは恐らく發達しないから勢ひ一方に偏し、其の結果は却つて粗暴杜撰の意志薄弱な人間を作る虞があり、體育の主旨に副はないだらうと私は餘所ながら心配して居る。元來運動の目的は種々の筋肉を萬遍なく働かして、全身一様に發達せしむるにあるは云ふまでもない。然るに若しも生徒等が唯優勝を得んとする不純な目的から唯一の競技のみに専念するとすれば、決して眞の體育精神とは云ひ難く、即ちマイナスの情操を馴致する結果となるを免れないのである。尙又同じ校長の飲酒論の如きも到底養成の出来ないものであつて、次の如き錯誤に陥つてゐる。

『純良の酒を少量づゝ服用すれば血液の部分的集積や沈滯を防ぐ効果がある、此の意味に於て酒は良藥の長である。又濕氣を防ぐ爲めとか、或は旅行や運動をした後とかにはやはり少量の酒を飲むことが最も有効な健康法であらうと思ふ。云々』

私は斯かる獨斷的な臆説の爲めに萬一にも世人の禍せらるゝことを恐れるから、左に此の方面の權威者たる醫學博士松浦有志太郎氏が飲酒の害を説明された一節を引證して置かうと思ふ。

『酒精は普通節酒家の用ふる分量よりも遙かに小なる量に於て、既に著しく健康上に害を與ふることは輒近の學術的研究の證明する所である。體重千瓦に對し〇・一瓦の酒精(即ち體重六十

妊の者に酒精六瓦なるが故に大人に日本酒一合の四分の一にも當らぬ程の少量を動物又は人體に與ふる時は其の動物も人體も著しくチフス菌又はコレラ菌の如き傳染病毒に對する免疫力を減殺せられて、其の病に侵され易くなるのみならず同時に其の病に對する抵抗力を減少するものであることは千九百〇九年フィンランド國「ヘルシングフォース」大學のライチーネン教授が多數の動物試験及二百二十三人の人體試験に於て證明する所である。他にも類似の證明をなした學者が少くない。又最近東京北里研究所に於ても柳澤醫學博士は「チフス及コレラ菌の免疫成生に關する酒精の影響」と題して研究成績を發表しライチーネン教授の成績と殆んど一致する結果を齎らしてゐる。要するに極輕微量の酒精（普通節酒家の用ふる量以下の量）と雖も此が血液中に吸收される時は或期間著しく血液の免疫力即ち諸種病患に對する防禦及抵抗力を減殺する事は既に學術的に證明された事實である。コレラやチフス、ペスト等の檢疫又は看護に従事せんとする人が酒を飲んで元氣をつけて行くと豫防の効ありなどと云ふ俗説は全く以て反對の事で反つて罹病の危険を増すものである。猶又ライチーネン教授が六百の動物に就てなしたる試験及人體臨床調査の事實に於て此の如き微量の酒精又は節酒量程度の爲に遺傳的に子孫の身體發育に惡影響を及ぼすものなる事も精密なる調査にて證明されたことである。

勞働後又は運動の疲勞が適度の飲酒に依つて速に恢復し大に健康を補益するといふ自覺を生ずる事は眞赤な錯覺であつて身體の疲勞の恢復は少量の飲酒でさへ反つて著しく妨害せられ翌日に至るも尙完全の恢復を得ざる事は今日總ての生理學者の實驗により證明された所である。其の他陳べ立てれば數多くあるが、筆の上では思ふに任せない。兎に角小生が一人の教育ある人に酒害を説明し其の人が十分納得する迄に進むには少くとも二時間以上膝を交へて双方より腹藏なき意見を戦はす必要があると思ふ。人はとかく自己の常識を以て事を斷じ去らんとする傾向があるが、眞理は必ずしも常識判斷のみによりて決すべきものではない。茲に於て科學の必要を生じ學術研究の必要を生ずるのである。

無線電信電話、潜航艇にて大西洋を横航することや飛行機にて自由自在に乗り廻はることなどは一世紀前の常識にては到底可能性を承認することの出来ない事柄であつたが、今日では論より證據の事實となつた。之れ皆科學の發明に依る處ではないか。酒精の害毒の如きも數千年來唯の一人も眞相を看破するものなく甚しきは百藥の長とさへ稱して賞味したものである。流石に大賢禹王と釋迦とは實に大活眼（？）のもとに之を排斥したが孔手でさへも只「酒は量なし亂に及ばず」などと唱へ曖昧な態度を採られた。今日禁酒の問題は實に人類社會の最大問題であ

つて政治上より經濟上より教育上より道德上より衛生保健上より、どの方面の事業を改造し進歩せしめ整理しようとするに先づ第一に禁酒より着手する事が根本的の必要缺く可からざる基礎事業である。世界を支配し世界人類を其の脚下に蹂躪して惡逆無道至らざるなきものは實に此の酒と云ふ魔王である。云々。(附「酒は何故飲んで悪いか」。32頁参照)

右の校長は立派な人格者であるけれども、惜むらくは科學尊重の念が足りない爲め斯かる過誤に陥つたものであらう。唯精神のみでもいけない、之に科學が結合しなければ完全な結果は得られないのである。同氏の一日も早く所見を改められんことを切望する。又或る有識階級の一老人は自分が青年時代に運動を閉却した爲め今以て其の必要を了解することが出来ず却つて時々運動不要を妄斷することさへあるので、心ある人士に覺醒せられて居る。彼は意志の弱い人だと聞くが洵にさもあるべしと氣の毒に思はれる。時既に遅しの感ありとは云へ、宜しく反省を求めたいものである。斯様な例は他にも稀らしくあるまいが、お互に注意して顧みねばならぬ。又彼の運動競技に於ける應援團なども從來屢々見受くる如き、多數を恃んで不公正なる、相手方に同情なき應援振を爲すことは競技の神聖を傷くるは勿論、之に参加せる各人の良心を癡痺せしめマイナスの情操を馴致して自他共に毒せらるゝ結果となるは明かである。近來盛に行はれる野球、庭球、籃

球、蹴球等の外來競技の性質を吟味してみても、例へば米國等に於ける本來の健全なる運動界では何れも勝敗を最後の目標とせず共同一致の精神を涵養することを本旨として居るは云ふまでもない。又彼の有名な英國の「ケンブリッジ」、「オックスフォード」兩大學の競漕の如きも、人格、學業共に優れ且つ體格も立派で意志の強固な學生を選手に擧げることにして居り、彼等に多大の敬意を表すると共に、全校擧つて此の運動を尊重して居る。それ故、競技中は終始清き精神を保ち飽くまでスポーツマンシップを發揮して意義ある目的を達成し得ると共に其の所謂フェア・プレーの前に敵味方並びに多數の觀衆をして深く感動せしむるものがあり、従つて意志教育のみならず同時に亦情操教育の効果をも併せ收むる結果となるのである。或は又獨逸大學生の決闘に見てもそれは徹頭徹尾止々堂々の闘ひであつて、毫も卑怯の振舞を許さず、勝敗の決は念頭になくして一心身の鍛鍊を主眼として居る。斯くてこそ始めて運動の眞精神を發揮することが出来るのである。古來我國の精華として誇る所の武道も亦固より此の眞精神を根本とするものでなければならぬ。

### 眞正の教育

斯くの如く、清き精神のもとに行ふ體育と不純の精神を雜へた競技とは、其の効果利弊に於て雲泥の相違を生ずるものであるから、此の點に關し常に周到の考慮を拂うて我國運動界の改善を期し眞の體育を奨勵せねばならぬ。之に關して聯想されるのは、彼の政界に於ける理想選舉の運動であるが、若しも有權者の運動が毫も不正の念慮、行動を混へず飽くまで公明正大なる態度と清き精神とを以て終始するならば、選舉の眞使命を完うし得るは勿論、總ての關係者をして其の情意を醇化せしむる上に甚大なる効果を與ふるであらう。又彼の西田天香氏を中心とせる一燈園の同人や其の他種々の修養團體の人々が熱心に實行を試みて居る奉仕勞働の如きも、其の信仰の力と相俟つて情意の練磨を遂げ體驗を積み以つて悟入の域に到達せんとする尊き努力に外ならぬ。此等の事實に鑑み、私は、我國の諸學校に於ても所謂「運動日」のみに止まらずして米國等の例に於ける如く「勞働日」をも設定せられんことを主張したのである。又家庭及學校に於ける行儀作法を始めとし、各個體操、兵式教練、或は實習實驗等苟も筋肉勞働の加はる作業は凡て此の情意の練磨に役立つものであるから、學生々徒は必ず清き精神を以て之に臨むべきは勿論、決して之を懈けたり嫌つたりすべきではない。尙又夏期冬期等の休暇中は天然に親しむにも好機會であるから、此の期間を利用し努めて清く朗かな氣持のもとに或は農業耕作等の家業を助け又は種々の筋

肉勞働を試みるなど、最も適切なる心身の鍛錬法といふべく、若し病氣其の他特別の理由がない限りは、若き青年子女が單なる保養や遊樂的の避暑避寒などを事とするは甚だ面白くないと思ふ。我國近時の教育は遺憾ながら、既に指摘した通り、概ね智育に偏して情意の教育を輕んじ、或は其の方法を誤つて居る。而も一般に之を氣付かないのは、全く以て憂慮に堪へない。現代日本の最大病根は實に此の點に在りと私は斷言して憚らないのである。近時、屢々智識階級より犯罪者を出し或は赤化主義者などの變態的人物を輩出する傾向があるのは、彼等が相當の學校教育を受けながら、智情意三要素の發達が均衡を缺き、其の人格に於て恰も不具的狀態に陥れる結果に外ならずと謂へるであらう。

一體精神の活動とは主に情意の作用を意味するもので、此の情意に智が結び付いて始めて圓滿なる人格の働き即ち眞の精神作興を期することが出来る。言ひ換へれば、科學と精神との結合に依り常に合理的最善の道を辿りつゝ感謝、満足、歡喜の裡に社會の爲めに貢獻することを得るのである。言行一致とか知行合一とかは即ち是でなければならぬ。而して情意の修養は縷述の如く信仰教育及體育を其の第一要件とする。然らば精神の作興も亦信仰教育と體育とを其の根柢とすべきは自ら明白である。



義に立脚して汎く全人類の共存共榮の爲に努力するやうになつたのであります。而も此の社會をば同一體と見做し、各個人は、益々個性を發揮し人格の向上を圖ると共に全社會の爲めに出来るだけ貢献する事に感謝と満足を持ち歡喜と憧憬を感じるやうに、其の素質が段々進歩して來ました。此の感謝、満足を持ち歡喜、憧憬を感じると云ふことが、人間として非常に有意義な尊い情操なのであります。之を要するに吾々は同一體としての社會的には最高理想の文化文明を完成することに最後の目標を置き、又此の社會の一員たる各個人としては理想的の最高人格者に出来るだけ近づくやう、之に憧憬を以て努力するやうに向上して來たのであります。斯様に或る偉大なる絶對の力を信じ最高理想に憧れて、之に到達しようとする感謝、歡喜、満足、の裡に努力する所の精神を私は宗教的精神と稱へ之より生ずる確乎たる信念を宗教的信念と呼ぶのであります。一體宇宙の創成を始めとし生物や社會の進化を考へてみても、どうしても何か或る超自然的超人間的の偉大なる力の働いて居ることを感じ之に對して敬虔眞摯の氣分を覺えずには居られないのであります。斯かる敬虔眞摯の氣分を以て如上の偉大なる絶對の力を信じ飽くまで理想の窮極に向つて精進することに歡喜や満足を感じ感謝や憧憬を覺える所の體驗を持つこと、之が即ち宗教的信仰の本體であると信じます。此の偉大なる絶對の力を普通に神、佛、天、或は絶對者等と呼んで

居りますが、何れも歸する所は同一の觀念でなければなりません。而して此の宗教的信仰は一に體驗によるものであり體驗なくしては到底之を味得することは出来ないであります。此の憧憬と歡喜と感謝と満足とを感ずると云ふ氣分は恰度分り易く云へば、子供が親に對して憧れを持つ情愛と同じで、斯うすれば定めし親が喜んで呉れるだらう、褒めて呉れるだらう、さう思ふと子供自身にも自然に愉快と満足とを覺え一層勉強し働く様になり、又感謝の念をも生ずるに至るものであります。此の情愛を擴大して神に及ぼしたものが即ち宗教的信仰に外ならないのであります。又此の情愛は他人や萬物にも及んで行くこと勿論で、「神は愛なり」「博愛之を仁と謂ふ」などは即ち此の意味であります。孔子の仁も釋迦の慈悲も基督の愛も其の根本を糺せば何れも此の尊い情操に歸着するものであるから、宗教の本體は皆一であると云ふことが出来るのであります。例へば彼のエチソン翁の如き、世間では専ら彼を天才だとして居るが、エチソン自身は、自分の後ろに偉大なる力が働いて、それが自分を支配し斯々の研究を行はせ斯々の發明を成し遂げさせるのだと信じ、非常なる満足を感じ憧憬を覺えつゝ努力するのであるから、最早八十に垂々たる老體を以てして尙且つ四十時間も不休連續的に働いて何等の疲勞を感ぜずに居るやうな一大精力家たることを得るのであります。これに引き換へ左程信念を持たない翁の助手などは、若い癖

に永續出來ず途中で逃げ出すと云ふやうな始末で、信念の有無により實に著しい相違を來すのであります。彼の有名な瑞典の植物學者カール・フォン・リンネ（一七〇七—一七七八年）は「植物を観察するとき其の背後に神の御姿を拜して恐懼に堪へない」と言つたさうであります。又佐久間象山は天の靈寵を得たと云ひ、支那の王陽明も天の靈に依つて良知の學を發見したと稱して居ります。畏くも 明治天皇には御幼少の時より御父君 孝明天皇の御伴を遊ばされ毎朝清凉殿の御苑に於て 天照皇大神を始め天神地祇に御祈願を籠めさせられ、御自身天津日嗣即ち神の御延長であらせらるゝことを信じ給ひ 天祖に對する堅き御信仰を持たせられたと拜承するのであります。これは「國民は一つ心に守りけり遠つ御祖の神の教を」「千早振神の御代よりひとすぢの道をふむこそ嬉しかりけれ」「目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ」「神垣に朝參りして祈るかな國と民との安らかむ世を」「神かぜの伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝まつりごと」「我國は神の末なり神祭る昔の手ぶり忘れなよゆめ」等の御製を拜するも明かなことでありまして、洵に叙聖文武、御聖徳の偉大なるは實に此の確乎たる御信仰より輝き出づる御光に外ならないと拜察せらるゝのであります。又世界の四聖たる孔子、釋迦、耶蘇、ソクラテスは申すに及ばず、その他古來の偉大なる人格者は、皆夫々深き宗教的信仰のもとに確乎たる信念を以て、

終始一貫して居ることを認めざるを得ないのであります。

〔翻て我國維新以後の狀勢を見るに、不幸にして一般世人は次第に健全なる宗教的信仰を失ふの傾向を生じたのであります。明治以來、學者や先輩が世間の迷信邪教を打破し努めて科學を尊重せしむる爲め、百方苦心されたことは誠に結構でありましたが、一面では、角を矯めんとして却て牛を殺すの觀を呈し、大切な眞の宗教心を無視し或は輕視するやうな識者も出て來たことは甚だ迷惑であります。さうして、智識さへあれば宗教などは無用だと誤解する人が段々多くなり、遂に世人の信仰は地を掃はんとする今日の有様に立至つたのであります。政府の法令に依る信教の自由と云ふことは、其の選擇が自由であると云ふ意味なのに、之を「宗教などは無くても宜し」と云ふ風に曲解する人の多かつたことは非常な誤りであります。今日の墮落と不安とを齎したのも其の原因は實に此處にあると私は信じます。嘗て獨逸に留學した或る日本學生の失敗談の如きは、此の缺陷を物語るに十分であります。或る時某席上で獨逸の學生が「世の中に畏るべきものは神以外に何者もない」と叫んだ、すると件の日本學生は、それ以上に偉いことを示さうと思つてか、「私は神をも畏れない」と氣焰を吐いた、驚いたのは獨逸の學生等で、彼は狂人ではないかと怪んださうであります。獨逸あたりで神を畏れぬなどと廣言するのは、狂人か低能か、



將た悪人か、兎に角極下等な人間であることを表明するものであります。斯う云ふ具合に我國近代の教育は人間として最も大切な宗教的信仰の上から見て、實に飛んでもない方向へ脱線するの傾向を生じたのであります。先輩學者の中にも宗教は方便であると考へたり、又は功利主義的に批判したりする人があつて、一般に悪影響を與へ、これが爲め、例へば學問を研究するにしても、研究すれば博士になれる、或は良い地位が得られると云ふ様な、即ち研究を方便と心得て其の奥に眞の尊い意義の存する事を心付かないものが少くありません。併しながら人間の奥に潜める玉の光は何時までも輝かすにはおかないものであります。右の風潮の反動として其の後色々な修養團體が現はれて來たのであります。例へば彼の修養團と云ふ大きな團體は青山師範學校出身の蓮沼門三氏の熱誠なる努力から明治三十九年に生れたものであります。汗と愛と云ふ事をモットーとし、其の修養の根本は矢張り宗教的精神と同一なのであります。全く以て今日の憂ふべき状態を挽回し眞の精神を作興するには、どうしても宗教の力に依らなければ決して其の目的を貫徹することは出来ないと私は信じます。勿論茲に申す所の宗教は迷信や邪教でなく、現代の科學や道德と何等抵觸する所なき健全な正しい宗教でなければなりません。

政界の人格者として知られた故島田三郎氏は熱心な普選論者でありましたが、或る人に對して

「私共は義務として普選を唱道せざるを得ないが、今日のまゝで實際に普選となつたならば我國は却て亂れるだらう、何故なれば我國民には信仰がないからである」と語つたさうであります。嘗て獨逸のビスマルク公も我伊藤公に向つて略同じ様な忠告を與へたと聞きますが、是等は實に頂門の一針であると思ひます。獨逸では大正十一、二年頃まで宗教々育を強制的に小學校からギムネジウムまで授け、日本で修身と稱する所に宗教と謂ふ科目を置くことにして居ました。尙又法律を以て國民は是非信仰を持たねばならぬと規定してあつたやうに聞いて居ります。英吉利では獨逸の如く強制的ではないが、恰も朝起きれば誰でも顔を洗ふと同様、何れの家庭でも信仰を持つ様に習慣づけられて居ります。米國でも之と略同様であります。朝起きれば顔を洗ふのは當然である、猫でも洗ふではないかと誠める様に、信仰を持たなければ氣が済まないものであります。斯う云ふ具合に歐洲諸國では學校教育と相並行して、家庭及學校に於ける宗教々育を怠らず、更に之に適當な體育を加へて鼎足教育を施すやう努力して居るのであります。即ち子供の時分から常に此の三方面の教育を融和させることに依つて、人格の要素たる智情意の圓滿なる發達を與へることが出来るのであります。然るに我國では學校教育は主に智育の方のみで十分と心得、宗教々育などはなくてもよいものだと思つて居る人が多いやうであります。或る都市の警察署長か

ら聞きましたが、其の都市の一部に就て戸別調査を行つた結果によると、其の八割位までが佛壇も神棚も備へて居ないさうであります。以て全般を推すことが出来ると思ひます。宗教なき國、宗教なき家庭は亡ぶと云ふ外國の諺を思ひ出すだけに私は全く寒心に堪へないのであります。

又嘗て或る獨逸人に「あなたの國で信仰を持つて居る人はどの位ありますか」と聞いて見ました、先づ之を勞働者に聴くと「五十%以上」と答へ、紳士に聴くと「九十%」と答へました。更に英國人に聴くと異口同音に「九十%位」と云ひ、瑞西人は「九十五%位」と云ひました。外國へ行かれた事のある方は御承知でせうが、英米の學校には必ず禮拜堂があつて、宗教的な氣分を養ふやうにして居ります。英吉利の家庭などでは日曜日に其の家族と共に宗教的修養に加はらないと御機嫌が悪い位であります。又外國では一般に少しの物品でも決して粗末にしない、其の理由は「神様の物であるから出来るだけ有効に使はなければ相濟まぬ」と云ふのであります。當今日本人中斯様な心掛けのものが果してどれだけありませうか。先年の大戦争に際し英國の大學生は殆んど學校を空にして志願兵となり従軍しました。其の氣分も亦宗教から來て居るものと思ひます。斯う云ふ具合に先進諸國では宗教的情操を養ふと云ふ事が盛に行はれて居るのに、我國では却つて之を無用視し、學校教育だけで教育が盡せるかの如く考へて居る人が多いのではありま

すまいか。若し然うだとすれば、我國は維新前まで持つて居た最も大切なものを取落してしまつた譯で、何といふあわてた新教育であらうかと私は遺憾至極に思ふのであります。これは一日も早く取戻さなければならぬ。第二の維新としては是が最大の急務であると私は断定したいのであります。而して學校教育に於ても其の幾分は實行することが出来るが、大部分は學校以外殊に家庭の覺醒に俟たなければならぬと信じます。

人格の向上は智情意の圓滿なる發達にあることは既に述べましたが、釋迦、孔子、耶蘇、ソクラテス等の如き偉人は皆此の三要素が非常に發達した人格者であつたに違ひありません。今此の三つに就いて、假に智識を $x$ で表はし、残りの二つなる情意を $y$ で表はし、其の人格價值 $z$ を假に兩者の相乗積 $xy$ で表はすことにして數學的に説明すると分り易いかと思ひます。此の内 $y$ はプラス又はマイナスの値を有するものであります。人格の大部分は此の $y$ 即ち情意の發育によるのであつて、これが人間精神の主要部分を成すのであります。 $x$ なる智識は學問研究の結果であつて、廣い意味の科學——自然科學ばかりでなく精神科學とか文化科學とか稱する凡ての方面を含む——に關係するものであります。此の $x$ や $y$ が大なる程人格價值 $z$ が大となることは明かであります。而して智識、情操、意志の三つは事實上引離すことの出來な

いもので、言ひ換へれば科學と精神との結合によつて人格が成立つわけでありませぬ。

智識の教育は云ふまでもなく、主に學校に於て與へられる。情意の教育も學校に於て閑却することは出来ないけれども、これは主に信仰教育と體育とに依つて與へらるゝものであります。而して信仰教育は情育を主として意育を従とし、體育は意育を主として情育を従とするものであります。情操は言ひ換へれば内心の感覺であるから一に各人の體驗に俟たねばなりません。例へば單なる味覺としては萬人等しく甘く感ずる砂糖も心の感じの上からは人によつて好嫌があり強弱があつて且つ其の程度も一定して居りませぬ。即ち其の量にも質にも各人の體驗次第で著しい相違があるのであります。従つて之を數學的に取扱へば量の大小と同時に質の異同をプラス・マイナスの符號によつて表はすことが出来るわけでありませぬ。要するに、學校教育、信仰教育及體育は恰も鼎の三足の如く、人格の修養上缺くべからざる三要素であると、私自身の體驗からしても確信するのであります。

更に之を生理的に説明すれば、智育は大脳皮質の發達であつて所謂理智を司るものであり、情育は腦、脊髓、神經、血管、内臓（機關及腺）及大小筋肉（主に表情筋）の鍊磨であつて情操を養ふものであり、意育は腦、脊髓、神經、大小筋肉等の鍛鍊であつて意志を鞏固にし實行力を賦與

するものであります。智育としての我國の學校教育は必ずしも歐米に劣つて居るとは思へませぬが、信仰教育及體育に於ては甚しく不十分なるを感ぜざるを得ないことは既に指摘した通りであります。例へば我國大學の學科の程度は歐米諸國の大學に比し比較的高く、其の分量も割合に多いと思はれる。又野上文藝博士が先年海外視察を了へて歸朝せられた時の御話によつても、我國に於ける小學校の組織、教材等は決して外國に劣つて居らぬさうであります。それで若し日本及歐米の同程度の學校の學生に就いて學科試験を行つたと假定したならば、大體に於て恐らく日本の學生が一番好成绩であらうかと思はれます。然らば之を以て直ちに人格價值が優つて居ると見做すことが出来るかと云へば、残念ながら即答し兼ねるのであります。何故なれば此の試験と云ふものは人格の寧ろ一小部分たる智識の如何を示すに過ぎない、人格の主要部分たる情意に至つては果して優つて居るかどうか、之は未だ不明だからであります。歐米諸國では信仰教育に依つて清き精神を養ひ、此の清き精神のもとに體育を行ふことに依つて生理的・心理的醇化を與へ、以て次第に心身の鍛鍊を重ねるやう仕向けて居るのであります。即ち人體の發育期に於て智育ばかりでなく、適當な信仰教育及體育に依つて之に適應せる生理的・心理的醇化が與へられ、此の清き精神のもとに行動することを満足と感ずる様な修養を積むことを以て眼目として居るのであります。

す。然るに我國では宗教を輕んずる爲め、兎角精神が不純になり易く、所謂體育はあれども競技本位で勝敗に囚はれ、而も不純の精神のもとに之を行ふものが少くない故、従つて之に順應せる生理的心理的悪化を起し心身をして益々劣化せしむることゝなるのであります。之を放置するときは、小學校時代よりも中學校、それより更に高等學校と上級に進む程弊害が重なり、斯くて大學を出づるや、社會は一層此の弊風が甚しい故益々之を助長し、遂に高等の智識はあれど其の人格の低級なること驚くばかりの人物が現はれるに至るのであります。而して斯様な傾向の著しくなつた結果が遂に我大學令の改正を餘儀なくせられ殊更「人格の陶冶及國家思想の涵養」なる文句を附加せざるを得ざるに至らしめたものと、ひそかに遺憾に存する次第であります。一體先輩識者の中に往々宗教を輕んずる態度を示すものがあるため後進の青年達は益々此の謬見を追うて宗教を迷信の如く誤解し信仰を持つものが少くなるのであると思はれます。又先輩者の中に體育の本旨を解せざるものもあり甚しきは其の不必要を唱ふる人さへある。之が爲め眞の體育が行はれ難く、而も運動が青年の一小部分に局限され勝なのは今日の状態であります。それ故感情の醇化とか鞏固なる意志の鍊磨とか云ふことが實に覺束ない有様となつてしまひました。それと同時に私は外國で餘り聽かない言葉が我國にあることを思ひ出さすには居られません。それはどう云ふ

ことかと申しますと「理想と實行とは別だ」と云ふ言葉であります。日本の或る紳士が外國人に向つて、「それは理想」だと云つたら、外人が「理想なら直ぐ實行したら宜いではないか」と反問した。處が彼は「理想と實行とは別問題だ」と云つて済まして居たので外人は大に驚いたと云ふ話があります。それと云ふのも、元來、日本人は頭は確かに良いけれども、宗教と體育とを忽せにして居る爲め、心身の鍊磨が不十分である結果、意志が弱く實行力が乏しくて理想に邁進することが困難なではありませんまいか。即ち情意の鍛鍊が不十分な爲め、何となく恐ろしく感じたり心配になつたりして、立ち所に斷行の決心が附きかねるのでありませう。情操が劣等であれば智識は却つて悪用される處があります。夫々専門を學んで種々の職業に立派な地位を占めて居る智識階級の人士が往々其の體面に拘はるやうな不徳義を敢てするのも恐らく此の爲めで洵に悲しむべき状態であると同時に、一般社會が此の方面を閑却して居る點から見て單に其の人だけを攻むるのは寧ろ氣の毒であると思ひます。名刀か兎刃か、藥か毒かを決するのは一に其の人の精神即ち主として情意の如何に依るのであります。斯う云ふ意味に於て時代に相應しい健全なる信仰教育及體育が極めて必要であることを強調せざるを得ないと同時に、之を忽にして居る我國の家庭、學校、社會等の教育の罪は決して輕くないと申さなければなりません。

世の中には精神の大切なことは知つて居ても、宗教の大切なことを眞に悟つて居る人は如何程あるでませうか、又鞏固なる意志の必要は知つて居るけれども、是は主に正しい體育に俟たねばならぬと云ふ事を知らない人も少くないかと思はれます。そこで此の誤れる我國の現状に慨嘆し其の缺陷の奈邊に存するかに氣付いた人々は決然起つて情意の錬磨に主力を注ぐ爲め色々な修養團體を興して居るのであります。例へば報徳會、一徳會、一燈園、修養團、青年團等を始めとし、道會、佛教青年會、基督教青年會等は皆斯うした目的を有するものに外ならないと思ひます。此等の團體の所謂奉仕労働の如き全く如上の體驗を主眼として居ることは明かであります。唯斯様な團體の注意すべきは、我國の現状に照らして特に情意の鍛錬に重きを置くことは洵に結構であるが、一方智識を無視するやうな傾向を生じてはならないことでもあります。即ち前に申した精神と科學との融合を忘れてはならないことでもあります。又之と反對に、學者の側に於て學問さへ出来れば宜いと云ふ考へで宗教や體育を輕んずるやうであつたならば、第一流の研究者は出来なかつたかと思ひます。假令頭は良くても御都合主義に左右されたり體力が續かなかつたり意志が弱かつたり熱心が足らなかつたり、何となく氣後れや心配を感じたり、多病だつたりして實行が伴はない結果になるだらうと思ひます。斯くの如きは眞の研究精神、眞の研究家と稱することは

出来ないのであります。單に頭が良く學問が出来るのみならず、同時に情操も高潔で意志も強く、體力も優れ、さうして何處までも理想を追及し眞理を探討することに憧憬と満足と歡喜と感謝とを持つ氣分の人であつてこそ、眞の研究精神を發揮することが出来、眞の研究家たることを得るのであります。されば古來の聖賢たる人々は皆頭も非常に宜しいし意志も甚だ鞏固で感情も大いに醇化せられた代表的の人格者であつたに違ひありません。

次に我國では、職業が分業的の専門的であるが爲めに實際を総合的に考へることを忽にする弊が見受けられます。即ち學問や研究は便宜上専門的となつて居るが、現實は総合的のものであることを忘れて居る人も少くないやうであります。例へば經濟學と云ふものでも、之を實際に適用する上に於ては、必ずや他の科學とは勿論、精神的方面とも合致せしめねばならぬ筈である。科學と精神との合致とは即ち此の事でありませう。又能率と云ふことなども今日普通言つて居る所は科學的能率のみである。これで實際上十分であると考へるならば思慮の足りないものと謂はなければならぬ。實際の場合としては、精神的能率をも附け加へなければならぬ。長壽法でも亦然りであつて、單に科學的方法のみでなく精神的方法乃至宗教的方法をも考へなければ不十分でありませう。科學者は科學的に専門を研究するのであるが、研究其のものゝ實際を分析すると研究方法

と研究精神とがある。即ち科學と精神とが結合して本當の研究が出来るのである。研究方法は科學即ち智識であり、研究精神は主に情意に外ならないのであります。然らば研究精神も亦信仰教育と體育とに俟たなければ完全に之を養成することを得ないのは明かでありませう。

元來感情には正反對のものがある。例へば酒を飲んで美味しいと云ふ人と美味しくないと云ふ人がある。又同じ人でも酒が美味しい時もあれば、風でも引いて熱など出ると、酒は不味く感じられるのです。即ち各人の生理的・心理的狀態によつて、同一の事物に對しても、感情の働きが正反對になるのであります。之を假に數學的に云へば、前述の通り、 $y$ にプラス、マイナスの符號が附くわけで、又其の量（程度）に於ても逕庭があるのであります。某國の議會では、新代議士が處女演説を試みる時他の議員達は之を彌次つたり冷評したりして痛快がる風があるに反し、英國の議會などでは、特に其の人の初演説に對しては決して妨害など加へず滿堂靜かに之を謹聽する。さうして其の演説が終るや舉つて握手を求め彼を祝福して共に喜ぶ氣風があると聞いて居ります。即ち兩者の快とする性質は正反對である。一方は冷笑して快とするのであるから惡意が含まれて居るが、他方は祝福して快とするのであるから善意から起つて居ります。私は前者をマイナスの感情或は情操と呼び、後者をプラスの感情或は情操と稱して居ります。而してプラスは正、マイナスは不正と解釋し、且つ數量がマイナス無限から零を経てプラス無限に至るが如く、人の感情にも無限の相違があります。例へば極惡非道の人間はマイナスの情操の甚大なるものであり、聖人君子の如きはプラスの情操の偉大なるものであります。彼の耶蘇がユダに裏切られたにも拘らず、之を責めずに、其の幸福を祈つたと云ふが如きは實にプラスの情操の絶大なりしことを證據立てるものであります。又法然上人が父を討たれて其の復讐を止め却つて宗教の力に依つて其の敵を改心させ救済しようとする努力したのも、斯かる尊き情操の働きであると思ひます。其の他に類する實例は少くありませんが、常識的のことを二三申添へますと、怠けて樂をすることを愉快と考へる者と働いて苦勞することを満足に感ずる人とあり、他人の爲めに親切を盡すことを面倒に思ふ者と之を氣持よしとする人とあり、贅澤虚榮を好む者と質素儉約を喜ぶ人とあり、平氣で紙屑や吸殻を道に捨てる人があるかと思ふと之を拾うて清潔にしなければ氣の濟まぬ人もある。即ち其の情操は全く反對なのであります。而して一方は清からざる精神と行爲とを繰返して居る中に何時しかそれに順應した生理的・心理的變化を馴致して情操が益々劣化せられ、他方は之と反對に、清き精神と行動とを續けることに依り一層心身が醇化せられ、それに適應して行くのであります。所謂習ひ性となるとは此の事でありませう。さればこそ幼少の時より努

スは正、マイナスは不正と解釋し、且つ數量がマイナス無限から零を経てプラス無限に至るが如く、人の感情にも無限の相違があります。例へば極惡非道の人間はマイナスの情操の甚大なるものであり、聖人君子の如きはプラスの情操の偉大なるものであります。彼の耶蘇がユダに裏切られたにも拘らず、之を責めずに、其の幸福を祈つたと云ふが如きは實にプラスの情操の絶大なりしことを證據立てるものであります。又法然上人が父を討たれて其の復讐を止め却つて宗教の力に依つて其の敵を改心させ救済しようとする努力したのも、斯かる尊き情操の働きであると思ひます。其の他に類する實例は少くありませんが、常識的のことを二三申添へますと、怠けて樂をすることを愉快と考へる者と働いて苦勞することを満足に感ずる人とあり、他人の爲めに親切を盡すことを面倒に思ふ者と之を氣持よしとする人とあり、贅澤虚榮を好む者と質素儉約を喜ぶ人とあり、平氣で紙屑や吸殻を道に捨てる人があるかと思ふと之を拾うて清潔にしなければ氣の濟まぬ人もある。即ち其の情操は全く反對なのであります。而して一方は清からざる精神と行爲とを繰返して居る中に何時しかそれに順應した生理的・心理的變化を馴致して情操が益々劣化せられ、他方は之と反對に、清き精神と行動とを續けることに依り一層心身が醇化せられ、それに適應して行くのであります。所謂習ひ性となるとは此の事でありませう。さればこそ幼少の時より努

めて良習慣を養ふことが大切であり、又既に不純の情操を馴致して居るものを轉向させることは普通には中々困難なのであります。宗教の力に依るときは、遂に之が實現されるのであります。極悪人が宗教的に大悟一番して大善人に轉化するが如きは其の最も顯著な適例で、これは確かに生理學的にも説明が出来るのであります。學者の説では情操を四大別して宗教的情操、智的情操、道德的情操、藝術的情操としてありますが、少くとも我國の現状では宗教的道德的情操が最も重要であることは前述した事情によつて明かであります。無論他の感情も大切であります。先づ根本に宗教がなければ藝術も道德も科學も遂に墮落する虞があると思ひます。要するに宗教は徹底的に感情を醇化して、マイナスの情操をプラスの情操に一變せしむるものであります。斯の如くして所謂縁の下の力持ちはつまらぬと思つて居た人も、之に深き意義を感じる様になり、如何なる職業も皆天の使命を果しつゝあるものだと思つて満足を感じ忠實に働くこととなるのは皆御都合主義、打算主義を離れて理想主義に憧れる、清き情操を得るが故であります。

又各人の趣味嗜好なるものも、其の情操の純、不純、正、不正によつて自ら高下の岐れるもので、宗教的道德的情操の豊かな人は其の趣味嗜好も亦自ら高潔であり、然らざる人は劣等たるを免れないのであります。

今譬へに依つて更に宗教の力を説明して見ませう。物體に引力が働けば一定の方向へ落ちる、或は電子に電氣力が働けば一定の方向へ運動する。所が物體に對して引力がなく、又は電子に對して電氣力が働かなかつたならば、それ等は恰も舵なき船の如く全く目標が定まらずして何處へ行くやら分らない。人間も亦同じ事で宗教的の或る絶對な力が働かないと吾々は兎角御都合主義、打算主義に流れてしまひます。然るに偉大なる宗教の力が人間に働くと、人間はやはり一定の方向へ進む様になる。即ち何處までも理想を追ひ眞理を辿り神の道を目指として生活するやうになるのであります。而も物體や電子は外部の力によつて唯無意識的に一定の運動をなすのであるが、人間は意識的に自ら進んで眞理を究め理想を追ふことに感謝と満足を感じ歡喜と憧憬を覚えるのであります。此の偉大なる絶對の力は之を神の力と謂ふことが出来ませう。之を信じ此の力に縋つて精進努力する所に宗教が生るのであります。人間が萬物の靈長として禽獸や無生物と區別せらるゝ所以も一に此の宗教の有無によるものであります。孔子は多年の修養鍊磨により五十歳にして天命を感知し七十餘國を遊説して萬民教化に力を捧げました。其の當時陸通を始め四人の隱者があつて孔子に向ひ「そんな事はやめて我々と同様隠棲なさい」と勸めたが孔子は「獨り清うすれば大義に反する、君と世とに仕へるのは其の義を行はんが爲めで、たとへ道が行れず

とも天命に背くことは出来ませぬ」と答へて熱心に遊説を續けたのであります。右の隠者達は其の智識に於ては決して孔子に劣らなかつたかも知れませんが、恐らく情意の方面が不十分であつた爲め遠く孔子に及ばなかつたものと思はれます。されば、學校に於て學生々徒に對し専門的智識を授け研究の方法を教ふると共に、彼等をして最後の理想の爲め感謝と満足、歡喜と憧憬を以て眞理の追及に従ふといふ情意の鍛鍊を體驗せしむることが非常に大切であり、之が即ち眞の研究精神を與ふる所以であつて、單に理窟や智識を注入するのみが眞の教育ではあり得ないことを了解せねばなりません。此の見地より我國の教育が奈邊に其の缺陷を有して居るか、説明を俟たずして自ら明瞭でありませう。

今、學校に於て人格の高い教師が倫理を講ずるとすれば、生徒は自然に感激に打たれて之を謹聽するでありませう。斯かる場合は智育のみでなく情育も亦行はるゝわけであります。何故なれば生徒は感激によつて清き精神の發動を覺え所謂肉躍り血湧き或は涙流るゝの情を禁じ得ないものがあるからである。更に此の感動より實行にまで進むならば意育も亦遂げらるゝ結果となるのであります。之に反し、若し教師の人格が低く生徒の信頼が薄いならば、其の講義は單に理窟として生徒の腦裡に映するに過ぎないから、何等の感動も與へず、精々、智育の役目を果す位に過ぎないでありませう。而して教師の人格が生徒に感化を及ぼすことは、常に倫理學の専門家のみに限らぬことは申すまでもありません。

次に信仰教育に就いて見ますに、例へば基督教に於ては、少くとも毎日曜日に信徒は教會に集まり、バイブルを讀み讚美歌を歌ひ祈りと誓ひとを繰返すことが習慣であります。即ち彼等は神に對する清き心を以て感情を洗ひ淨めると共に、誓ひを實行することに依つて意志をも鍛ひ強めるのであります。又家庭に於て朝夕神佛を拜し、皇室を崇め、祖先を敬ひ、其の前に感謝と誓約を捧げる習慣をつけるが如きも有效なる信仰教育であります。斯くの如くして絶えず眞摯敬虔なる氣分を養ひ不斷の實行を計るならば、それに順應して次第に生理的・心理的變化が與へられ情操が醇化して益々善行を容易ならしむるやうになるのであります。我國でも明治維新前後までは、勿體ないとか罰が當るとか云つた敬虔な氣分が、一般社會に認められたのであります。其の後宗教を輕んずる風潮を生じてからは自然に斯様な觀念が消え失せて、今や佛壇や神棚さへも備へて居ない家庭が多く、又儀式は形式だと云つて之を廢したり、三大節の遙拜にも參加しない人達が少くありません。それ故、君が代を歌つたり教育勅語を捧讀したり神佛を禮拜したりする機會は殆んど無いやうな生活を營むものが非常に多いのであります。斯様な有様であつて、どう



して眞の信仰教育を期待することが出来ませうか。

更に意育に就て一言附加へて置きます。意育は主に體育に依つて與へられることは既に述べた通りであります。古來、武備ある者は必ず文備なかるべからずと云つて、文武は人格の修養上分つことの出来ない兩要素とされて居ります。それ故、若し文のみで武を知らないものは理窟だけは云へるが柔弱に流れ意志が弱く實行の伴はない缺點があり、又武に偏して文を解せないものは粗暴に走り非科學的となるの弊害があります。所が維新以後は文即ち智識に偏して昔の武に當る體育に冷淡であり従つて運動を重んじない大學生等が少くない有様となりました。一般に強壯なる體格を有する英國でさへ、文相フィツシャーの發案に依つて大戦中教育令を改正し、一層體育を奨励することにしたのを見ても其の目的の奈邊に存するかを窺はれるであります。而して體育も亦宗教の力に依つて與へらるゝ清き精神を其の根柢としなければなりません。即ち不純な心を捨て眞摯なる氣分を以て運動や勞働を行ひ且つ之を繼續することに依つて心身が正しく鍛錬せられ意志が鞏固となるのであります。それ故、生理學上より見ても、先づ幼少の時から適宜の運動を必要とし、段々思考力の附く十二三歳頃から大學卒業頃迄の間は特に積極的に體育を盛にすべきもので、更に學校卒業後に於ても適度の運動を怠つてはならない。さうして、それは徹頭徹

尾清き精神のもとに身體の各部に亘り過不足なき發達を與へることを念としなければならぬ。然るに我國現時の運動競技は兎角勝敗に熱中するの餘り往々不純の精神を伴ふものあり、又運動が一方に偏する爲め粗暴杜撰に陥る虞があるやうに見受けられることは甚だ遺憾であります。故に一つの運動のみに凝り固まることなく、成るべく各種の運動や筋肉勞働を試みることを肝要であると思ひます。而も只今申す通り何處までも清き心を以て終始することを忘れてはなりません。運動家中に往々粗暴な人物の出づるのは、純ならざる心で一方の運動のみに偏し細かな筋肉の鍛錬を缺いた結果であると思ひます。何でも競技に勝ちさへすれば宜いと云ふやうな氣持で卑怯な眞似をしたり、又應援團が多數を恃んで敵の選手を妨害したりするやうなことは、毫も心身の鍛錬とならないのみか却つて其の弊害恐るべきものがありませう。之に反し嘗て某高等商業學校の學生が教官排斥を計畫した時、幸に一人の學生が雄々しき宗教的信念の下に斷乎として之に反對し、多數の學生も其の勢に辟易した結果遂に其の企が中止された美談がある。斯くの如く眞に宗教の力に依つて氣概のある人物を一人でも多く養成することは、國家社會に取つて最も重要なことでもあります。所謂スポーツマンシップの模範とせらるゝ彼のオックスフォード、ケンブリッジ兩大學の競漕の如きは、最もよく智情意の發達した人格者たる學生を選手に擧げるから、其の競技は

實に正々堂々たるものだとのことです。又米國大學の自慢とするバスケットボール、ベースボール、フットボール等の如きも勝敗を目標とせず共同一致の精神を養ふことを第一義として居る様であります。私は往年獨逸大學に在留當時、學生の決闘組の客員として決闘の見物に参つたことがあります。それは他の決闘組との間に番組を作り、郊外の建物内で行ふのでありますが、手にサーベルを持ち保護具を着け、兩人對立して、一定命令の下に決闘する。其の間毫も足の位置を動かさず徹頭徹尾嚴正に勇敢に闘ひ、所定のコースを成し遂げ、勝敗は問題として居りません。血は天井に飛び散り床上に流れ實に壯絶凄絶を極めますが、側には醫師及看護婦が居つて一々其の傷口を検査し、生命に危険がなければ其の儘決闘を繼續せしむるのであります。併し稀には死に至ることもあるので遂に政府は法律を以て之を禁止いたしました。兎に角其の決闘は飽くまでも正々堂々たるものであります。斯う云ふ具合に眞の體育は心身の鍛錬であつて、それは主に意育であると同時に又情育ともなるのであります。

之を要するに、幼少の時代より始めて常に家庭は勿論學校に於ても社會に於ても將た又自身自身としても、智育のみならず信仰教育及體育に對して十分力を注がねばならぬ。されば家庭や日曜學校等に於て神佛を始め 皇室、祖先等に對し毎日行ふ所の禮拜、感謝、誓約、報恩等の宗教

的薰陶に依つて信仰生活の素地を與ふるは勿論、更に長ずるに従ひ適當の組織ある信仰教育を施すことを忽にしてはならないと思ひます。

大正五年私が歐羅巴へ参りました當時、獨逸、瑞西等では家庭に於て宗教を重ずることは勿論小學校及補習學校に於ても滿十六歳頃までは義務的強制的に宗教教育を授け新教の生徒は新教の牧師に、舊教の生徒は舊教の牧師と云ふ具合に組を分つて、何れも同じ「宗教」の時間に夫々説教を聽くことになつて居ました。又英國では少くとも年長の大學教授達は何時も講義を行ふ前に數分間、學生と共に神に默禱を捧げた後、講義を始むるを例とすると云ふことを聞きましたが、これは我東大教授寛博士が必ず皇城を拜し「彌榮」と叫び、而して後講義を始められたといふのと思ひ合はされて洵に感銘に値するものがあります。斯くの如く歐米の状況に照らし我國の實狀を顧みて、信仰教育及眞の體育の最も緊切なる所以を痛感すると共に、各専門學術の研究に於ても亦、兎角陥り易き自己中心の弊風を打破して全く正反對なる神中心即ち 皇室中心の目標のもとに、勇往邁進する所の眞の研究精神を與ふることが指導教官たる者の重要責務の一たることを、私自身の既往の體驗よりしても、確信を以て斷言せざるを得ないのであります。幸に愚見に對し識者の批正を辱うし一般社會の参考に資することを得ば光榮の至に存じます。(大正十四年十一月)

## 眞 劍 味

## 情意の働き

人間の力には限りがある、といふことは、人間が全能の神様でない以上、誰にも異存の無い結論であるが、さて、それなら、他人のことは措いて、自身に、その手腕力量の限度が臆測出来るかといふに、出来る、と断言し得る人は恐らくあるまい。何故なら、人間は異常に眞剣になると、平生はとても不可能と思はれる事柄を見事にやつてのける場合が屢々あるからである。譬へば、スワ火事といふ際に、日頃、抱えることは愚か動かすことさへも出来ない重い荷物を夢中で運び出したなどいふ實例は左程珍らしくない。又、愚鈍な人間が一朝發奮の結果、世を驚かす大仕事を仕遂げたなどの快事も吾々は可なり見聞きしてゐる。まさか、あれほどの力があらうとは我ながら思ひがけなかつた——さうした他人の述懐や自身の經驗に思ひ當る人は随分少なくないであらう。猫を噛む氣力ありとは、窮するまで鼠自身も思ひ設けぬに違ひない。常識では一寸受

取れぬやうだが正に争へない事實である。

それでは、左様な不思議な力は一體どうして出て來たのであらうか。それは他でもない、前にも云つた通り、極度の眞剣味が然らしめたのである。言ひ換へれば、異常な精神力即ち主として情操と意志との働きの因つて之に適應した生理的的心理的變化が起り、——人が怒ると其の血液内に特殊の血球が出来る（秦政治郎氏の研究）といふ事實の如きは此の一例である——依つて以てその事柄を可能ならしめたのである。然り、此の精神力——これこそ人間の活動力の源泉なのであつて、同一人でも其の精神力の強弱により爲し得る仕事の大小が岐れるのである。即ち、大事業には必ず大精神が付き添うてゐる。精神が弛んでゐて碌な仕事の出来たためしがあらうか。實に、人格の主要部分は精神即ち主に情意に在るのであつて、智識は寧ろ二の次ぎに屬する。況んや金錢物資の多少などは抑も末である。「精神一到何事か成らざらむ」——言葉は古いが眞理は竟に動かすことが出来ない。

## 宗教的 信念

既に、それほど精神力の力が大切であるとすれば、次に起る問題は、如何にして之を養ひ保つて

ゆくかといふことでなければならぬ。前の例のやうに、人間は變事に出會つて意外の働きを爲すことはあるが、しかし、それは大抵一時的で、いつも、さうした眞劍味を保つことは、中々むづかしい。ともすれば精神の緊張を缺いて、易い方へ楽な方へと傾きたがる。従つて、大なる事業は更なり、自身の當然の實力をすら現はすことが出来ないで、甚しいのは全く醉生夢死の生涯に終つて了ふ。これは人間として何たる情ないことであらう。故に、吾々は是非共、常に活々とした精神を持ち続け元氣一杯に働いてゆく習慣をつけねばならぬ。但し、茲に眞劍になるといつても、間違つた慾念や悪い目的の爲に血眼になるといふ意味では勿論なく、世の中を利益し人間を幸福にする爲の努力でなければならぬことはいふまでもない。要するに、正しい善い目的の爲に眞劍になつて奮勵する、これこそ、ほんたうの人間の生活である。人生の眞の意義も價値も將た幸福も、これ以外の所に斷じてあり得ない。何故なれば、さうした人のみが、常に光風霽月の心持で俯仰天地に愧ぢない正々堂々の生活を爲すことが出来るからである。

で、どうすれば、此の優れた精神力を持ち続けられるか、いつも眞劍でゐられるかといふのが今の問題である。私は茲に又もや私の持論を繰返さねばならない、即ち、それは、情操を醇化し意志を鞏固にして確乎不拔の宗教的信念を養ふにあるといふことである。而して、私のいふ宗教

的信念とは既に度々述べた通り、神、佛、天、或は絶對者等何れの觀念でもよいが、とにかく、超自然的超人間的の或る偉大な絶對の力の存在を信じ、此の力の啓示する方向、即ち人類としては文化文明の無限の發展に向つて、出来るだけ大なる歩を進めること、言ひ換へれば、眞理を辿り理想を追ふことに無上の満足と歡喜と憧憬と感謝とを感じ、此の目的の爲には、どんな難儀も厭はず、それに打克つて、どこまでも努力せずには措かぬといふ精神を確かりと掴むことである。更に言葉を替へていへば、世界の文化、人類の幸福の爲に力を盡すことは取りも直さず神の意圖に奉仕する所以であり又その偉大な仕事に参加させて頂くわけなのであるから此の上の満足は無い、實に嬉しい、有難い、勉め勵ますには居られない、といふ純一眞摯な心持を以て愛の力、慈悲の光——尊い情操——を益々發揮することである。此の信念が根を張り枝を擴げて、そこに、人間相愛の美しい花も開き共存共榮の大きな果も結ぶのである。

如上の宗教的信念こそは、實に、吾々の精神に異常な力を與へる。何故なれば、吾々は最高絶對の者によつて導かれ且つそれに仕へてゐるからである。換言すれば、即ち、宗教心即ち信仰心に依つて生ずるエネルギーの異常な活動に他ならない。之に由つて常に生々とした元氣が出る、何ものをも怖れない氣概が湧く。従つて、そこには永遠の生命が働き、不滅の事業が営まれる。

基、釋、孔の三聖は云はずもがな。古往今來、何れの方面を見渡しても、眞の偉人として仰がれる大人物の面目に此の宗教的信念の烈々たる光彩を認められないものがあるだらうか。

### 宗教心の必要

人間に宗教心の必要なことを、私は假に、次の如き簡単な方程式によつて説明して見たい。

$$(第一式) \quad 1+2=3$$

(合理的)

$$(第二式) \quad 1+2+\text{宗教心}=3+a$$

(超合理的)

$$(第三式) \quad 1+2+\text{無宗教心}=3-a$$

(不合理的)

式中の $a$ は零より無限大に到る正數を表すものとする。第一の方程式は我々が小學校以來心得てゐる數理的の式で、或は之を理智的又は科學的の式と稱してもよからう。但し之は次に述べる $a$ なる因子を全然考へないもので實際の人格には當て餘まらない、單に數理の上で通用するに過ぎない。然るに人格と關係のある實際問題となると、第二及第三式のやうに、宗教心に支配される特性を帯びて來るものである。ところで、第二の式は、一寸見ると、 $1+2=3$ と書き換へられさうだが、しかし、左様に、此の式から宗教心を引き離して考へることは出來ないので、 $1+2=3$

ち科學—哲學も含めてゐる—と宗教心とを打つて一丸としたものが、其の結果に於て $3$ 以上即ち $3+$ なる渾然とした効果となつて現はれるといふ意味なのである。若し便宜上分けるならば、 $a$ は情意の働き即ち精神力の程度を示すものと解釋しておきたい。尙簡單に云へば、此の式は智識と精神との調和、或は科學と宗教との結合した有様を示すものに他ならない。そして、 $a$ が無限大になつた極致といふのは、所謂神人合一の絶對境に歸すると考へて宜しからう。彼の基督が最愛の弟子ユダに裏切られたにも拘らず死ぬまでユダの幸福を神に祈つて止まなかつた如き、又法然上人の幼時、父が敵の爲に重傷を負うて今はの際に「仇討を繰り返せば際限が無い、それよりも將來聖者となつて仇敵までも善根に立ち還らしめよ」との遺言を身にしめて佛門に入り淨土宗を開くに至つたと傳へられる如き、何れも $a$ の偉大なるものである。斯の如く宗教心の深さによつて $3+$ は随分大きな値となり得る。之を個人の人格と見てもよし、其の仕事と考へても妨げず、或は又國家社會の文化文明と見做しても差支へない。即ち科學と宗教との結合に依つて、科學のみでは及ぶことの出來ない——科學に背く意味ではない——即ち合理を乗り越えた、常識では説明の出來ない、より以上の神秘的な所にまで到達し得ることを示すものであつて、つまり優れたプラスの情操と之に伴ふ強い意志の働きに外ならない。曩に擧げたやうな、理窟では一

寸合點のゆかない不可思議な力量が現はれるのは全く此の關係に由るのである。そこで之を超合理的の式と名づけたわけで、或は超理智的、超科學的など、呼んでも差支なからう。次に第三の式は、宗教心が無いと、折角の學問や設備も却つて誤用悪用されて害毒を流すに至る虞があるといふ意味を表すもので、反宗教的になればなるほど $\alpha$ はマイナスの方へ大きくなり、即ちマイナスの情操が勝ち越して、それだけ益々禍を積み重ねてゆくことになる。彼の多數を恃んで横暴を働くなぞも明かに宗教心に背く一例である。これは甚だ不都合なわけで、さてこそ不合理式として斥ける所以である。而して第二、第三兩式共に $\alpha$ の場合第一式に就いて云つた通り、單なる數理であつて人格價值としては考へることが出来ない。茲にお断りして置きたいのは、私は上來繰返して、宗教心に基く精神力の大切なことを主張したが、しかし、之さへあれば智識も財貨も一切無用といふのでは勿論ない。否、其等のものも大いに必要なのであるが、先づ第一に、確乎たる宗教的信仰が無くては、其等を正當に活用して其の本來の價值を發揮させることは到底覺束ないのみならず、勢ひ無定見の御都合主義に陥り、果ては却つて其等の力を悪用する結果ともなるといふのである。即ち智識偏重や金錢萬能の考へ方は本末を誤つてゐる、人格の向上も文化の發達も、凡ては宗教心即ち信仰心を大本として努力しなければならぬといふことを力

説したわけである。

### 精根一超の妙諦

茲に四十貫の荷物がある、之を持ち運ぶのに、一人の力では先づ二十貫が限度だとすると、二人以上が協力するか又は之を二つ以上に分けて取扱ふか或は之を轉がしてゞも行くといふのが普通のやり方で、即ち前の第一式が示す合理的方法である。(今日の諸學校で教へる所は大抵皆之で、そして之以上に出るものは殆ど無い。此の事に就いては後に論ずる)。然るに若し、人手が足りないとか荷物が分けられないとかいふ場合にはどうするか。それでは仕方が無いと直ぐにあきらめて了ふのは早計である、既に理窟に囚はれてゐる、第二式の存在を知らないものである。假令一人にもせよ、其の人が堅い宗教的信念を以つて異常な精神力を振り起し、何ツといふ氣になつたならば、之に順應して前にも云つた通り生理的心理的變化が起り所謂超合理的の力が湧いて来て、或は此の荷物が運べないとも限らない。よしや四十貫は駄目としても、三十貫位を動かす力は出ようも知れぬ、さすれば、之に僅かの助力でも得れば目的を達することが出来るのである。例へば平時は兵士が二人でやつと運ぶ砲丸を、戦時は一人で易々と擔いだといふやうな實驗

談は、吾々の間々耳にする所である。ナポレオンは、「不可能」といふ字を辭書から葬れとさへ云つてゐる。一念の凝る所、「何のその巖も徹す桑の弓」といふことがある。

若しも之が反對で、如上の信念に缺け、精神が萎靡してゐたら、恐らくは、當然出来る筈の仕事も爲し得ないで終るだらうことは、之亦推察に難くない。即ち、第三式の結果に陥つて了ふのである。

一代の劍豪柳生但馬守でさへ澤庵和尚を斬りつけることが出来なかつたといふ話は何を語るか。劍術の上では、無論、和尚は但馬の敵でなかつたに違ひないが、和尚の宗教的練磨を積んだ氣魄が但馬を壓服して其の技術を封じ去つた結果と見るより外はない。又其の頃、朝鮮から猛虎を、家光將軍の許へ贈つて來た。將軍は試みに但馬守と其の虎とを一つ檻の中へ入れて見たが虎は但馬に睨みつけられて隅の方へ尻込した。そこで、澤庵が代つて檻へは入ると、虎は飼猫のやうに媚びて和尚の膝に抱かれたといふ。彼は何をも凌ぐ勇の強さであり、此は凡てを抱く愛の暖かさである。一は劍道の極意、他は宗教の悟徹、共に精根一超の妙諦が窺はれるではないか。

### 超合理的現象

宗教上の所謂奇蹟に關しては、茲に立入つて論ずる要、無く、又それは私の能くする所でもないが、謂つてみれば、之もやはり異常な精神力の働き、即ちそれに順應した生理的變化を以つて其の一面を推し測られる場合があると思ふ。たゞ之に對し、どの程度にまで神佛の力——曩の超自然的超人間的の偉大な絶對の力が働きかけるか、謂ふ所の冥加があるかといふことは吾々の忖度する限りでないが、兎に角、堅き宗教的信念のもとに、思ひ邪なく至誠以つて神佛の仕事に當る場合に限り、何時も神佛の加護の働くものであることは私の體驗上よりも信じて疑はない所である。一體、私を見る所では、前に述べた超合理的の現象といふのは、奇蹟と同じ筋道にあるもので、之に深い宗教味が加はり常識と非常に懸け離れた趣を呈した場合に一種の宗教的奇蹟として受取られるのであると考へる。例へば、キリストが三切の魚肉と五片のパンとを以つて五千餘人の空腹を満たしたといふ傳説の如きは、神に縋つてどうか此の饑餓に迫つた大勢の人達を救ひたいと祈るキリストの熱烈な眞心に、それ等の群衆が非常に感激し、忽ち生理的的心理的變化を起して満腹の氣持となり、與へられたパンと魚肉とを互に譲り合つて、終に最後の一人まで不足を感じなかつたのであるといふ風に考へれば敢て怪しむに及ばない。之に似た話は佛教の本生譚にも出てゐる。それは、托鉢した僅かの米で五百人の腹を満たしたといふのである。又・讚岐の國には萬濃

の池といつて此の國一番の大きな池があるが、其の昔、土地の住民は毎度此の池の洪水に見舞はれ、幾度堤防を築いても流されるので困つて了ひ、此の上は有名な弘法大師に力を借りようといふので、此の旨を京都へ願ひ出で、大師を派遣して貰ふことになつた。そこで、諸國巡錫に暇の無い大師も、己が生國の難儀とあるので直ちに之を承諾して彼の地へ赴いた。そして池の畔に祭壇を結び、眞言密教の祕奥を傾けて、水害防止、國土安泰の熱願を籠めた。其の崇嚴な有様に群衆が擧つて感奮し、興起し、大師と一緒に祈りつつ、必死の意氣込みで、又候堤防の造築に取りかかつたが、今度は立どころに完成して、爾來、さしもの水勢を全く防ぎ得るに到つた。そして人々は深く大師の高徳に打たるゝと共に佛の靈驗を讃へて止まなかつたと傳へられる。

先年のこと、既に五十代の半を過ぎた一紳士が眼病の爲め其の道の大家から數年ならずして失明するであらうと不幸な宣告を受けた。しかし紳士は何とかして之を治したいとの一念から、醫療にも尙怠らず手を盡すと共に堅い信仰に入つて精神的方面からも救はれようと努めた。そして毎朝未明に起きて京都御所の御苑内を新鮮な空気を吸ひながら宗教的の清い心持で約一時間づつ散歩した。さうして、建禮門の御前に於て、皇室の御繁榮を壽ぎ奉ると同時に自身の病氣平癒を神かけて祈るを常とした。之を續けること約三ヶ年、不思議や失明すべき筈の眼病が、今は殆ど

差支へない程度にまで癒つてしまつたのである。又少し古い話であるが、早稻田大隈出身の一青年が三十餘歳の頃肺患に罹り遂に醫者から見放されてしまつた。絶對絶命の彼は信仰に走り精進努力した結果、やはり奇蹟的に病氣は全快して今は五十の坂を越え而もなほ健かに信仰生活を續けて居る。(現に私の教へ子たる某々工學士や大學助手等にも同様の實例がある)。

此等の事實は何れも超合理的の現象であるが、之は科學のみでなく信仰の力に依つて、それに順應した生理的心理的變化を來し、醫師の診斷とは全く反對の結果を齎したもので、必ずしも怪しむに足らないのである。尤も信仰に入れば如何なる難病も必ず平癒するといふのではないが、此の信仰の力がどれだけ大きな影響を我々の肉體の上にも及ぼすかといふことの例證として擧げたのである。これと同時に私は醫師の人達にも亦此の點の注意を促したい。乃ち「天は自ら助くる者を助く」といふ格言は斯うした場合にも至極適切な意味を持つてゐる。

### 倫理と宗教心

話がやゝむづかしくなるが、今日の哲學上では、宗教的眞理なるものを説明するのに「聖の文化價値の發揮」といふ言葉を用ひ、之に類する見解を一般に「非合理主義イラショナルリズム」と稱してゐるが、此



等にしても、又其の他古來の諸説に據つてみても、殆んど皆、問題を所謂形而上學的にのみ取扱ひ、此の圈内に解決を求めようとしてゐるかに見受けられるが、私は、既に述べた通り、更に一步を進めて生理的心理的順應作用といふ形而下の方面にまで問題を押し擴げて考へてみることに重要な意義を示すと信じてゐる。そして此の作用は、若し、熱烈な信仰に直入するなどのことに依つて極端に強く起るならば唯其の一回だけでも、又左程ではなくとも習慣的に度々繰返されるうちに遂に之が常態を成すに到り、仍つて其の人の性格を一變させる結果にもなるのであると私には解釋される。例へば、酒吞や煙草好が信仰に入つて忽ち盃を捨てパイプを離すが如き、或は又大好きな食物を一旦有害と知れば信仰の力で何の苦もなく止めて了ふが如きは確かにそれで、此の場合、それは、飲みたい、吸ひたい、食ひたいのを無理に我慢するのではなく、飲まぬ、吸はぬ、食はぬことに却つて愉快を覺えるやうになる、少くとも、それらを飲食しないことに不満を感じないやうに生理的心理的變化を來すのである。(私が好きなコーヒーを全く飲まなくなつたのや、又、私の知合の或る法學士が酒と煙草を吞めなくなつたのも此の實例と謂へる)。斯うした宗教的鍛鍊を積んだ人は其の趣味嗜好も自ら高尚なものとなるのである。又、極悪人が宗教的機縁で翻然悔悟し正反對の大善人に變るなどは最も著しい超合理的の事實と謂はねばならぬ。嘗て

一小學教師が彼の幸徳秋水の大逆事件に連坐して無期徒刑に處せられたが、彼は十八年間の在獄中、教誨師の導きに依つて遂に信仰に入ることを得た。そして過去の自分には三つの大きな缺陷のあつたことを覺つた、それは、宗教的信念の無かつたこと、智識の足らなかつたこと、親兄弟や友人に對する感謝報恩の念を缺いてゐたことである。さうして悪夢から醒めた彼は、改悛の狀著しく遂に假出獄を許されるに至つた。つまり、偉大な宗教心の力に由つて、心身の組織及機能の全系統が醇化せられ、今までの汚れてゐたマイナスの情操が清らかなプラスの情操に一變するのである。宗教が理窟でなく信仰が一に體驗に俟たねばならないといふ理由は、茲にあるのである。(之に就いては尙後に述べる)。斯くして吾々の人格は、それだけ高められてゆく。斯様に、劣悪なマイナスの情操を醇良なプラスの情操に變化させるといふ點が宗教心の何よりも大切な所であつて、強い意志、従つて強い實行力も之に伴つて湧いて來る。精神の修養といふも品性の陶冶と稱するも皆此の道に據る情意の鍛鍊を眼目とするものに外ならない。之に反し、宗教心を本としない修身倫理はどうしても淺薄で力が弱く、唯智識の上から理窟を知るのみで一向に實行の伴はない弊に陥り易いから、其の効果は極めて少ないのである。(別項「眞正の教育」参照)

## 寒心に耐へぬ現状

以上述べた所に依つて、宗教心が人間の生活上如何に大切な要素であるかといふことは略ぼ明瞭になつたと思ふ。そこで、私は、此の見解のもとに我國の現状を顧るとき、甚だ寒心に堪へないのである。何故なれば、國民は一般に、殆んど信仰心を失ひ御都合主義、打算主義の生活に墮して了つて、従つて権利の主張や利害の驅引に抜け目はないけれども、お互ひが喜んで義務を守り、又心から打ち融け譲り合ひ、己れを責めて人の罪を許すといふやうな温い人情味は滅多に見ることが出来ぬ。ましてや、敵を愛することなどは思ひも寄らない。自分を裏切つたユダの幸福を十字架の上で祈るキリストや、父の仇を佛の慈悲に救ひ上げようとした法然上人の心持などを、本當に掬み取れる人が今の世間に果して幾人あるであらうか。

而も斯うなつた責任の大半は我國民教育の缺陷に歸せねばならぬ。一體今日、我國の諸學校（小學より大學に到るまで）や一般家庭に於ける教育の仕方は大抵智識のみを重く見て、情意の方面をおろそかにしてゐる。即ち理論を説き記憶を強ひるに急で、寧ろそれ以上に大切な精神的訓練を怠り勝である。言ひ換へれば、一番大事な人間の宗教心といふ根本原動力を輕んじてゐる。之を

曩に擧げた方程式で云へば、第一の合理式のみには囚はれて、それよりも一層重要な第二の超合理式を忘れたやり方である。而も私のひそかに心配するのは、其の第一式すらの確に實現することが出来ないで、動もすれば第三式の弱點に陥らうとしてゐる傾向である。例へば勞資は理論上兩立し難く、階級は原則的に争ふべきもの、人口の過剰は避妊で防ぐを法とし、發明研究の不振は設備財源の不足に歸す、といふ風に、其の他政黨問題にせよ、農村争議にせよ、家庭悲劇にせよ、將た又移殖民方策にせよ、此等内外の諸問題を、とかく唯理窟のみで割出さうとして、信仰の力が凡ゆる方面に對しどれだけ適切な解決の鍵であるかといふ要點を深く顧みようとしなさい。さればこそ、徒に議論倒れに終り實効が之に伴ひ難いのである。人間文字を知るは憂患の初めなるとと濟ましてゐるべき事柄ではないと思ふ。而も、斯うした趨勢は、特に明治維新以後に於て著しくなつたことを認めねばならない。一體、日本古來の教育は智識よりも精神に重きを置いたものであつて、確かに維新前までは之が傳統的に行はれ、その點では非常に優れてゐたと思はれるのに、維新後になつて甚しく變つて了つたことは恰も魂を脱かれたやうな形で吳々も遺憾である。よし遠い昔のことは措いても、維新前後に於ける佐久間象山、吉田松陰、西郷南洲など、夫々後進子弟の教導に力を盡した偉人は皆信仰に對して深い心を留めてゐた。然るに明治以後になつて

「智識階級に宗教は無用だ」などと唱へる學者さへ現れるに到つたことは全く其の無謀に呆れざるを得ない。少くとも一般に、此の方面が頗るお留守になつて來た事實は否むことが出來ない。それ故、例へば、口には日本魂を唱へても、之が信仰心に根差した靈的のものであることを本當に悟つてゐる者が果して幾人あるであらうか。一面、之は、始めて國を聞いて西洋の物質文明を取り入れるに忙しかつた爲であるとは云へ、此の根本を誤つたことは何としても我教育界の致命的な落度であつたと謂はねばならぬ。

### 信仰心は體驗から

或人は云ふかも知れない、「宗教は今日必ずしも衰へてはゐない、大きな寺院もあり、立派な神社もあり、見事な教會堂もある、又宗教を看板にした學校も随分少くないではないか」と。しかし、私の云ふ意味は、さうした宗教の形式的方面や「宗教家」なる職業人の多少の詮議などが主ではなくして——それ等も一部の要件ではあるが、それよりも更に——一般民衆特に智識階級の人々にどれだけ根深い信仰心があるか、其の日常生活に於て、宗教的練磨が如何様に行はれ、依つて信仰心が何程強く養はれつゝあるか、又家庭、學校、社會一般等に於ける子女の教育は宗教

的信仰の養成に向つて如何なる適當の手段を講じてゐるか、といふ問題なのである。而も此等の點から見た我國民教育——外國とは自ら其の性質を異にすべき——の成績は甚だ失敗であつたことを残念至極とするのである。

ウエリントン侯は「宗教無くして人を教育するのは利口な悪魔を作るに過ぎぬ」と喝破したが、全く名言で、若し侯をして今日の我教育を評せしめたならば、果して何と云ふであらうか。或る法科大學生が、法律を教へられて却つて法律を潜る術を覚え、従つて人格が低下すると云つたが、之によつても思ひ半に過ぎるものがあらう。學校は「智能犯」の養成所ではない筈である。

宗教心は、前にも一言した通り、理窟で之を會得することは出來ない。信仰は偏に體驗に依らなければならぬ。そして此の體驗は、何かの動機で突然信仰に入るといふこともあり得るけれども、普通には、物心のつく幼年時代から絶えず宗教的に鍛鍊を積み重ねること、即ち子供の時から家庭でも學校でも常に適當な宗教々育を怠らぬやうに心がけることが最も肝腎である。さうすれば、子供は次第々々に信仰へ導かれ、それと共に情操は段々清らかに、意志は次第に強くなり、歡び進んで善を爲すと共に敢然として惡を斥け、而も之に順應して生理的・心理的にも適切な變化が起つて來る。斯くして成人するに従ひ益々情意の鍛鍊が出來、一層高遠な宗教的信仰を體

得し、神の道を永續的に遵奉實行することが感謝に堪へないやうな生活に入るのである。

### 理論を超越

ナポレオンの大軍が伯林に攻め込んだ時、獨逸の有名な哲學者フイヒテは毅然として「獨逸國民に告ぐ」と云ふ大演説をなしたが其の中に次の言葉がある。「獨逸人は原始的に純粹な民族である、従つて獨逸の將來を永遠に存続せしむ可き愛國心が必然的に起つて來るのである、此の國民精神は憲法や法律を守つて行く位の生優しいものでなく、一切を焼き盡さざれば止まない所の祖國愛の焰である、此の熱情は祖國の爲め喜んで一身を犠牲として進ましむるのである、古代羅馬人の軍隊が北方獨逸に攻入つた時、ゲルマニアの一酋長アルミニウスが之を邀へて全滅して仕舞つた、斯く勝利を博し得たのは軍隊の力でもなく、武器の力でもない、唯々情意ゲミュートの力である、云々」(日獨文化協會第一回講演集——阪口博士講演の一節)。之を見ても如何に情意の力が偉大であるか、人間にとつて「眞劍味」が如何なるものであるかといふことが分る。「意志は最後の勝利」とは洵に至言である。

「智慧分別ある者は惡事を働かない」と云へば一應立派らしく聞えるが、これが若し、「惡事は露顯したら結局我身の破滅だから……」といふ位の功利的消極的な打算から出るもので、一身の損得を離れた大きな目的の爲めの積極的な勸善懲惡の努力でないならば、果して何程の意義があらう。今日、「有閑階級」だの「高等遊民」だのといふ言葉は何を意味するか、彼等が相當の智識財産を有しながら、「薄志弱行」の爲めの「有閑」「遊民」でなくば幸である。若し夫れ、働くこと其のことが人間の建前であるのに、「働かずして食へる」ことを有難がつたり美んだりする輩に至つては全く論外である。

而も信仰心の無い者即ち情意の鍛鍊の不足してゐる人間は、其の有する智識も亦、假令それが如何程深く廣く見えても、仔細に吟味すれば何處かに破綻があり變態的であることを免れない。何故なれば、彼等は人格的に不具者であるから、其の辨識する力は恰も肉體的に不具者の官能の如く、色盲が繪畫を談じ聾者が音樂を説くと一般、常人がどんなに大眞面目であらうとも其の論斷は滅多に信用出來たものでない。例へば假に嗅覺を缺いた人間に目隠しをして、手に觸るゝ軟らかさと舌に感ずる鹽辛さとのみで判別させたならば、彼は恐らく「糞味噌一つ」を斷ずるであらう。(尾籠な例を引いて恐縮であるが)。之と同様に、如何に學問や智識があつても信仰を持たない人間には宗教の眞味は分らない。だから彼等は信仰の必要を説く人を奇異に感じたり、嘲笑したり

する。つまり彼等には、人間としての最も大切な尊い心の感じが欲けてゐるのである。人間社會の事が總べて智識と理窟とで片附けられるかのやうに心得る間違ひも此處から起るのである。例へば茲に兩人が協力して同様に働き百圓の報酬を得たとする、之を分配するには必ず五拾圓宛とするのが至當でそれ以外に合理的な方法は無いといふのが彼等の考へ方であらう。然るに何ぞ知らむ、一方を三拾圓にし他方を七拾圓にし、或は一方を全然無報酬として片方のみが百圓全部を貰ふことにしても、五拾圓宛に等分したよりも一層満足と思ふ解決法もあり得るのであつて、而も斯うした點にこそ、理窟を超越した本當に人間味のある貴い美しい情操が働いてゐるのだといふことを、彼等は覺ることが出来ないのである。彼の裁判所に於ける判決よりも調停委員會の調停の方が、双方に満足と與へ人間味に富む點で遙かに優つて居ると云はれるのも即ち此の爲めなのである。

### 人格上の不具

手足目鼻等の欲けた肉體上の不具は誰でも氣が付き之を厭ふが、心の不具即ち人格上の缺陷は多くの人がなほざりにし易い。而も後者こそ前者よりも、遙かに醜く淺ましいと謂はねばならぬ。しかしながら、肉體的不具者に對して吾々は之に同情こそすれ憎むことを得ないと同様、人格的不具者——今日智識階級の中にもそれが随分多いのは、ウェリントン侯の言つた通り宗教を忽にした教育の罪が多いと思ふ——に對しても一概に之を排斥し去るべきでなく、寧ろ、其の人間としての要素を欲けてゐる點を氣の毒とし、且つ其の責は畢竟我々にもあるのであるから、之を健全な人格に仕上げる爲に出来るだけ共に努力せねば相濟まぬわけである。斯く努めるのが臆て我々の社會を良くすることとなり、自他共に榮えゆく所以に外ならない。同時に又一層大切なことは我々の生命を承継ぐ後進子女の教育に心を留めて此の要訣を失はないやう萬全の方法を講ずることである。則ち信仰教育は茲に其の本領を見出すのである。

我日本は最早外國文明の模倣より出で、獨創の時代に入つてゐる。此の新時代に處して最も大切なのは、偉大な發明發見を生み出すべき眞の研究精神や、片々たる毀譽褒貶に煩はされずして堂々と自己の所信に邁進する勇氣、或は又、此の天然資源の乏しい國土に立派な産業を振興する不屈の努力等であるが、此等は皆信仰の力を措いて何處にも求めることは出来ない。即ち日本の將來は特別に超合理的の國民精神を必要とするのである。「智識階級」よりも寧ろ「精神階級」こそ、其の中堅とすべきなのである。之れ私が敢て僭越を顧みず機會ある毎に卑見を繰返して、信

仰に依る我國民精神作興の必要を絶叫する所以である。

熱効率の優秀と價格の低廉とで斯界に好評の高い彼の田熊式汽罐の發明者田熊常吉氏は失禮ながら小學卒業の學歷にしか過ぎぬ。而も氏をして此の大發明を成し遂げしめたものは其の牢乎として抜く可からざる宗教的信念ではなかつたか。世界の大發明家エチソン翁は明言してゐる、「自分の背後には世人が神と呼ぶ或る偉大な力が働いてゐる、自分は此の力の命するまゝに仕事を勵むのである」と。又現代英國の大政治家ロイド・ジョージ氏は、「最もえらい人は？」との問に對して「神と人にと最も多く奉仕する人」と答へたさうである。

日本建國の大精神——惟神の大道をば、畏くも 明治天皇は御身を以つて顯現し給うた。我等日本臣民たるもの須く此の大模範の前に拜跪し其の聖旨を奉體して苟も悖らざらむことを期すると共に我等日本國民の嚮ふべき理想の大道は、千早振る神の御代より唯一筋の斯の道たることを自覺して、此の堅き宗教的信念のもとに勇往邁進する所がなければならぬ。之れ即ち日本魂の眞髓に外ならないと同時に眞の眞劍味は茲に始めて發揮せらるゝであらう。(昭和三年一月)

## 科學上より見たる弘法大師

### 科學と宗教

偉人弘法大師の生涯に關し感想を述ぶるに先ち、少しく、科學と宗教との重要な關係に就いて卑見を明かにしておきたい。

抑も理想の人格とは、之を心理學的に見て、智情意の圓滿なる調和的發達にあること改めて云ふまでもない。勿論、之等の三者は、吾人の精神作用上、相即不離の關係にあつて劃然と區分し得べきものではないけれども、今假りに之等を精神作用の三方面として論ずれば、此の中智は智識即ち吾人の學問研究の能力を示し、文化價值の一なる眞を創造する根據となり、情意即ち感情と意志とは他の文化價值たる善と美とを創造する基本となるものである。従つて、前者は廣義の科學に密接の關係を有し、後者は宗教、道德及藝術に主要の交渉を持つて居る。而して宗教は本來智情意の三方面を包含するものであるが、特に情意が大切な部分を意味し、之に智が從的に結

び付いて信仰の内容を成すのである。一口に言へば、宗教は超合理的な基礎の上に立つて眞善美を統一した聖の文化價値を發揮するものである。此の超合理的といふのは、科學的に見て不合理なのではなく、斯かる科學的相對的原理を超越して、その批判分析の對象となすことを得ない絶對自律の權威を持つものとの意味である。なほ此の關係を簡單な數式に依つて例示すれば次の如くなる。

第一式  $1+2=3$  (合理的)

第二式  $1+2+\text{信仰}=3+a$  (超合理的)

第三式  $1+2+\text{無信仰}=3-a$  (不合理的)

第一式は説明するまでもなく普通の數理的算式であつて即ち吾人の科學的智識のみを以て首肯し得る事實である。然るに、之に信仰を加味すると、第二式となり、超合理的の性質を帯びて來る。茲に  $a$  は假りに零より無限大に到る不定の値と見做しておく、即ち之は、智識或は科學のみでは憶測乃至實現することの出來ない、より大きく高い結果を齎らすものである。例へば理論上不可思議に屬するやうな異常の宗教的事實に遭遇するのは此の  $a$  の爲めである。次に第三式は、宗教を除外した爲め、右と全く反對の結果を招來し科學の正當な價値・効果をすらも發揮し得ないことを表はして居る。但し兩式とも、 $a$  が全然零であるといふ特殊の場合は實際の人間生活とは沒交渉のことで、又、第一式の單なる數理的事實も之を人格價値に當て放りて考へることは出來ない。そこでこの三つの式の意味を一括して要言すれば、吾人々類の世界に於ては、科學と宗教との適當な結合が行はれるか否かによつて、結果としての價値に非常な相違を生ずるといふ事實に歸着するのである。

然るに、今日、科學者の中には往々にして宗教を無視し或は排斥する者があり、又宗教家の中には科學を尊重せず却つて之と牴觸する見解を抱く者がありはしないかといふ懸念を免れない。若し然るならば、斯くの如きは孰れも、この兩者の人生に於ける正しき意義と價値とを理解して居らないことに起因せねばならぬ。従つて、科學者といふも眞に其の本務を盡し得べき人でなく、宗教家と稱するも決して其の使命を完うし得べき人でない。されば、若し不幸にして斯かる謬見に陥れる人があるならば、宜しく反省して眞の科學者、眞の宗教家、否寧ろ眞の人間たる自覺に立ち還らむことを、其の人個人の爲めのみならず、國家社會の爲めにも切望せざるを得ない。

殊に我日本の如き天然資源に乏しい國は、一層、國民全般が超合理的の努力をなすことが肝要

であり、又然らざるべき天の攝理、神の恩恵に浴して居るのだといひ得るであらう。弱小と侮られた日本が強大と恐れられた露國や清國に打ち勝つて、世界驚異の的となつたのも超合理的宗教的なる大和魂の精華を發揮した結果ではなかつたか。當時各國の常識的判斷からいへば明かに我國の敗北を豫想せしめたであらう。而もaの力はそれを超越して、斯くの如く偉大な結果を齎らした。又、一敗地に塗れし獨逸の戦後財政状態を觀察した列國の學者は、到底其の國家的破産を免れざるべきことを論斷した、然るに見よ、奮然宗教的信念に驅起せる獨逸國民の愛國心は右の論斷を裏切り着々として力強き恢復を實現しつつあるではないか。其の他古來の種々な奇蹟的傳説の如きも叙上の關係を理解して之を觀察すれば、決して唯無稽の不合理を語るものではないと思ふ。

要するに、宗教は主として人間の情操を醇化し意志を鞏固にし兼ねて智識を正しく活用せしめ、之に伴うて適當なる生理的・心理的變化を馴致するものである。この、信○仰○に○伴○ふ○心○身○の○醇○化といふ事實が最も重要視すべき點であることを特に強調したい。故に宗教は即ち道德の本據なのであつて、人格の陶冶向上は一に之を基礎としなければならぬ。同時に、宗教と科學とは最も密接に協和して以て人生の眞の價值幸福を増進せしむべき性質のものである。科學と相結ばざる宗

教は未だ以て衆生濟度の本旨を遂ぐるに足らず、宗教と乖離せる科學は到底模倣追従の域を脱却して發明創造の天地に進入し難いことを知らねばならぬ。

然り而して、我弘法大師の如きは、最もよく此の宗教と科學との融合を實現せる大先覺者にして、大師の大師たる所以を吾人は此處に發見すると共に其の遺風を追慕して止まない者である。

### 大師略歴

弘法大師は光仁天皇の寶龜五年（西曆七百七十四年）六月十五日讃岐國多度郡屏風ヶ浦に生れた。父は佐伯善通といひ母は玉依と呼んだ。この佐伯家は神別の佐伯で高靈産神より出で神武天皇に隨つて大勳を樹てた道臣命の後裔に當る名門であると聞える。讃岐の國造に任ぜられて第二十三代目が善通である。

善通夫妻は至つて神佛崇敬の念に厚く、努めて善根を培ひ慈悲を施し、庶民から父母の如く敬慕せられて居た。斯く夫妻とも信仰が篤かつたので家庭は常に敬虔眞摯の氣分に充たされ更に益々精進修養を怠らなかつた結果、或る夜玉依夫人の夢に天竺より聖人飛び來つて懐に入ると見て身重を感じ月満ちて出生したのが大師であると傳へられる。大師は幼名を眞魚と呼ばれた。斯か



る篤實な父母の信仰心は必然、胎兒にも所謂胎教となつて感化を與へずには措かぬ、宜なる哉、眞魚、既に五六歳の頃、八葉の蓮華に居坐して諸佛と共に語る夢を屢々見たといひ、又十二歳の時、父母より聽て佛弟子となすべきことを言ひ聞かされて大いに欣喜したとのことである。而して其の頃既に自ら泥土を以て佛像を作り居宅の附近に堂宇を立てて之を安置し日夕奉禮して楽しんでたと傳へられて居る。一體、喜怒哀樂の情は人の性格を馴致する上に影響を與ふること明かであるが、此の事實に依つても暗示せらるる如く、吾人が深い宗教的信仰を有てば之に順應して生理的心理的變化を生じて來る。即ち清らかな信仰心に伴うて精神的にも肉體的にも次第に醇化されてゆくのである。此のことは既に前節にも述べた通り吾人が人格の鍛錬上非常に重要な根據となるものであることを見逃してはならない。我弘法大師の如きは、夙に幼少の時より、此の宗教的鍊磨に由る心身の醇化聖化を最も適切に且つ十分に遂げ得た人であると思はれる。

讃岐國屏風ヶ浦は人も知る風光明媚の土地である。此の秀麗な環境が佐伯普通夫妻の宗教心を助長するに力あり又大師の幼少時代に崇高の氣分を育む要因となつたことは亦争はれないであらう。凡て人は自然の偉大な力や美に打たるとき、それと同時に神佛の力の偉大さを其の背後に感じて大いに鼓舞せらるるものである。『青山白水偉人を生ず』とは正に此の事實を道破せるものに外ならない。(其の後屏風ヶ浦の附近は恐らく土地が隆起して海岸より遠くなつたものと思はるゝが、其處に普通の名を寺號とせる名利が出来、今は普通寺町となつて一帯に榮えて居ることは周知の通りである。)

佐伯の一門には佐伯豊雄といふ博士もあつた。玉依夫人の里は阿刀氏であるが之は普通の弟が繼いで阿刀大足と稱した。この大足も亦學者であつた。斯く大師の血縁には傑出した人才が多かつた。大足は、大師を出家させるにしても先づ大學へ入れて學問の修業を積ませることが緊要であると普通に勧めたので、大師は十五歳の時、父母の膝下を離れて京都に遊學し石淵大師の教を受くることとなり、次いで十八歳の頃大學へ進んで經史を學んだが、之に満足することが出来ず佛教に走り、傍ら好んで深山幽谷を跋涉し、或は嚴寒の霏雪を弊衣に拂ひ、炎夏の酷熱に穀漿を斷つて、只管心身鍊磨の修行を續けつつ二十歳を迎へた。さうして此の年石淵大師に召され、和泉國槇尾山寺に到り、茲に始めて剃髮して佛弟子となり名も教海と呼ばれ、次いで如空と改め、更に二十二歳の時空海と改稱した。而して二十四歳の時早くも「三教指歸」を著はし、儒教等の内容の淺薄にして到底佛教の深遠なるに比すべくもないことを論述して居る。

大師は研究の進むに従ひ在來の教説に疑義を生じ、深く煩悶懊惱しつつ、眞の教理を示させ給

へと祈願したけれども、未だ熱誠の足らざる爲めか、何の會得する所も無かつた。而も佛前に誓つて曰く『我れ不二の法門を得ずんば此の座を起たず』と。斯くて尙數年間、暗澹たる苦行の裡に哲理の究明と心身の修養とを怠らなかつたが、果せるかな、或日忽然として靈夢を感じ大和國久米寺に於て大日經七卷を發見するに到つた。然るに經文の意義甚だ難解にして、何人も之を讀了し得る者が無い。是に於てか大師は斷然入唐を決意し、延曆二十三年五月、恩師石淵勤操大德に伴はれて參内の上、桓武天皇より入唐の勅許を賜はつた。此の時、大師三十一歳であつた。そこで大師は遣唐大使藤原葛野麿に従ひ、橘逸勢と共に留學生として同年七月唐土を指して出帆した。當時既に大師は通譯を必要としない程支那語に通じて居たといふ。

一行の船は途中大風雨に遭ひ漸く其の年十二月、長安に入ることを得たが、大師は暫く西明寺に寄寓して諸方の高祖碩學を歴訪して居る中、終に當時密教の中心たりし青龍寺に於て惠果和尙と面接するの機會を得た。和尙は一代の師表として世人の崇敬最も篤かつたが、欣然として大師を迎へ『我れ汝を待つこと久し、速かに來つて灌頂の壇に入れ』と招じたので、大師は大いに其の知遇を感激した。時に和尙六十歳、大師三十二歳であつた。

惠果和尙は大師を青龍門下の正嫡となし親しく大法を垂ると共に凡ゆる修學上の便宜を與

へ、遂に大祖法身第八の師位を紹がしめて、遍照金剛の稱號を授けた。茲に於てか大師は始めて不二法門の源泉を究め、積年の疑義を霽らし、入唐の目的を全く達成することが出來た。和尙、大師に向ひ『既に凡ての法も授け經像も成つた、この上は速かに歸國して國家民人の爲めに此の教を布け、乃ち四海泰らかに蒼生樂しむであらう、之れ佛恩師恩に報じ、君に忠、親に孝なる所である』と説いたので、大師は厚く感謝し、二十年の滯唐豫定を僅かに三年未滿で切り上げて、大同元年十月、大師三十三歳の時恙なく歸朝し、それより一意専念弘道布教に従事することとなつたのである。

大師の唐に在るや、嘗に法教に精勵せるのみならず、深く彼の地の文化に着目し、書道、繪畫、彫刻、詩文等の藝術的方面より、更に建築、造筆、製紙、製墨、製茶等の科學工藝に到るまで具に研究調査を遂げた。其の慧眼博才には眞に敬服せざるを得ない。大師の如きは固より萬人に優れし素質を具へて居つたに違ひないけれども、凡そ何人を問はず精神的に絶えず緊張し且つ努力する者は、既に述べた如く、それに順應せる生理的・心理的變化を生じ、依つて以て自ら適材となり得るものであつて、其の最も顯著なる實例を吾人は弘法大師に見るのである。

大師は歸朝後、布教、傳道するに當り、努めて當時の通弊たる模倣的風潮を戒め、深く我國民

性と歴史とに鑑みて、常に之を基礎とせる創造的研究を重じ、深遠なる眞言の教理を平易に通俗化して説明し、同時に我國固有の神道との調和を圖つて所謂兩部神道を唱へ、鎮護國家主義を實行し、又凡ゆる智識特に科學的研究を活用して人類の福利を増進することを旨としたことは、現代に於ても吾人の遵奉すべき必須の方針とよく合致するのである。

### 六大緣起觀

原始佛教に據れば、今日、科學者の所謂自然律のみでなく、更に之に加ふるに善惡兩業の道德的原因に由つて人間の健康、壽命、其他一切の運命が決定せらるるのであり、又日月の運行、天候の順不順等自然界の諸現象さへも右の業因に由つて支配せらるるのであると説いて居る。之は個人の身口意に發現する作用を中心とした業感緣起論であるが、佛教は更に進んで、世界及人間を左右する力は道德的現象並びに自然的現象を統制する所の或る精神的にして且つ科學的なる、即ち至善にして靈智なる法性眞如であると説いて居る。而して之はつまり一方に於て神と呼ばるるものに外ならない。此の神こそは唯一絶對の眞實體なのであつて、世界乃至人間は之に派生する假象に過ぎない、神なる本體に即して始めて宇宙萬象が現はれ、神を離れては世界何者も存在しない。而して此の神なる本體を佛教の上で抽象的原理として表示すれば法性眞如と呼ばれ、之を人格的に表現すれば佛陀如來と稱せらるるのである。

尙又大乘佛教では、右の法性眞如を説明するに六大緣起觀なるものを用ひて居る。六大とは、地大、水大、火大、風大、空大及識大のことで、之は一切萬物に共通普遍的で且つ大なるものの意である。緣起とは萬物が相緣り相助けて生ずるを云ふ。又之を六大種なる言葉で示すこともある。之は六つの根本元素といふ意味で、或は六界とも稱する。要するに、宇宙の森羅萬象絶大より微塵に到るまで、皆この六性を具備せざるはないと觀るのである。

右の説に従へば、物質なる吾人の身體は地水火風空の五元素より成り之に吾人の精神作用の基本たる識の一元素が加はり、此の所謂六大或は六大種が和合して母胎を生じ、更に之が發展して眼耳鼻舌身意の六根となると解釋するのである。

眞言密教に於ても亦五大の語を用ひた。この五大は其の色を黄、白、赤、黒、青の五種とし其の形を方、圓、三角、半月及空點又は團形の五つとした。空點は團丸の形であるから團形とも云ふので、これは虚空の形を表はすものとした。然るに弘法大師は此の大日經に示す五大に金剛頂教の心大即ち識大を加へて六大とした。併し此の兩經中には六大の語は一つも出て居ないから之

は大師の創見なのであらう。(梅尾祥雲及加藤精神兩氏の説に據る。)而して此の識大は曩の大乗佛敎に於ける夫れとは稍意義を異にし悟りの心を意味して居る。従つて此の六大は絶對界の元素そのものを指すのでなく、元素の風光を形容するもの、即ち其の屬性を示すものと見られるのである。即ち大師は七祖相承の秘口即身頓成の印璽と華嚴經の影響とに依つて文字の上に六大を唱ふることを創始したものであらう。要するに密敎の五大は無情無意識的の性質を表はし、識大は精神の道德的有情の性質を示して居る。即ち五大は今日の自然科学に於ける主要なる素材であり識大は精神的道德的方面の要素である。斯くの如く一切の萬物は科學的並びに精神的の兩屬性を具へて居る。此の點に於て佛も凡夫も一微塵も皆同一なのであるが、唯、佛は絶對的であるに反し、其の他の萬物は相對的で其の性能に大小強弱等の差別があるのである。そこで『吾人凡夫の身心即六界は有爲無根の法なりと雖も、深く其の實相を観察すれば有爲の六界其の儘に阿字本不生際に住して無爲常住であり、六界一一法界に周遍して至らざる所なきが故に高祖之を六大と稱し、又佛の身心即六界も亦復是の如くなるが故に無碍常瑜伽』と説かれて居るのである。(如藤精神氏説参照)

今日の科學的研究に據ると、人間は意識的精神的であるが他の動物は殆んど無意識的で精神作用を現はし得ず、概ね反射運動で活動するものとしてゐる。即ち人間の識大は相當顯著であるが、動物のそれは甚だ微弱であり、爾餘の單なる物質に到つては皆無であるといふわけになるが、これは前述した密敎の思想と根本的に矛盾するものではない。寧ろ其の間に多分の一致點を見出すことが出来る。

唯密敎に於ては、一切の本質は佛性を有して凡聖不二、入我々入佛凡一體であり、一切の物曼陀羅の當相にして不二平等であると觀るのである。而して此の六大の當體こそは絶對の大智と絶對の自在力とを具ふる理想佛即ち智慧を表にし慈悲を裏にした大日如來そのものに外ならないとしたのである。

元來佛敎では理と智とは別個のものに解釋して居る。理とは宇宙の凡ゆる理法のこと、智とは其の理法を悟る智慧であるが、これは聖化せられた情意を含むもので個性の中心である。智の世界では吾人は自由であるが、理の世界では宇宙の理法に従はねばならぬ。而も凡ゆる理の世界を悉く智の世界に映し入るる妙境に達した時、之を稱して理智不二といふのである。この地位に到つたのが佛位或は自覺位なのであつて、之れ智の究竟位ともいふべきである。(高楠博士の説参照)。そこで再び密敎の六大に就き今日の科學と照らし合はせて考へてみる。

地大——堅固不變の性。物質乃至勢力の不生不滅の法則。

水大——抱合統一の性。化合力、親和力、引力等の如し。

火大——生成發展の性。個體の發育、萬物の進化の如し。

風大——活動變化の性。萬物運動變化して寸時も靜止することなき一切のエネルギー及一切の運動の法則の如し。

空大——自在無碍の性。因果律、萬物相關の理法の如し。

識大——識別了知の性。意識的精神的にして自ら行動を規約する人格的活動の如し。

右の如く、六大は今日の自然科学及精神界の作用と相通するものであつて、此の五大と識大との結合は今日の所謂科學と精神との融合を意味するものに外ならない。而して此の六大を統合して遍滿無缺なるものは佛即ち大日如來であり、個々の萬物は本來平等不二にして多かれ少かれ此の佛性を具有するものであるとなすのである。

この達觀に基けば、吾人の科學、哲學乃至道德は須らく世界の本體たる大智大理大悲の絕對者即ち神佛に其の不動の根據を見出さなければならぬ。吾人は信仰の力に依り吾人の智を鏡として之に宇宙の理法を映し、換言すれば、所謂科學的に宇宙の現象を研究し發明發見を積み重ねると

共に、他方に於ても亦信仰の力に依り吾人の情意を陶冶し心身を醇化することに依つて吾人の科學、哲學乃至道德を建設しなければならぬ。而も此の事たる、元來吾人々類が神佛と本質的に同一なる理智情根を賦與せらるゝが故にこそ可能なのであるといふことが出来る。

夫れ此の如く、宗教的根據に依屬して、吾人々間が其の儘佛となり神となり得べきものであるに拘らず、吾人はとかく正しき信仰を缺き小我に迷ひ自己中心の生活に陥るが故に煩惱に囚はれ、低級劣惡な情操に支配せらるゝのである。若し宗教に依つて常に利己心を去り、敬虔眞摯の氣分を養ひ、情操の醇化に努むるならば、臆て小我の迷妄を離れ、神佛と無差別なる大我に悟入することを得る筈である。併し唯哲學等を學ぶだけでは恐らく確乎たる信仰は掴み得ないもので、之に伴ひ不斷の宗教的鍊磨即ち實踐的體驗を積み重ねてゆくのでなければ到底眞の悟徹は望まれな

いであらう。この故に、

心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らむ

と云つて済まして居るのは、或る意味に於て未だ不徹底なりとせねばならぬ。吾人が信仰に依つて常に清淨な氣分を持ちながら熱心に祈禱念佛等を行ひ或は讚美歌を唱へ又は讀經するなど其の他種々の宗教的儀禮や行事を、單に形式上のみでなく、眞實の心から繰返し絶えず神佛の道を實踐

することに依つて。漸次之に適應せる生理的・心理的變化を起し、情操は醇化せられ意志は鞏固となり、所謂心身の鍊磨が行はれて一層信仰信念を深むると共に益々人格が向上せらるゝのである。密教に謂ふ三密即ち意密、語密、身密なる三種の修行も亦全く如上の鍛鍊に外ならない。即ち意密に依り精神的となつて菩提心を生じ、語密に依つて之を言語に表はし、身密に依つて働作に行ふのであつて、斯くする中に之に順應せる心身の聖化が與へられ以て純眞な宗教的修行が遂げらるゝのである。

密教に於ける信仰心即ち菩提心は今日の心理學に云ふ智情意の三要素を含んで居る。我も人も將た佛も皆平等不二であると覺るのが智の働きであり、他人に同情し一切の衆生を濟度して佛の本性に立ち還らしめたいと希ふのが情の働きであり、之を實行に移すのが意の働きである。即ち密教に於ける自覺は我と共に人をも覺醒せしめねば足りしめないものである。菩提心は自覺のみならず併せて覺他をも伴ふのである。

人が宗教の力で一大信心を起すと、忽然として大悟徹底する。之を發心即到と稱するが、之れ即ち忽然たる生理的・心理的變化の爲めに一躍小我より大我へ轉化するのである。これは今日の生理學に於ても説明され得る事實であるから、斯かる事例に就いて生理的實驗を試みるならば、確

かに其の體質の變化を認めらるゝに違ひない。この發心にも非常に熱烈なものと比較的薄弱なものがあることは云ふまでもないが、前者は即身成佛を齎らすことが出来るけれども、後者は未だ完全に之を遂げ難い。併し更に勤めて倦まずんば總ては究竟の佛位に到達し得るであらう。例へば弘法大師の如きは幼少の時より修行を積み、心身の鍛鍊を重ね、漸次生理的・心理的醇化を完了した結果、遂に我國の釋尊とまで仰がるゝ程の大人格者となり了せたのでなければならぬ。又孔子にしても多年の修行を積み重ねて始めて、五十天命を知り、七十矩を躡えざる聖人の域に到達し得たのである。

三密には又有相無相の二面がある。有相の三密とは佛の示された一定の形式模範を佛像の前で繰返すことであり、無相の三密とは國家社會乃至一切衆生に對して佛の應用自在なる大慈悲の活動を實現することである。大慈悲の活動とは之れ情意の働きを意味し、近くは家族の繁榮、一國の隆昌を企圖し社會の文化を進歩せしめ、遠くは一切萬物生育進化の途を講じ以て全世界を佛の淨土に導かんとすることなのであるから、無相の三密は其の行相乃至形式に於て恰も世の人倫道德と相合致するものである。この無相の三密に立脚した道德こそ眞の道德なのであつて、世間普通の單なる人間同士の規約たる道德律は僅かに其の一端に過ぎない。言ひ換ふれば密教的修行者

こそは完全なる道德の源泉に觸るゝものと謂ふべく、再言すれば、宗教に立脚せざる道德は所詮淺薄低級にして御都合主義、打算主義に流れ易く到底不徹底たるを免れないのである。又之を他面より觀察すれば、畢竟科學的意義と道德的意義とを成るべく豊富に包容するところの宗教程人間にとつて權威があり且つ適切にして、それだけ進歩發達せる宗教であると謂ふことが出來よう。此の意味に於て、弘法大師の如きは當時既に甚だ進歩せる宗教を示現したものであつて、今日の新時代に對しても猶十分に適應し得る教義であると思ふ。

### 新密教の建設

大師が入唐した頃の密教は、波斯より渡來の祇教、基督教の一派たる景教、密教と略形式を同じうする道教等の影響を相當に受けて居たものと思はれるが、大師は歸朝後更に此の中へ本地垂跡の神道を加味し、又天台、華嚴等に含まるゝ種々の教理を取り入れ、更に之に添ふるに世俗一般の智をも以てしたので、固有の印度密教よりも遙かに廣汎深遠にして而も我國の實際に適應せるものとなり、日本眞言密教とも稱すべき獨特の教義を樹立するに到つた。是恰も科學者が在來幾多の先人の發明を綜合し更に之に自家獨特の創案を組合せて空前の新機軸を編出するのと同

様である。即ち大師は我國古來の歴史を尊重し、傳統の民情を考慮して能く我國體に合致せる新密教の建設を念願としたこと明かであつて、出でゝは祇教、景教、道教等の眞髓を究め、入つては本地垂跡の説に則つて、我固有の神道者流と握手し、所謂兩部合體論を唱道するを辭せなかつた。舊來の佛教の如く只管其の宗義を墨守して他教を排斥し、而も擧つて來世の佛果をのみ高調することは、世俗民衆をして徒に現世を悲觀せしむるに終り、教義の本旨を誤るものであるとし、生を愛し世を樂しむこそ人間の本然であると誨へ、鎮護國家福利民人を主眼とし、即事而眞、即身成佛の現實的極意を以て一貫邁進したことは洵に曠世の達眼と稱せねばならぬ。されば内には法弟に對して慈愛教導到らざるなく、外には衆生の濟度に寢食を忘れ、進んで傳教大師最澄等の高僧と結び、南都の諸宗と親しみ、營々として法教の布達に盡瘁した。従つて 皇室の御信任も厚く一身の榮達も速かであつたが、而も、壯年四十歳の頃、高雄山寺に於て筆墨米鹽の資に窮したと傳へられるのにも見ても、如何に清廉謙讓自ら奉ずることの薄かつたかを窺ふに足るのである。

斯くて常住東寺を中心に高雄山寺や高野山金剛峯寺、大和國室生寺等の間を往來し、又屢々勅を奉じて講經修法を行ひ、努めて諸國を遍歴し、山河を跋涉し、庶民を教化して寸時も倦むことなく、遂に仁明天皇承和二年三月二十一日六十二歳を以て高野山に入定するまで殆んど渝る所が

なかつた。斯く法を弘むるに無双の大勳があつた故、後年長くも醍醐天皇より「弘法大師」の謚號を賜はつたのである。

### 兩部一體說

眞言宗では、金剛、胎藏の二界を兩部と稱し、此の兩部の曼陀羅には天竺に奉祀せらるゝ諸天神祇を網羅して居る。我國では神佛の兩者を兩部の意味に取り、佛は實身本地にして神は其の變身垂迹なりとしたのが所謂本地垂迹說即ち兩部一體論である。僧行基は我朝の天照大神を佛敎に於ける最上の本佛たる大日如來の化身となし、爾餘の諸神は總て其の分神即ち垂迹であつて、之を佛敎にしては佛、神道にしては神と呼ぶのであると唱へた。この說を深く信じ給うた聖武天皇は大日如來の像を本尊として奈良東大寺を興され、之を禮拜するは即ち伊勢大廟を奉祀するに等しいと思召された。

弘法大師も亦之と同様に、天照大神を大日如來に、而して八幡宮を阿彌陀如來に合體せしめた。又皇室に於かれても宇佐八幡を八幡大菩薩に擬らへ佛法を藉りて益々其の神威を高めようと思召されたことがある。

比叡の山神は僧最澄に依つて日吉山王大權現と祀られ、高野の聖地は大師空海の勸請せる四社明神を以て鎮守となすこと之れ明かに神佛兩部の不可分離を現前に指し示す實例である。大師は又、嵯峨天皇に此の兩部一體論を御説明申上げて、それより兩部神道の敎名を勅許せられ且つ東寺を天皇より賜はつて永く眞言の道場たらしめた。東寺は桓武天皇が皇城鎮護の爲めに建立せられたもので、更に東寺鎮護の爲めに伏見の社が造られたとのことである。

予は思ふに、眞理は普遍的に妥當すべきものであるから、時間空間に制約せられて特殊の時、特殊の所、特殊の人にのみ顯現すべきものでない。従つて基督教の神も神道ゴッドの天御中主神も將た又佛敎の如來も皆同一の無限絶對者を表現するものでなければならぬ。唯此の同體不二なる神佛が處により或は民族によつて其の呼稱を異にするに過ぎない。此の意味に於て、予は汎神論的一神敎を信奉せんとするものである。密敎にも一門即普門とか即俗而眞とか唱ふる通り、異宗の佛にせよ外國の神にせよ、苟も迷信邪教でなく且つ新時代の正しき科學、道德に牴觸しない限り自由に之を採り入れ常に寛々とした信仰心を持つべきであると考へる。此の意味に於て、弘法大師の敎理の如きは予の最も信服する所である。

私事に亘るが、拙宅では一つの厨子内に天祖天照大神、明治天皇、大正天皇を始め奉り萬の



天神地祇、釋尊、基督、我家の祖先等を合祀し、毎朝食前、家族一同下婢に至るまで其の前に集まつて忝しく禮拜し、次の如き意味の感謝と誓約とを述べ御祈りをするにして居る。之に依つて益々信仰心を深め敬虔眞摯の氣分を増し次第に心身を醇化して眞理と理想の爲めに、満足、感謝、喜悅、憧憬を以て精進勵行するの習性を養成したいと希うて居る次第である。

### 祈 禱

私共家族一同茲に相集りまして謹で感謝と誓詞とを申し上げます、神様が今日迄に私共にこの尊い精神を御與へ下さいました、それと同時に此の大切なる智識を御授け下さいました、此の兩者は離すべからざるものであつて、此の二つのものを發揮することに於て、人は最も幸福であり、偉大であり、健康であり得るのであります、此の如き人の多き國家は強大となり偉大となり得るのであります。

我國は建國の初めより此の兩者を發揮した御蔭を以て、万世一系の 皇室を戴き、世界無比の國家を形成して居ります、それが爲め私共國民は非常な幸福を得て居るのであります、それだけのことを考へて見ましても、私共は何處までも 皇室に向つて感謝し、祖先に向つて感謝し、神様に向つて感謝せざるを得ないのであります、之を感謝すると同時に之に報ゆるだけの覺悟を持たなければなりません。

それには情操を醇化し、堅き宗教的信念を體得して、働くことが嬉しくあり、人の爲めに力を盡すことが喜ばしくあり、そして常に質實であり、剛健であり、質素であり、謙遜であり、至誠であり、忠實であることに於て、満足を持ち、愉快を感じ、感謝を覺ゆる様にならなければなりません。

私共は何處までも斯くなる様、力を盡すと共に、世界無比なる尊き教育勅語即ち皇道の大精神を遵奉し、學び得たる所の智識を活用して、國家社會の爲め大に貢獻する覺悟でありますから、何卒一日も早く其の體験を得られます様、神明の御加護あらんことを偏に御願申し上げますと同時に、毎日斯様に健康にして愉快に、而も麗はしく甘味しい御飯を戴いて、楽しい生活をなしますことは、洵に感謝の至に堪へませぬ、茲に謹んで御禮を申し上げます。

### 加持祈禱修法の儀軌

密教には此等の儀軌が重視せらるゝのであるが、凡て合法の祈禱を行へば佛の大悲と人間の信心とが感應道交し相加持して之に適應せる生理的・心理的變化を受け一層敬虔眞摯の氣分を増進し心身が次第に醇化靈化されてゆく。そのみならず其の熱誠な祈禱は、其處に同席する他の信者をも自然に感激せしめ同化せしむる力がある。合理的の修法も亦然り、之に依つて菩提心を起し金剛堅固の肉體を得、即身成佛を遂ぐる事が出来る。崇高なる相好、端嚴なる儀容、従つて現はれ、入我々入佛凡一體を實現し得るであらう。

弘法大師は此の眞理を活用して種々の事業を遂行した。一例を擧ぐれば讃岐國の萬濃ノ池が屢々洪水の爲に堤防を決潰して住民を悩ますので、大師は池畔に祭壇を設け熱心に祈禱修法を行つ

つたが遠近の村民擧つて之に感激同化し發奮して工事に努力した結果、空前の堅固な修築を完成することが出来、爾來今日に至るまで一回の水難も無いと傳へられる。

祈禱修法に依つて神佛の加護を喚起し得るや否やといふ奇蹟的問題に至つては、少くとも、今日の吾人の智識を以て之を科學的に立證し或は否定することは出来ない。否、宗教上の問題はさておき所謂心靈現象等に就いても未だ不可解の域を脱しないものがある。英國の有名な科學者ウイリアム・クルークスやオリバー・ロツチ等は精靈と電磁波との關係に就いて種々の新説を述べて居るが、これは恐らく彼等のみが特殊の靈感を持ち得るに至つた所から論斷したものであらう。例へば近親知人等の間に於ける變事を靈感するが如きそれである。最近科學者に依つて其の存在を實驗的に認識せられた所のハイ・ベネトレーチング・レー又はコスミック・レーと名けらるゝ天來の波（<sup>ウェイツ</sup>恐らくは一種の電磁波であらうと云はれる）の如きも亦今日の科學に於ては可なり不可思議の部類に屬するものである。此等の究明は一に他日に待たなければならぬが、特に前述の宗教的奇蹟の如きは最も神秘的な世界であり、「絶対」なるものゝ性質上恐らく之を科學的に證明せんとすることは根本的に不可能であり矛盾であるといふべきかも知れない。唯併し、將來吾人の智識が無限に發達しゆくに従ひどの程度にまで神秘の世界に突入し得るかといふ問題に

對しては深き興味と期待とを持つてよいであらう。

之を要するに、人間と神佛との感應道交は既に動かすべからざる宗教的事實である。よし之を科學的客觀的に説明し得ないとしても決して其の權威を傷くるものではない、否その故にこそ絕對的であり、吾人は唯虔んで宗教の前に脆くのである。謂はゞ之は其の人の心の有無に由ることとで、シュライエルマツヘルの所謂情意の問題であるから、一に體驗そのものに依つて自ら味得するの外はないのである。とにかく、古來の宗教的天才は何れも如上の靈妙幽遠なる境地を體得して居つたことは疑ふの必要がないと思ふ。

茲に留意すべきは、如上の加持祈禱修法等の儀式は飽くまで健全なる宗教としての合理合法的のものでなければならぬ。若し世間に往々見受けらるる如く、迷信邪教に附隨する所の不法背理のものや、又假令然らずとも、内に何等の信仰心、求道心無くして唯其の形式のみを追ふが如きは明かに有害無益にして、却つて宗教の眞諦に遠ざかるものとして大いに戒慎すべき所である。

### 大師と科學工藝

弘法大師が比ひ稀なる博識多能であつたことは既に述べたが、特に其の書道に秀でゝ居たこと

は夙に人口に膾炙し、又繪畫に於ても雄渾の風格を具へ、彫刻にかけても非凡の技を示したことは遺作の佛像に徴しても明かである。而も予の大師に就いて特に敬服するのは、斯くの如く宗教、哲學、藝術の各方面に亘つて傑出せるのみでなく、更に科學工藝乃至殖産工業の領野に於ても頗る精通し其の貢獻の著大なりし點である。例へば、製紙、製筆、製墨等の法を齎らし、石炭、石油を燃料に供する途を教へ、茶栽培並びに製茶の法を説き、藥石、藥草を與へて病人を救ひ、植林開墾に努め、道路橋梁を整へ、水脈を測つて各所に井戸を穿ち、温泉を鑿き、建築の様式を改むるなど、其の利用厚生の実を擧げ、日常生活を豊かにして、今日の所謂科學文明の上から國利民福を増進せしめたことは實に枚擧に遑がなく、此の點他の宗教家中殆んど其の比儔を見出すことが出来ない。又嘗て京洛の地に疫病の流行した際、大師は唐より齎らした藥料を加持の神水にて煎じ之を多數の患者に施與して彼等を平癒せしめた如きは、科學と信仰心との結合を最も適切に實現した事例と謂ふべきであらう。即ち大師は又一面、優れた科學者であり將た技術家であつた。而して之れ全く如上の崇高なる宗教的信念と該博なる科學的智識との融和統合に依つて實現せられた偉業に外ならないのである。(昭和三年八月)

## 神の國日本

今上陛下の御即位を仰ぎ奉る我等國民の光榮と幸福とは固より筆にも盡される所でないが、私は忝くも御盛儀の末尾に列することを得た臣下の至情より、特に感銘した二三の事柄を茲に書き綴らせて頂き、向後ますます君國の爲に碎身するの覺悟を極はめたいと思ふ。

先帝陛下御大禮の節には、私は、大嘗祭及大饗宴に參列するの光榮を荷うたけれども、今回は大饗夜宴にのみ御召を蒙つたのであるから、最も重要な御即位式や大嘗祭の御儀式に就いて、特に申し上げることの出来ないのを御諒承願つて置く。

### 聖上陛下の御信仰

昭和三年十一月七日、聖駕を京都驛に奉迎して、私の第一に感激したのは、聖上陛下の賢所を奉遷し給ふ御有様を面のおたりに拜し上げた時である。その敬虔な御態度、その嚴肅な御様子は、今更ながら、陛下が如何に敬神崇祖の御信仰に篤くおはしますかを窺はれて、私は思はず感涙に咽んだのである。それと同時に、鋭く私の胸を衝いたのは、古來神民と稱せられた我國民一般就中智識階級と謂はれる人々が果してどれだけ信仰心を有つてゐるであらうかといふ一事であつた。

天祖天照皇大神に依りて宏謨の基礎を開かせられた我日本は「神の國」である。上下億兆常に敬神崇祖の大信仰を體して天壤無窮の我國體の尊嚴を自覺し、祭政一致、君臣同體、忠孝不二の惟神の大遺を萬古に貫くことは是れ我建國の大理想にして即ち大和民族の大使命であらねばならぬ。然るに信仰より觀た我國民の現状は果して如何であらうかを考へて、私は今、この尊き範を垂れさせらるゝ陛下の御前に、只々恐懼に堪へぬと共に、殊更、私共教育事業に従事する者は、この大御心に鑑みまつり深く反省する所が無ければならぬと沁々感じ入つた次第である。

### 神代ながらの御儀式

拙宅は幸にも、京都御所に間近き處にあるので、十四日の大嘗祭の夜は自宅に謹慎して、先帝陛下の御時參列の榮を得た際の光景を偲び、神代ながらの崇高な御儀式を胸に描いて、庭燎を焚く人の姿など目に見える如く覺えた。斯くて夜は次第に更け渡り、遂に十五日の午前四時前に到ると、それまでは唯沈々として雨滴(當夜は雨であつた)の音のみであつた四邊の靜寂が、突如、澄み渡れる嘯唳たる喇叭の音に破られた。さては唯今御祭事が滞りなく終らせられしかと慶ばしく感ずると同時に、云ひ知れぬ森嚴の氣がひし／＼と胸に迫り、思はず端坐して御所の方を禮拜

しつゝ無量の感に打たれたのであつた。

### 老臣への畏き思召し

大嘗祭の當夜は、陛下の老臣をいたはり給ふ畏き思召から、幄舎内には蒸氣煖房の裝置が設けられたと承るから參列員の方々は多分十分に寒さを凌がれたであらうが陛下御自身には何等の煖房設備も無い御殿に於かせられて、長時間に亘り御祭事を執り行はせられる御有様を拜察し奉り、洵に畏れ多く感ぜざるを得なかつた。しかし、堅き御信仰のもとに御緊張あらせられる玉體には、斯かる場合決して御風邪など召される筈は無いと確信して自ら慰めてゐた次第であるが、果して些の御障りもなく却つて益々御元氣を加へさせられたと洩れ承るだに悦ばしき極みであつた。

### 超合理的事實

畏れ多いがこれと思ひ合はされるのは、彼の寒詣りや水垢離を取る信仰の人々が、風邪を引いたためしを聞かぬことである。これ等は恐らく、信仰心に依つて眞劍になると、超合理的或は神秘的とも云ふべき現象を呈し生理的にも異常な作用を喚び起す爲であらう。さりとして勿論科學

を無視してよいといふ意味ではなく、科學は十分尊重しなければならないが、人生は科學のみで律することは出来ない以上、そのみに捉はれて、それを超越した、理智的には寧ろ不可思議とも見える奇蹟的事實の儼に存在することを心付かないのは大變な間違ひである。しかし、この邊の事柄に就いては他の機會に詳しく述べて置いたから茲には繰返さない。(別項「眞劍味」参照)

兎に角、この人生に最も大切な信仰方面の真相を了解せず、従つて今回の御大典に際しても我國として最も神聖な傳統的の御儀式を、唯、科學的智識の見地からのみ説明し或は批判しようと試みた人士のあつたことは洵に淺薄輕率であると申さねばならぬ。

### 信仰は體驗に俟つ

信仰は體驗に俟つことも一再ならず論じたが、宗教を輕視する人々は畢竟するに自ら「信仰した」ことが無いのである。謂はゞ食はず嫌ひなのである。或る人が、紅葉よりも銀杏の方が綺麗だと云つた、その人に幾ら説明しても紅葉の美しさを呑み込ませることは出来なかつた、何故なら、その人は色盲であつたからだ。宗教を智識的にのみ判斷して之を排斥したり輕蔑したりするのは恰も如上の色盲が紅葉をきたなると同然である。我々は先づ省みて斯かる宗教的色盲を

治療しなければならぬ。そして、信仰に伴ふ或る尊い心の感じを掴み得なければ、ほんたうの人生を了解することは出来ない。

### 家族・親族へ光榮を願つ

十七日夜、大饗の恩命に浴し、崇嚴と優美を極めた舞樂殿の裡に、忝くも前列の腰掛に席を頂いたので、兩陛下、秩父宮殿下、高松宮殿下を御始めとし、各皇族方を目近く奉拜することの出来たのは、何たる光榮かと感泣の情を禁じ得なかつた。洵に君臣和合と申すか、一種名狀し難い靄然たる靈氣の場内に満ち渡るのを覺えて、有難さに身内のふるえるばかりであつた。

斯くて、萬歳樂、太平樂の拜觀を了へ、少憩の後、別殿に移り夜宴の御儀に列なつたが、此の度は御座所より遠く離れて遙かに 兩陛下を拜し奉る場席であつた。私は禁酒禁煙であるから僅かにシャンパンの一滴を戴き、心から感謝し奉ると共に聖壽の無窮を御祈り申上げた。この時、私は、畏くも 陛下には禁酒禁煙であらせられると拜承致すから、斯かる御儀にはいかゞ遊ばし給ふであらうかと、賤が身の、雲上の大御心まで拜察し奉つて思はず恐懼したのであつた。私は當夜懷中重箱を用意して參つたので、御馳走を少しも残すことなく之に容れて戴き歸り、家族や親

威の者に分つて光榮を共にすることを得たが、中には其の儘残して拜辭した参列者の方々の勘なくなかつたことは、陛下の厚き思召に對し奉り洵に勿體なく相濟まぬ氣がした。これ等の事柄も亦平素特に教育者の注意すべき點ではあるまいか。

以上は甚だ斷片的ながら、御盛儀の末尾に陪席することを得て私の特に感銘した事共である。

### 今上陛下の御體驗

畏くも今上陛下には、夙に、東宮にておはします御時より、或は攝政の御大任を御遂行あらせられ、或は御外遊の壯圖を御決行あらせらるゝ等、その御天資の英明にして御聖徳の深厚なることは、汎く内外に著聞する所である。今や皇祖皇宗の御威靈を奉じて一系無窮の大統を繼がせ給ひ、内は教化を敦くし民心を和會し外は國交を親善にし世界の平和を保ち普く人類の福祉を益させられむと日夜宸襟を碎かせ給ふ忝さは、之皆、日本建國の大理想に則り惟神の大道に據らせらるゝに外ならないことは、御即位式の勅語にも明示し給ふ所である。

更に洩れ承る所によれば、陛下は農業獎勵の有難き思召より、宮中に水田を設けさせられ、御手づから稲苗をとらせられて植付を御試み遊ばされたとの御事である。又、陛下が何事によら

ず常に御熱心なる研究的の御態度を以つて臨ませられ、従つて凡ゆる方面の御智識に富ませ給ふことは屢々拜聞する所であるが、殊に生物學に關して御造詣深く、御自ら顯微鏡を御使用になつて仔細に御研索遊ばさるゝ由であり、尙又、體育方面にも深く大御心を注がせられ、馬術、角力、ゴルフ等に玉體の御鍛鍊を御努め遊ばさるゝ等、その何れも「體驗」を重んぜさせられ進んで「實踐」を期し給ふ尊き御精神は、之亦偏に、敬神崇祖の篤き御信仰の發露に外ならずして、是れぞ即ち乾徳をして彌々益々高からしむる所以であると、恐れながら拜察し奉るのである。

### 神の國日本の具現へ

今や昭和の聖代に入り、叡明一世を蓋ひ給ふ陛下を新日本の元首として戴き奉る我等臣民の光榮と幸福とは、何ものを以つてか之にたくへることが出來よう。而も大和民族の素質は歐米人の夫れに優るとも決して劣るものでないことは公正なる學者の定説である。されば所謂神民たる我等日本國民は、宜しく日夜聖旨を奉體して相共に天業を翼賛し奉り、眞に建國の大理想に適ふ神の國日本を具現し君臣一如の國體の精華を發揚すると共に、延いて世界の平和、人類の共存共榮の爲めに、堅き信仰を以つて飽くまで粉骨精進する所が無ければならぬと思ふのである。(昭和四年一月)

(特に少年少女諸君の爲めに)

序言——人類の目的と我國民の覺悟

萬物の靈長たる人類は最高理想の文化文明を有する社會を完成することに向つて凡ゆる努力を傾注すべきものと私は信じて居る。

我日本國民は、天照大神の御神勅に現はれた建國の大理想に則り、終始一貫此の惟神の大道を遵奉し、天壤無窮の皇運を扶翼しつつ、眞に「神の國」の美名に背かざる國體の確立に向つて、上下一致幾千年來の努力を傾倒してゐること申す迄もない。

畏くも 明治天皇の御製に

千早振る神の御代より一筋の 道を踐むこそ嬉しかりけれ

と仰せられたのは即ち惟神の大道を御實行になることが第一の御満足であらせられるとの大御心に拜されるのである。

又、

目に見えぬ神の心に通ふこそ 人の心の誠なりけれ

の御製は、目に見えない神様と感應道交するやうになつてこそ人間は始めてほんたうに誠の道を發揮することが出来るのであるとの御意に拜誦する。

實に明治天皇は斯くの如く偉大なる御信仰を御體得になつたのであつた。

凡て人は各々堅き宗教的信仰(信仰とは人が神を信ずることに依つて起る神に對する道德的狀態とも云ふべきもので、その信仰の對象とする所は必ずしも「神」の言葉で限定されなくとも或は佛、天、絶對者など何れの觀念でも差支ない。しかしそれは今日の科學や道德に背馳するやうな傾向のないものでなければならぬ)を有つことが何よりも大切な事柄であつて、幼少の時より宗教的雰圍氣の家庭に生ひ立つことに依り、之に順應せる生理的・心理的醇化(例へば悲しい時には顔が青くなり涙が出る。悲しくなるのは「心理的變化」であり、顔が青くなり涙が出るのは「生理的變化」であつて、この二つの變化は同時に起る故に「生理的・心理的變化」と云ふのである)を與へられ、次第に信仰心を生じ、更に長すると共に社會や學校に於て受ける教育が適當であれば一層之を助長せられ、一方健全な體育と相俟つて益々情操及意志の鍛鍊が積まれ、智育が之と融合

して、遂に確乎不拔の宗教的信念（人が信仰を有つと信念を生ずるが、之を反面から云へば信念とは統一ある信仰生活を営ましめる原動力となるものである）を體得するに至るものである。斯く信仰心の涵養と適當な體育、智育とが相伴うて始めて人は智情意の發育の調和せる圓滿な人格を養成しその眞價を發揮することが出来るのである。一體、智育は主に頭腦を發達せしめ、體育は主に意志を鞏固ならしむるもので大小筋肉——主として手足の鍛鍊を與へ、信仰教育は主に情操の醇化、言ひ換ふれば胸腹の鍊磨を旨とするものである。故に此等三者は人格の修養上に互に引離すべからざる要素であつて、その中何れの一つが缺けても健全な人格を作ることが出来ず必ず畸形變態な結果を招くものである。中にも信仰心は人格の中心となるものであつて、これに基礎づけられない智育や體育は却つて有害なるを免れない。この點より見て、今日の所謂智育や體育には尙甚だ不滿を感じるころが少なくない。佛國の大學者クワートル・ファージが「人間と動物との相違は宗教の有無にあり」と云ひ、又英國のウエリントン將軍が「宗教なくして人間を教育するのは利口な惡魔を作るに過ぎぬ」と云つたのも全く此の點を指摘してゐるので、宗教的信仰を基本とするのでなければ到底眞の智育、德育、體育は與へられないことを意味するものである。茲に私の謂ふ宗教的信仰とは超人間的將た超自然的の偉大なる絶對の力を信じこの力

の啓示する所に従つて眞理を辿り理想を追ふことに感謝と満足、憧憬と歡喜とを感じることである。而もこの宗教は前に述べた如く、道德や科學と何等衝突する所なき、時代に適應したものでなければならぬ。實際、人間は一たび堅き信仰心を體得すると、自ら不撓不屈の意志を生じ、成し遂げざれば止まぬ氣概に溢れ、而も純眞なる高度の情操を得て感謝と満足、憧憬と歡喜の裡にほんたうの「誠の道」を歩む様になるものである。一口に言へば、眞の宗教的信仰は人間をして常に感謝しつゝ勤勞せしめ實行せしむるものである。

我國の状況を見るに幸か不幸か人類生活に最も必要なる食糧、燃料、乃至國富の要素たる工業原料等は甚だしく不足し或は全く缺乏してゐる。之に反し北米合衆國の如きは此等の物資が頗る豊富であつて海外にまで輸出する額も夥しいものである。「天何ぞ彼に厚くして我に薄きや」と慨嘆したい氣も一應は起るが、しかし、再考すれば、これは強ち悲觀すべきことではなく、考へ方によつては却つて我國に天恵のあることを感ぜしむるものである。思ふに彼のゲルマン人は不毛の原野を開拓し自然科學の力を應用して遂に今日の獨逸文明を建設し得たのではないか。故に我國民にして確乎たる信仰と自覺さへあれば、従つて高度の情操が起り鞏固なる意志が與へられ、熱心なる研究と努力に依り、困難を困難とせず、自然科學を活用し、發明發見を隆盛にして、飽



くまで我民族の天賦の才能を伸長すると共に我國體の精華たる惟神の大精神を發揮することに依り我國運の發展は勿論、全人類の福利を増進し全世界の文化を向上することは決して不可能ではないのである。元來我大和民族の素質は毫も歐米人の夫れに劣つて居ない。然るに遺憾にも明治維新以後一般國民は大切な信仰心を養ふことを忽にしたが爲め、折角與へられた學問智識を十分に且つ正しく活用すべき精神と實行力とを發揮することを得ない状態に陥つたのである。それ故、國民は一日も早く覺醒し、信仰心の涵養に第一眼目を置くと共に、徒らに我天然資源の貧弱なるを歎かず却つて之に奮起し、須らく發明創造を盛ならしめて以て國家社會の繁榮、最高理想の文化文明の完成の爲めに大いに貢獻する所がなければならぬ。之却つて天恵を我に厚からしむる所以である。特に第二の國民たる青少年少女諸君に對し、此の覺悟と奮發とを切望して止まない。

### エチソンの生ひ立ち

エチソンの祖先は今より約二百年前の西曆一七三〇年、和蘭より米國へ移住したものである。曾祖父は百〇四歳、祖父は百〇二歳、父は百歳迄生きた代々長壽の家である。父サミュエルはオタリオ州ヴィンナでホテル業を営んで居たが、女教師ナンシー・エリオット嬢と結婚して、一

八四二年オハイオ州ミランに移り、屋根板製造業に従事することとなり、相當の使用人を置いて商賣に勵み、又ナンシー夫人は高等教育を受けた人で内助の功が少なくなかつた。夫人の父は宣教師でその祖先は獨立戦争に活動したスコットランド出身の軍人であつた。又夫人の父の兄弟二人、及夫人の兄弟二人共皆牧師であつたといふから、その家庭は相當に教養あるのみでなく宗教的色彩も深かつたことが想像される。夫人は中學校の教師としてヴィンナに奉職中、エチソンの父と知り合つて結婚し、二男一女を擧げたが、エチソンは其の次男として一八四七年二月十一日（我弘化四年）ミランに生れトーマス・アルバ・エチソン（Thomas Alva Edison）と名付けられた。彼が八歳の時一家はミシガン州ヒューロン港へ移住した。あの鐵の如き意志と不屈の氣力とによつて、或る時は二晝夜の間一睡もせず仕事に續け、而も僅かに六時間の睡眠で元氣回復するといふ精力振りに仲間の研究者をして全く辟易せしめた所の大發明家エチソンも、子供の時分は寧ろ虚弱であつた。従つて學校の成績も餘り面白くなかつたので間もなく學校を辭め主に母の手許で教育されることとなつた。これが却つてエチソンには好結果を興へ、賢明なる母の薰陶に依り、信仰心は養はれ、勤勉の習慣はつけられ、學問の趣味は訓へられて、後年の偉大なる業績の基となつたのである。殊に、エチソンは凡そ實驗に役立つと思ふ事柄は一度習つたら決して忘

れなかつた。彼は母の教導により、既に十歳位の時から、勉強することは決して苦しいことでもむづかしいことでもなく、否却つて容易で且つ愉快なものであるといふことを體驗し、而も學校へ行かないのに、英國史、羅馬史、種々の科學書等を讀了して居たことを見ても、如何に母の教育が巧妙で且つ又彼が伶俐であつたか、窺はれるであらう。彼は書物で讀んだ理化學上のことは必ず實驗し、それが正しいか否かを確めることを好んだ。又物を組立てる趣味と才能があつて何時もそれで楽しく日を過してゐた。これが自然、發明家たるの基礎をなしたことは云ふまでもない。このエジソンの生ひ立ちに鑑みても、人は幼少時代に於ける家庭の教育が非常に大切なもので殊に早くから信仰教育と勤勞教育とを重んぜねばならぬことが明瞭であると共に、我國現時の教育にはこの點に大なる缺陷のあることが自ら首肯されるであらう。

### エジソンの少年時代

エジソンは少年時代から特に物理化學の實驗を好み、その研究に熱中し、多くは實驗室に閉ぢ籠つてゐた。殊に十一二歳頃からは主として化學上の實驗に苦心した。彼が如何に熱心であつたかは、その實驗に用ゐる藥品が約二百瓶もあつたといふことを見ても分るであらう。しかし彼の

家はあまり豊かでなかつた。そこで彼は、自ら實驗費が稼げることを、無料で新刊書が讀めること、デトロイト市の圖書館で暇な時間が利用出来ること、云ふ理由の下に兩親の許可を得て、居住地ヒューロン港とデトロイト市との間の列車に新聞賣子となり進んで勞働生活の體驗を積むこと、なつた。これは彼が一八五九年十三歳の時であつた。後には列車の一隅に自分の實驗室を移し、研究の傍ら一部六錢の「週刊ヘラルド」と名づける列車新聞を發行し、毎週その百部以上を賣捌いて研究費の補助にした。それが十五歳の頃である。その後不幸にして實驗用の隣から發火し、列車内の實驗室兼印刷所を焼いた爲め、鐵道當局から苦情が出て、遂に再び我家へ實驗室を移すの止むなきに至つた。しかもこの事に依つて彼は、人間が如何に注意力が必要であるかを、沁々感得したことであらう。

彼は或る時、驛長の子供の危険を助けたことが縁となり、その驛長から電信術を教へられたが、この事から電氣なるものに對して深い興味を覺えた彼は、爾來電信の實驗に耽るやうになり、次いで十六歳の時電信技手の職に就いた。さうして益々研究を進めた結果遂に一種の簡便な信號裝置を案出した。之實に彼が發明の第一歩である。斯くして彼は職務の傍ら絶えず好きな實驗を續けてゐたが、好きこそ物の上手なれで、彼の技術は大いに進歩した。

或る日彼は議場を參觀して思ひ着いた所により、議員の投票を記録する便利な電氣装置を考案し、之に依つて一八六八年始めて特許を得た。その時彼は二十二歳であつた。彼がいよ／＼發明家として身を立てようと決心したのはこの頃のことである。そこで彼は更に二重通信法の發明に取りかかり、先づ紐育市に出でて電信會社の技手となつたが、間もなく、彼が實地經驗に優れてゐることを認められ、一躍月俸三百弗を以つて重用せらるゝに至つた。その後一種の通信器を作り四萬弗の金を儲けたので、直ちにその金でニュージャーシー州ネウオーク市に工場を建て、いよ／＼發明に専念することとなつた。これ以來彼の發明は續々として現はれ、殊に三十五六歳の頃は其の最も油の乗つた盛りであつた。

一八七二年から一八七五年に掛けて遂に三重電信、四重電信を始めその他この方面に關する種々の重要な發明を完成し、又電話に就いても研究を開始した。一八七六年彼は同州のメンローパークへ移住したが、此處で先づ炭素送話器を發明し、翌一八七七年には蓄音機を創作した。是等の發明あつて以來彼の名は全く世界的となつた。

### エヂソンの電燈發明とその恩澤

エヂソンは電燈の發明に對しても早くから研究を怠らなかつた。その當時は未だ漸く弧光燈があつたのみで、各國の學者は、屋内用として適當な小燭光の電燈を得ようと苦心して居た。その中始めて白金電燈を發明し之を製作したのは米人スター（一八四五年）及英人グローブ（同年）であつた。スターは鹽で白金に代ふるに炭素繊維を以つてした。しかし此等は何れも單なる試作に過ぎなかつた。一八五四年に至り獨人ゲールは始めてやゝ使用に耐ふる炭素電球を作つた。その後一八七七年乃至一八八〇年に互りエヂソン、マキシム、ソーヤー、マン、スワン等が夫々白熱電燈の發明と改良とに努力したのであつた。

エヂソンは最初やはり白金繊維に着目したが、嘗て電話器を研究した際に炭素を用ゐたことを思ひ出し、又門弟アプトンの進言もあつたので、先づ紙を馬蹄形狀に切つて蒸焼にし、空氣中に於て電流を通じて見たが、直ちに燃えて仕舞つたので、之を眞空内に於てすることを考へ、眞空硝子内に炭素繊維を封じた電球を作ることまで漕ぎつけたが、これも僅かの時間しかもたなかつたので、更に白金に就いても同様の實驗を繰り返し、種々苦心の揚句、竹（日本で出來た扇子か又は傘の骨であつたといはれて居る）を白熱繊維に利用した炭素電球を作つて遂に成功の域に入つた。この研究に供せられた竹が我日本の産物であつたことは特に記憶すべき所であるが、米

國には竹が産出しないので、當時エチソンは竹を天然産のものでなく製造されたものと思つて日本に注文したのだとの説もある。「竹宗」といふ印のある包装で輸出されたさうだが、之が京都府下八幡の竹であつたことが後にエチソン翁の手紙によつて分明した。エチソンは日本竹の表皮の下にある部分を用ゐて織條を作り遂に五六百時間の點火に耐へるものを得た。之が爲め我京都附近の竹が可なり米國へ輸出されたものであつた。彼が最初に作つた實驗的電球は、四十五時間に亘り點火することが出来たので、先づ大成功と云ふべきであつたが、これは一八七九年（明治十二年）十月二十一日、今（昭和四年）より丁度五十年前のことである。それに先つこと一年の一八七八年英國人スワンも亦木綿糸を蒸焼したものを用ゐて炭素電燈を作つた。だから英人は自國の方が白熱電球の元祖だと稱してゐる位で、我々はエチソンと共にスワンの功績をも忘れてはならぬ。

發明は固より苦心を要することであるが、又それに劣らず骨が折れるのは之を實施して實用的の商品を得ることである。然るにエチソンはこの發明を實用化することにも先鞭をつけた。之亦彼の偉大なる所である。即ち彼はメンローパークの工場に於て、白熱電球のみならず更に發電機の製造や送電配電方式等の研究にも苦心し、遂に一八七九年大晦日の夜、始めてメンローパークに於て電燈を點じ、之を一般に公開して世人を驚嘆せしめた。之に自信を得て、愈々一八八二年、

紐育市に於て電燈會社を開業するに至つた。それより彼は銳意電燈事業の發達に力を盡したので世界各地にエチソンの名を利用した工場や電燈會社が相次いで設立された。英國のエチスワン會社、米國のゼネラル電氣會社、紐育エチソン電燈會社等は即ち其の主なる例である。

エチソンの白熱電燈完成後約二ヶ月、丁度彼がメンローパークに電燈を點じて世人を驚かした日から十日許り前の、一八七九年十二月二十一日の紐育ヘルラド紙はエチソンのこの大發明の爲めに全紙面を擧げて報道に盡したのであるが、斯くの如き御伽話のやうな空想を麗々しく報道するとは怪しからぬと擔當記者は世間から大いに非難せられたさうである。實際石油ランプと僅に弧光燈しかなかつた當時のことゝて、斯かる輕便な家庭用の電燈が、焰も發せず危険もなく瓦斯や煤煙や臭氣も出さずに點火するなどは全く想像の外であつたに違ひない。これに就いて次のやうな笑ひ話のエチソンの口から傳へられて居る。或る小發電所を建設するに當りエチソンの助手の一人が、エチソンに向つて「私は斯うして先生と一緒に働いてゐる御かげで發電所はどうやら自分自身の手で建設し得る自信が出来ましたが、只一つ、私には判らないことがあります」と云ふので「それは何か」とエチソンが反問したら、助手は「先生が如何にして電線を通じて送るべき油を得られるのか、呑み込めません」と云つたさうだ。やゝ専門家の部類に屬する人達です

ら當時はこの程度であつた、況んや一般素人に摩訶不思議とされたのは當然でもあらう。而もそれから僅か十日の後にメンローパークに電燈が輝いた時の世人の驚嘆が思ひやられるではないか。

爾來茲に五十星霜、電燈は益々改良進歩を遂げて一八九七年にはネルンスト電燈、一八九八年にはオスミウム電燈、一九〇一年乃至二年にはタンタルム電燈、一九〇四年には金屬化炭素電球と云ふやうに歐米諸國で諸種の有用な發明特許が相次ぎ、又一方に於ては一九〇三年乃至四年に亘リユスト・ハナマンのタングステン織條が特許され、始めてタングステン電球が世に出たが、これは未だ頗る脆弱で殆んど實用に適せなかつた。越えて一九一〇年米人クーリツヂの熱處理法に依る線引きタングステン織條が特許されるに及んでタングステン電球は面目を一新し、更に一九一三年同じく米人ラングミューアの瓦斯入電球の特許が出て之が完成されてから革新的の飛躍を遂げたのである。序に申添へるが、私の管理する財團法人青柳研究所に於ても去る大正八年（一九一九年）右の瓦斯入電球を改良した所謂エコノミー電球（或は半真空電球）を發明（特許は一九二一年）することを得たのは欣幸である。（發明の時日は大抵の例で特許の時日より少くとも一二年前であるが、これは審査に相當の時日を要する關係である）。エヂソン及びスワンの炭素織條電球の發明から現在に至る白熱電燈發達の經過は概略右の如くであるが、今や我國內でも一

ヶ年の電球需要高六千萬個、此の價格二千二百萬圓の多きに上ると稱せられ、米國の如きは昨年中の需要五億七千七百萬個、一億五千九百六十萬圓に達するとの盛況を傳へられて居る。而もこの普及發達の趨勢は眞に幾何級數的であつて、全く文字通りの日進月歩を示してゐるのである。

今秋（昭和四年）は全世界を舉げて電燈五十年記念祭が行はれ、來る十月二十一日はその深き思ひ出の日として、エヂソン翁がその創始に係る電燈の光り眩ゆき祝福の裡に人類の大恩人として萬國民の感謝を受ける光榮の日である。自ら發明した幾多の文明の利器の恩澤を現前に目睹しながら世の讃仰を一身に集めるとは何たる幸福であらうか。而も翁は猶之に甘んぜず今や八十有三歳の高齡を以つて日々十六時間以上の研究に没頭し毫も倦むことを知らないと言ふ。翁は嘗て實驗の際誤つて爆發藥の爲めに片方の耳を悪くし、爾來よく聞えないので、或人が翁に「耳のよく聞える器械を發明されてはどうか」と云つたら、翁は「仕事が非常に忙しいのに、この上耳が聞えるやうになつては、物を聞く爲めに時間が費されるし、又家内も始終自分に向つて話したがるだらう」と答へたさうである。事程左様に翁の寸陰を惜しむ勤勉振りは全く感嘆の外はない。

今日エヂソンの發明は米國に於ける特許だけでも無慮千二百件に及び、此等を基礎として發達した工業は米國內のみでその總資金三百十二億圓に上ると云はれてゐる。之を全世界にしては殆

んど計り知ることを得ないであらう。唯一個の頭腦、實に偉大なる哉。而も翁の家系は由來長命の流を汲む。仍つて翁も亦超人的の長壽を保ち、幾久しく世界人類の福利の爲めに層一層の功績を擧げられんことを我々は相共に祈らうではないか。

さて、上述の如く電燈はエヂソンを始め數多の人々の努力によつて發達し遂に今日の如き隆盛を見るに至り我々に多大の恩恵を與へてゐるのであるが、その他萬般の文化文明は何れも同様に幾多先人の努力奮闘の結果であり賜である。されば我々は之に對して深く感謝すると共に、更に益々最高理想の文化文明に近づく爲め發奮興起して發明創造を盛んにし之を發展せしめ、その遺業を後世に傳ふる所がなければ、この世に生れて來た意義と目的とに背くものと謂はなければならぬ。我々は何處までも創造的の進歩に向つて努力せねば相濟まぬのである。斯く考へると、發明創造こそは實に最高の道德であり、忠君愛國は即ち發明創造にありとも謂へるであらう。この意味に於て將來我帝國の運命を荷ふべき第二の國民たる少年少女諸君は今より堅き覺悟を以つて、智識を研き情操意志の鍛鍊を積み、叙上の大使命を果すべき用意を怠つてはならぬ。さもなくば諸君が人間として生れて來た意義を失つて仕舞ふのみでなく、却つて道德的に罪深きものともなるであらう。宜しく年少の時代から十分に智情意の鍛鍊を心掛け、以つて幾多のエヂソンが

諸君の中より輩出せんことを囑望して止まない次第である。

### エヂソン研究所の訪問

私は、去る一九一六年（大正五年）十月十九日、エヂソン翁を識れる故高木舜三氏（當時三井物産紐育支店在勤）の案内で、紐育市外オレンヂなるエヂソン研究所を訪問した。（私は高木氏の厚意を忘れることが出来ないで、茲に同氏の名を掲げて聊か感謝の意を表させて頂くのである。）丁度その翌日の夜十時二十分を期してオルバニー市なるニューヨーク州立大學の總長フィンレー博士より翁に向つて大博士の學位を贈與する儀式が長距離電話を通じて舉行せられる豫定であつた。之が爲め式場に當てられたこの研究所内小圖書館の卓上に數多の受話器が列べられてあるのを見た。當夜の状況を後に聞いたところでは、遠く二百哩を距てたオルバニー市よりフィンレー總長は式場に待ち受けた翁に向つて電話を通じて次の如き挨拶を送つた。

『予は二百哩の遠きにあるこのホールに於て、貴下の發明せる煌々たる電燈の下に、貴下の創成せる器械を用ひて、蓄音、遠距離送話及送影の完成に對し、満腔の祝意と感謝を捧げ、州代表の當大學に代り、貴下に最高學位を贈呈するの光榮を有す。云々』

翁は夫人、令嬢、家人等と共に受話器に耳を傾けながら之を受け、そして總長及大學に向つて感謝の辭を述べられた。之に次いでニューヨーク州知事ホイットマンその他知名の士も夫々遠隔の地より電話にて翁に祝辭を送つた。如何にも奇抜にして而も簡單極まる授與式であつた。此の大博士の學位は一八五〇年の第一回以來漸く二つ目のもので洵に翁の功績に相應しき光榮であつた。

私は翁の秘書メドクロフト氏の案内で翁の實驗室を見たが、それが僅か五間と二十五間の平家建煉瓦作木造屋根の質素な一小建築に過ぎなかつたのには驚かされた。翁は其處で喜んで私共に會はれたが、當時七十歳(數へ年)なるにも拘らず、その童顔に温かい微笑をたゞへつゝ熱心に話を續けられ、殊の外時間が経つても不快の顔さへ示されなかつた。而もその傍ら絶えず翁は實驗室中の仕事に注意を拂ふことを怠らなかつた。翁は机の側に立ちながら話されたが、粗末な古びた紺の洋服と寫眞に見らるゝ通りのカラー及黒の蝶ネクタイを着け、爪は實驗の爲め眞黒に染つてゐた。當時は恰も歐洲大戰中で、翁は或る化學製品の研究に熱中してゐられたのである。

翁の助手は七八人ゐたが、その内大學卒業者は三名でその他は中學程度の出身に過ぎなかつた。翁の發明研究に對する意見は「中學校出で十分で大學出の必要はない、これに粗末な机と僅かの實驗装置とを與ふれば足りる、贅澤な設備などは無用の長物だ、あとはその人の發明力次第」と云ふにあつた。

「その發明力の有無を見出すには多くの人に問題を與へて試験するがよい。例へばペンキ塗を五十弗で請負つた人が、數多の子供を狩り集め、目的の壁を等分して彼等の受持を定め、所定の仕様書通り一番早く塗り上げた者に限り五弗の賞金を與へると約束する。子供は賞金を得ようとして一生懸命に競争するだらう。この際一番早かつた子供だけに右の五弗を與へ、あとの費用は僅かのペンキ代だけで、殘金全部は己れの懐に入れることが出来る。この様な工風も亦一種の發明たるを失はない。此の如き考案力を有する人も亦發明家たるの資格あり」と翁は語つた。

翁は外國の參考書としては獨逸の書物や雑誌などを年に二回位目を通すに過ぎないさうだ。それも翁自身は獨逸語に通じないから他人に翻譯して貰ふのである。

翁は時計を邪魔物視して使用しない。その當時平均二十時間連続的に働いて尙平氣であつた。食事は少量で攝生法によく叶つて居た。「正直は成功の基」とは翁が平素の口癖であるがその通り極めて正直な人である。助手の劇務に堪へず暇を乞ふものがあれば快く許された。翁は又大局の形勢を洞察すること恰も神の如く、よくその豫言の適中するのに驚かされるさうである。そして一度企てたことは何年の永きに亘るも必ず成し遂げされば止まない氣質である。

私はそれからエヂソン電池工場をも一巡し、晝食の饗應を受けた後、元の圖書室を通らうとすると、その一隅にある粗末なソツプラーの上に仕事服のまま一人の老人が無雑作に寝轉んでゐた、何ぞ知らん、それは翁の心地よき晝寝の姿であつた。以上の事實によつても、翁の人格が如何に質素簡朴であり、種々の學ぶべき長所を有せらるゝか、その面影と共に偲ばれるであらう。

## エヂソンの信仰

之を要するにエヂソン翁は信仰のある家庭に生れ、賢明にして教養ある慈母の薫陶に依り、智情の三要素の鍛錬を怠らなかつた爲め、既に幼少にして、働くことが容易であり且つ愉快であるといふ尊き體驗を會得したのである。斯くて幾多の實驗や研究に没頭し、甚だしきは四十八時間不休不眠で働きつゞけた上僅かに六時間の睡眠を攝るのみで疲労を回復したといふ位、異常なる錬磨を積んだものである。而も幼少の頃虚弱であつた身體がこの大精力を得るに至つた事實は最も注目に値する。固より智識は必要であるが情操及意志の鍛錬は一層大切であつて、特に我日本の現状に對して之を痛感せざるを得ない。

又翁の生命觀は一種特別のもので、生命の單位たる實在的要素は人體の細胞の中にあるが、人間

が死ねばそれから脱出する、しかし永久に不滅のものであると信じてゐるさうだ。翁はかねて「私の背後には偉大なる力があり、私を支配して何事も成し遂げしめる、この偉大なる力とは世人が神と稱するものである」と云つてゐる。又他人が翁の天才を讃へると、「イヤ決して天才なんかではない、靈感に依つて生ずる發汗作用の結果だ」と一笑するさうである。要するにこの宗教的信念が生理的・心理的醇化の根源をなし異常な精神力を與へ、歡喜と感謝とに満ちた熱烈な情操と、成し遂げざれば止まぬ不屈の意志とが働くから、何れの場合にも遂には必ず成功の域に達するのであらう。翁は世間の所謂學者のやうに深遠な學識がある譯ではない。數學などにも格別秀でゝはゐない。しかしその信仰の力によつて學問がほんたうに生きて働き、人類の幸福増進の爲めに感謝を以つて發明に没頭してゐるのである。有爲の諸君は大いにこの點を學ぶべきであると思ふ。

(昭和四年十月)

【追加附記】エヂソン翁が確乎たる宗教的信念の人であつたことは疑を容れないが、翁は普通の基督教とは少しく異つた獨特の信仰を有つてゐた爲め、時に、世間の誤解を受けたことがあつた。その一例は、先年米國紐育州エルマイラ町で中學校を新設した際、その校名を翁に因んでトーマス・アルバ・エヂソン中學校と附けようとしたが、翁は神と來世とを信じない無宗教者であるとのことで反對が起り、遂に沙汰止みとなつた。しかし昭和六年十月十八日、翁逝去の當日、遺族から發表された聲明書によつて、翁は所謂正統派の基督教信徒ではなかつたけれども至上智の存在を信じ正直を理想とし人類愛に終始し且つ來世を信じた立派な信仰の人であつたことが明かにされたのである。



## 我國の現狀に鑑みて日蓮聖人を憶ふ

(日蓮聖人六百五十年祭記念講演)

### 我國の現狀

我國に於ては、明治維新前迄は一般に宗教的信仰を重視したけれども、維新後に至つては不幸にして之を輕じた爲め、殊に知識階級の人々に信仰を有するものが少く、従つて概ね御都合主義に流れ物事を總て打算的に判斷し行動する結果、劣等なる情操（私はこれを假にマイナスの情操と呼んで居る）のみ發達し、高尚なる情操（プラスの情操と呼ぶ）は涵養せられない故、假令それ程の惡事はなさないにせよ、進んで善事を實行するといふ勇氣のある人が甚だ少い。それが爲め、遺憾ながら今や我が社會には種々の行詰りや不祥事を頻出して居る有様である。即ち所謂國難や災厄が相次いで起り來つたのであるが、之は畢竟天の攝理であつて、之に依り我國民の覺醒を早め信仰を促さんとする神の啓示であることを自覺し、宜しく轉化爲福の努力を期せねばならぬ。言ひ換へれば敬虔眞摯なる宗教的信仰に依つて常にプラスの情操と鞏固なる意志とを練磨し明魂と實行力とを有つ有爲の人物を多數養成しなければ到底此の憂慮すべき難局を打開することは出來ない。此の意味に於て、例へば彼の日蓮聖人の如き大人格者の出現は現代日本の最も翹望

する所であらねばならぬ。されば茲に日蓮の六百五十年祭を迎ふるに當り、此の偉人の生立ち及功績の一端を追想することは決して徒爾ではなからうと思ふ。

### 宇宙即神

偉人の出現は主として遺傳、修養及環境の三者に依るものである。遺傳は云ふまでもなく血統に基き、修養は人格の陶冶を與へ、環境は人格の修養を支配する。而して人格の向上は、これを心理學的に云へば、智情意の圓滿に調和せる發達に俟たねばならぬ。智識の發達は主として學問的研究に依り情操及意志の鍛鍊は宗教と體育とに負ふ所が最も多い。而して、情操の陶冶は尊き心感の養成であり、意志の鍊磨は實行力の根源である。人は純眞にして高潔なる感情のもとに身體を勤勞することに依つて、次第に生理的的心理的變化を來し、依つて以て其の情操は益々醇化せられ意志は彌々鞏固となるものである。又智識（科學的及哲學的）は理智性の働きを促し生活の目的乃至理想を樹立せしむると共に、人生の羅針盤として批判分別の能力を與へる。

宗教は本來、智情意の三方面を包含するものであるが、就中情意の鍛鍊に最も大切な關係があり、理想の實現に向つて精進努力せしむる所の原動力である。即ち科學、哲學を發達せしむる智

的鍊磨も、利他、博愛、犠牲、奉仕の裡に感謝、満足を感じる道德的修養も、或は又永遠不朽の光彩を人生に添ふる藝術的創作も皆宗教的信仰が根柢となつて、理想に憧憬する人間的活動の現れでなければならぬ。宗教の觀念は人に依つて異なるが私の見る所では、宇宙全體が神に依つて統制せられ、萬有は夫々宇宙の一部分であるから凡て神の意思たる最高最善の目的の爲めに、活動し奉仕すべきものであると信ずる。言ひ換へれば、この宇宙を神の人格的表現と見れば、人間は萬有中の最も優等なるものであり、従つて吾々は人格の向上を圖り神の意圖たる最高理想の文化を目標として、常に國家社會の爲めに合理的最善の努力を捧ぐるの使命を荷へるものと信せざるを得ない。即ち私の目する宗教は超人間的の絶對なる力を信仰し、この力の導き命するまゝに感謝、満足、喜悅、憧憬等の純真なる情操を以つて飽くまで眞理を辿り理想を追ひ、且つ之を永続的に實行するを本旨とするものである。而もそれは決して道德や科學と衝突反撃する如き傾向のない、よく時代に適應した健全な正しい宗教でなければならぬ。

### 日蓮聖人の生ひ立ち

日蓮聖人の偉大なる人格は其の遺傳、修養及環境に於て宜しきを得たる結果であるといふこと

が出来る。日蓮は房州小湊の漁民の子として生れたけれども、元來其の家柄は立派な血統の武士より出でたもので、夙に其の天資の聰明なことは實に驚く許りであつたと云はれる。加之、其の生ひ立ちに於ても常に理解ある慈父の家庭教育と恩師道善房の懇ろなる薰陶とに依つて、早くより菩提心に目覺め高き信仰心を與へられたのである。僅かに十二歳にして父母の膝下を離れ、房州清澄山なる眞言宗の清澄寺に入り道善房に師事したが、十六歳の時自ら進んで得度し蓮長と稱した。然るに幼少時代より頭腦明晰にして眞理と正義とを強く愛好し、常に研究的態度を失はなかつた聖人は、何故に教主釋尊の御名を唱へずして南無阿彌陀佛を念ずるか、といふことに就いて先づ教義上の疑問を起した。次いで更に逢會した疑問は承久の亂に於ける皇室に對する大逆事件であつた。前者は佛弟子として後者は國民として何れも聖人を懊惱せしめた重大問題であつた。純真熱誠なる聖人は此の二大疑問を解く爲めに、清澄寺の本尊虚空藏菩薩に向ひ「日本一の智者となし給へ」と連日連夜の祈願を籠むると共に、斷然起つて、佛教の各宗派及我日本の國體に關し具さに研究を成し遂げんと決心するに至つた。而も此の清澄山に立て籠つて居るのみでは、到底目的は達せられないと覺つたので、十七歳の時、鎌倉に出發し、淨土宗、禪宗、律宗等を併せ學び、仁治三年、二十一歳の時、一旦清澄山に立ち歸つたが、再び鎌倉を経て比叡山に遊學する

等、此の間約十ヶ年を費した。それより更に三井寺、奈良、高野山、天王寺、東寺等を遍歴して佛教の各宗派は申すに及ばず神道、儒教、道教、歌道に至るまで凡そ和漢の學に亘りて究めざるはなかつた。此の絶大なる努力と研究の結果、遂に聖人は、是迄の佛法が其の本末を誤つて居るが爲めに延いて國家社會を混亂に導き、所謂濁世末法となつたのである。而も經文に明示せらるゝ如く、末法には必ず上行菩薩が現はねばならぬとの確信を抱き、茲に最高至上の釋尊を教主として最高最優の法華經に基ける佛教統一の大業を成就せんと發願決心するに至つた。斯くして頭腦明晰博覽強記なる蓮長が、多年の苦心研究に依つて修得した透徹せる哲學的理智と、生理的・心理的醇化に依つて鍛鍊された宗教的・道德的情操とは彼をして「天に二日無く地に二王無し、一佛境界に二尊の號無し」と喝破せしめ、飽くまで大義名分を明かにし、僭越なる教主や不當なる君主の存在を認容することを許さなかつた。此の烈々たる大信念こそは即ち聖人が宗教上に於ても將た又國家社會の諸問題に對しても、敢然身を挺して困難に當り「不惜身命」の努力を捧げつゝ、而も常に感謝と法悦とに満ちたる大活動を續くることを得た所以でなければならぬ。

聖人の宗教觀を窺ふに、宇宙は最高の本佛釋尊を中心として統一せる佛界の中に存在するものであつて、諸佛諸菩薩を始めとし一切衆生も本佛と同一の素質を有し、本佛の慈悲救済と自己の

修養鍛鍊即ち自他の共力に依つて、即身成佛を遂ぐる事が出来るとしたものである。而して、法華經は釋尊が出世後四十年にして始めて説き給ひし教義であるが、これは時間空間を超越した廣大無邊の慈悲と救済とを興ふる所の、最高の佛陀たる釋尊を唯一の教主とし中心とせるもので、他の諸經の到底及ばざる所であると信じ之に絶對の歸依を捧げたのであつた。

建長五年三月聖人三十二歳の春、遊學を了へて歸國の途中、暫時伊勢大廟に參籠して

「我れ日本の柱石とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」

と三大誓願をかけた。斯くて上下の世俗や他宗の人達から、或は「日本國の位を讓らむ」とか或は法華教を捨て觀教等に就き後生を期せよ」とか或は「汝が父母の頸を刎ねむ」とかいふ種々様々の誘惑や迫害が加へらるゝに拘らず、毫も恐るゝ所なく所謂千萬人と雖も我往かんの氣概と信念とを以て何處までも理想の爲めに奮闘したのである。歸國して父母に此の抱負を語つた時、父は直ちに「大丈夫の志は正にさうあらねばならぬ」と激勵したので蓮長も益々喜び、恰も肉躍り骨鳴るの感を覺えたとある。斯くて此の大誓願を實行する爲めに、蓮長は清澄山に新しく道場を設けて一七日の參籠を行ひ、其の滿願の日即ち建長五年四月二十八日の早曉、太陽に向つて「南無妙法蓮華經」の題目を唱へて宗旨開闢の式を擧げた。最高最優と信ずる法華經を輝き昇る大日輪

の前に高唱することは、恰も御初穂を神佛に供ふるが如く此の新しき宗義の宣誓を 天照皇大神の御耳に入れ奉るといふ心持でもあつたであらう。斯の確信に充てる蓮長は之を一般衆庶に公開すべく即日持佛堂に於て、四方より寄り集まれる會衆に向ひ、「今日の如き混沌たる末法に於て迷路に立てる一切衆生を救済せんが爲め、大慈悲心を以つて釋尊の説き殘された眞の教は南無妙法蓮華經唯一つあるのみ」と説いたが恐らく「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」の意味を遠慮會釋もなく大聲叱呼して折伏を行つたものと想像される。されば一般衆徒にとつては全く初耳のことゝて其の驚き一方ならず忽ち騒然たる物議を醸した。中にも地頭東條景信は淨土宗の歸依者であつたから大に怒つて蓮長を一刀兩断せんとしたが、道善房の取做で蓮長は纔かに助命せられ遂に山を逐はれた。其の道すがら我家に立寄り法華經の付囑に應じて日月と蓮華との理想を探つて自ら日蓮と名乗り、更に兩親を改宗せしめて父に妙日、母に妙蓮の法號を與へた。聖人が衆生教化の首途に當り先づ以て兩親を濟度せられた事は順序整正、眞に意義深きを覺ゆるではないか。法難の第一歩として男々しくも決然大盜を切つた日蓮が、何ぞ法敵を恐れ世の迫害を憂へんや、唯南無妙法蓮華經あるのみとばかりに、意氣洋洋として鎌倉へ乗込んだのは建長五年四月であつた。そこで先づ松葉ヶ谷と云ふ所に小さき庵室をしつらへて、自ら勉學すると共に屢々名越の往

還へ立出で、辻説法を試みた。恰の如き聖人の獅子吼に感激して歸依する者も少くなつたが、又多くの反對者も現はれて聖人の身邊は石瓦の降り來ることさへ珍らしくなかつた。

#### 四大難と小難頻發

第一難 文應元年七月有名な立正安國論を草して、之を執權北條時頼に進達を請うたが願みられなかつた。而も當時天災地變の頻出するを見ては憂國愛民の情禁する能はず、これ偏に正法を捨て邪法を奉するが故の天譴なりと斷じ、益々熱烈に妙法の宣傳に力めた爲め、遂に文應元年八月二十七日松葉ヶ谷の草庵を數百の幕臣、他宗の僧侶等來襲して焼打にした。其の日は甲申の夜とて日蓮は寢に就かなかつた爲め僅かに身を以て免るゝことを得た。時に三十九歳であつた。而も日蓮は一難來る毎に益々生理的的心理的鍛鍊を加へ意氣愈々軒昂、既成宗教に對する折伏は、毫も遠慮しなかつた。そこで極樂寺の僧良觀等の運動により幕府は遂に日蓮を伊豆へ流謫した。これ弘長元年五月十二日、日蓮四十歳の時であつた。聖人は此の地で海中出現の隨身佛を得て無限の法悦に浸りつゝ、四恩鈔を書かれたが、其の文中に、聖人をして法華經の行者たらしめた此の迫害者に對し同情を表して居る。實に迫害者や敵對者があつて却つて人格が磨かれ功德を積むこと



るべき由、經文には見え候へ共如何候やらん、上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん、日蓮先づ粗ぼ弘め候也」と斷言したことから見ても、上行菩薩の出現を信すると共に、自ら深き抱負を有して居たことが窺はれる。そこで「日蓮と言ひし者は去年九月十二日子丑の時に頸刎ねられぬ」と自ら述べて居るのは、最早靈的に生れ變つて人間から佛使菩薩に昇進せりとの自覺を暗示したものであらう。

時に北條時宗は日蓮の事を夢に見て氣掛りになり、文永十一年日蓮五十三歳の二月十四日遂に聖人の赦免狀を弟子日期に渡した。日期は三月八日之を日蓮に手交し、日蓮は十三日島を出發して二十六日鎌倉に歸着した。さうして四月八日時宗の代人頼綱に面會して更に安國論を主張したけれども依然として用ゐらるゝに至らなかつた。「日蓮國恩を報ぜんが爲め三度まで諫めしも遂に用ひねば山林に身を隠さんと思ひしなり」とある通り、彼の伯夷叔齊の擧に倣うて同年五月十二日身延山に隱棲して、天下後昆の人士を育成し、教義宗學を整束して、末法萬年垂教の爲め實に九星霜の久しきに亘つたのである。然り此の間に於て所期の如く人格の大成と共に、末法永遠の闇を照すべき準備を完うせられ、斯道の述作、信徒の教養に對して一意専心努力を捧げられた功德は實に偉大なるものがあつた。

斯くて生涯を通じ、凡ゆる迫害艱難の裡に勇敢なる奮闘を重ねられた此の教界の偉人も、建治三年五十六歳の冬所勞の爲め痼病に犯され、越えて弘安五年九月身延山を立ち出で、武藏國池上に着かれたが、此處で中風症を發し歩行不隨となり、遂に同年十月十三日池上宗仲の館に於て入寂せられたのであつた。行年六十一。

### 聖人の人格

聖人は實に智情意三者の圓滿に調和し發達した偉人であつた。従つて正義の人であり、愛國の人であり、忠孝の人であり、門弟や一般民衆に對して洵に愛情の厚き人であつた。忠孝を讚美して開目鈔に曰く、

「外典三千餘卷の所詮に二つあり、所謂忠と孝となり、忠も又孝の家より出たり、孝と申すは高なり、天高けれども孝より高からず、又た孝と申すは厚なり、地厚けれども孝より厚からず、云々」

又筒御器鈔に

「日本國始りより既に謀反の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十

五人は頼朝、第二十六人は義時也、第二十四人は朝に責められ奉り獄門に首を懸けられ山野に體を曝す、二人は王位を傾け奉り國中を手に掌り王法已に盡ぬ、云々」とあるのは注目すべき所で、聖人が頼朝までも天下の謀反人に數へられたことは如何に國體擁護の精神が旺盛であつたかの證左と謂へる。

上述の如く法華經に對して絶對の歸依を捧げ、之より一身一家の孝の眞理を明かにし更に忠に及したのを見ても、如何に聖人の理想の高かつたかを窺知することが出来る。

恩師道善房の御墓に掲げられた報恩鈔の中に

「周の世の七百年は文王の禮孝に依る、秦の世ほどもなし始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流るべし。日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は傳教天台にも超へ龍樹迦葉にもすぐれたり。極樂百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず時のしからしむる事。」

と述べてあるのを見ると、時を得たるが故に妙法五字の威力に依つて傳教、天台にも優るの功德を現はすことが出来たのであつて、決して日蓮の賢明なるが故ではないと謙遜して居る。此の

時を得たといふ意味は即ち一には末法の初めに際會して釋尊付囑の如く能く法華經を弘め得たると共に、更に他方に於て、克く多年の迫害辛酸に耐へ得て遂に上行菩薩の自覺を獲得し、人格の陶冶鍛鍊を大成し得たといふ事であると思ふ。

### 「マイナス」より「プラス」の情操へ

要するに日蓮は「一切衆生悉是吾子」の慈悲と即身成佛の理想とを以つて現實生活を凡て信化し、此の信仰に依る情操の醇化を基として一切衆生を濟度せんと努力した。即ちマイナスの情操をプラスの情操に轉化することを本旨としたのである。試みに此の相反する兩方向の情操が社会的には如何なる結果を與ふるものであるかを列挙してみよう。

(プラスの情操)

慈悲同情の社會

利他報恩の社會

和合共存の社會

法悅感謝の社會

(マイナスの情操)

冷酷無情の社會

利己忘恩の社會

争鬭排他の社會

自暴反目の社會

恭敬信愛の社會

驕慢憎惡の社會

妙法五字の光明に照され

暗黒の濁世

た本尊の世界

即大曼荼羅の世界

即一大佛國土の顯現

本門の戒壇の建立成就

一天四海皆歸妙法

### 日蓮出てよ

翻つて我國の現狀は遺憾ながら國民一般に信仰心乏しく従つてマイナスの情操が蔓りプラスの情操が衰へ、其の結果種々の行詰りや不祥事を續出して居る。之を救済するには是非とも信仰心を鼓吹して世人の情操を醇化せしめ、所謂魂を入れ替へしむると共にこのプラスの情操と確乎不拔の意志とを以つて邁進する實行力強き人材を多く養成するの外に途はない。即ち我國の現狀に照らし切に大日蓮の再現を待望せざるを得ない次第である。(昭和五年五月)

### 偉人としての象山先生

(電氣三賢遺品展覽會記念講演)

私も御招きに與かりまして象山先生のお話を申上げることが非常に光榮と存する次第であります。最初にお断り致しておかなければなりませんのは、私が茲に申上げのお話は主として、去る大正五年、象山先生遺跡表彰會に依つて編纂されました先生の評傳中より其の材料を得たものであることであります。同書には、信州出身の史學家増澤淑氏の編修に成る先生の傳記と共に武田、新村、宮本、加藤、澤柳の諸先生が、夫々砲術家として、蘭學者として、蘭醫として、識見家として、及政治家としての象山先生に就いて講述せられ、私も亦科學者としての象山先生に就いて聊か申述べて居るのでありますが、今日の講演は其等の中から適宜材料を頂戴し之に多少の卑見を加へて皆さんと共にこの大偉人の高風を追慕致してみたいと存するのであります。どうか其のお積りでお聴取りを願ふと共に、この機會に於て右の諸先生方に對し感謝の意を表しておきたいと思ひます。(附加追記)象山先生の傳記や事蹟の詳しいことに就ては上記の象山先生遺跡表彰會編「佐久間象山」の外、信濃教育會編纂の「象山全集」及宮本仲氏の「佐久間象山」等を参照されたい。



象山先生は今（昭和五年）から丁度百十九年前の文化八年二月十一日信州松代に生れ、六十六年前の元治元年七月十一日五十四歳にして京都市木屋町二條下る處で熊本藩の河上彦齋、鳥取藩の前田伊右衛門兩名の爲に暗殺されたのであります。

凡そ偉人の出生は、主に遺傳と環境と教育の三者に支配されるものでありますが、象山先生に於ても矢張りこの事實が窺はれるのであります。先生のお父さんは佐久間一學と申す人で神溪先生と呼ばれ、松代藩に於て卜傳流の劍道指南番を勤め、特に易を好み、人物も中々大きく、文武兩道に通じて、古武士の風格を備へた方でありました。その家柄は士分以上でありましたが、僅に五人扶持五兩といふ小祿に過ぎませんでした。併し御子息象山先生に對する教育は極めて嚴格であつて全力を傾注せられたさうであります。又お母さんは足輕荒井氏の娘で、初めは妾として仕へられたが、その立派な人柄を見込まれて、後に本妻に直されたのであります。この夫人は非常に強記の方で、お父さんが象山先生の爲に四書五經等の素讀をなさるのを傍で針仕事などをしながら聴き覺えに覺えてしまはれ、先生が復習される時には、傍から、其處は間違つて居る、此處は斯う直さねばならぬなど、注意を與へられたほど聰明な方であつたと申します。先生二十二歳の時お父さんが亡くなられ、翌年二十三歳にして先生は藩命に依り江戸に遊學を命ぜられま

した。その別れに臨みお母さんは一滴の涙もこぼさず、儼然として先生に向はれ「啓之助よ、お前は江戸へ行つて十分に學を勉め徳を磨き、さうして立派に身を立てねばならぬ、さすれば私の傍に居つて孝養を盡して呉れるよりも遙かに大きな孝道である。若し萬一之に反して學を怠り徳を破る如き行ひがあつたならば、最早や今日限り親子の縁を切り、假令立ち歸つて來ても母は斷じて面會を許さぬであらう」と誠められたさうであります。この一事を以つてしても如何にこの夫人が女丈夫であられたかを窺ふことが出來ると思ひます。先生はそこで大に發奮せられ、江戸の聖堂に在る間實に異常な勉強をされたのであります。大槻磐溪先生なども「佐久間は何時寝るのだらう」と云はれた位其の勉強振りは激しかつたと傳へられます。かういふ譯ですから、先生は二十六歳の時にもう一廉の學者となり、師の佐藤一齋先生から許可を得て郷里に立ち歸り自ら塾を開かれたのであります。

先生が子供の自分の逸話として、家老の子供と喧嘩をされたことがあります。それでお父さんから非常に叱られ、先生が家老の子に向つて「道理を教へてやらう」と廣言したその言葉を自ら反古にするなど大いに戒められて、三年間の謹慎を申付けられました。そこで先生はひどく後悔せられ、爾來一生懸命に文武兩道を勵まれたとのことであります。

元來、松代藩は幕府から屢々諸國の土木工事や殖産事業などを命ぜられましたので、その爲め數學とか測量とかいふことに就いては比較的早くから開けて居つたのであります。それで先生は藩内の町田源左衛門といふ數學家に就いて先づ日本算法の奥義を究められました。この事が他日先生が西洋の科學を研究される上に非常な助けとなつたことは申すまでもありません。殊に先生は當時詳證術と稱されて居た今日の幾何學を以つて萬學の基であると唱へられました。かく先生は夙に甚だ數學に秀で、居られたのであります。二十三歳の上京の時迄に經學、文章などを家老の鎌原桐山に學び、又活文といふ高僧が上田の在に住んで居たので、之に唐音を學ぶ爲め地藏峠を馬で越えて上田まで六里の路を毎日往復されたといふことであり、その熱心と堅忍不拔の精神とは實に敬服の外はありません。その他劍道はお父さんに、砲術は藤岡氏に、馬術は竹村氏に、水泳術は河野氏に習つて、二十歳頃までには何れも一流の達人となられたのであります。二十一歳の時藩侯に選拔されて近習役となり、二十三歳の時、前に述べた通り江戸へ遊學を命ぜられ、翌年出發し、當時名高かつた佐藤一齋の塾に入り此處では特に文章に就いて得る所多く、又和學を加藤千浪に、書を考山に、琴を仁木三岳に學び、何れも目覺ましい上達を遂げ、さうして二十六歳の時には藩侯の命に依つて歸國し自ら塾を開いたのであります。先生は幼年時代

から藩士竹内錫命に就いて朱子學を習つたのであります。後年、大阪に於て陽明學に名高い大鹽平八郎が亂を起したのを見て、先生は陽明學に缺陷あることを認め、益々朱子學に心を傾けたといはれます。御承知の通り王陽明の學は比較的精神方面に偏するものであります。朱子學は精神を重んずるのみでなく、物質をも重んずる、即ち物に就いて理を窮むる學であつて、精神的であると同時に亦科學的であると申すことが出來ます。即ち先生は形而上の學問のみを重んずる傾きのある普通の漢學では憚らずして、之に形而下の問題を取扱ふ科學を加へることに重きを置き、さうして東洋の道德と西洋の技藝とを調和させなければならぬと主張されたことは非常な卓見といふべきであります。この事は先生がその門下生の一人たる小林虎三郎が郷里越後に歸るときに書いて與へた文章を見ても解るのであります。曰く

「宇宙の眞理に二つ無し、斯の理の在る所天地も此に異なる能はず、鬼神も此に異なる能はず、萬世の聖人も此に異なる能はず、近世西洋の發明する所の幾多の學術は要するに皆實理にして祇以つて吾が聖學を資くるに足る、而るに世の儒者は概ね皆凡庸にして窮理を知らず、視て別物となす、吾に好まざるのみならず、動もすれば之を寇讐に比す、宜なり彼の知る所之を知ることなく、彼の能くする所之を能くするなく(中略)、大丈夫當に大塊有る所の學を集め以つて

大塊無き所の言を立てよ、小林炳文は予に従つて遊び、而して吾が言を説ぶ者也。其歸省するに於て書して之を贈る。」

吾々は精神的であると同時にまた科學的でなければならぬ。併しながら之を知るだけではない、之を實行しなければならぬ。象山先生が之を知つて且つ實行したことは實に偉大なる人物たりし所以であります。然るに當時の儒者や武士達の多くは此の事を知らず、従つて實行も殆んど出来なかつたのであります。

翻つて今日我國の有様はどうであるかと云ふに、其の當時とは却つて逆になつて居るものと思はれます。即ち現今の人達は主として科學的方面のみに重きを置いて精神的方面の修養を忘れて居るかの傾向が見えるのであります。語を換へて申すならば、明治維新以後の我教育は、西洋流の科學に甚だ重きを置いた。この事は固より結構であるが、それと同時に、最も大切な信仰教育と眞正の體育即ち古來の武道的精神を與へることを閑却して來た爲に、聽て國民一般の知識は非常に進歩して西洋諸國に劣らない域に達したけれども、悲しい哉、信仰教育と眞正の體育とに依つて始めて得らるゝ所の情操と意志との鍛鍊が不十分となつた結果、先づ第一に實行力が缺乏し、従つて如何に科學的の理窟は解つて居ても、その實行はとかく覺束ない有様なのであります。

す。例へば今日熾んに唱へられて居る合理化とか能率増進とか國産獎勵とかいふ事柄もその掛聲が大きい割合に、一向その實績が擧がらないではありませんか。此の時に當り若し吾々が既に數十年の昔に於てその範を示された象山先生の偉大なる精神並に實行力を見習ふことが出来るならば、我國が本當に完全な進歩發展を遂げ得るであらうことは疑ひを容れないのであります。

さて象山先生は天保九年再び江戸へ遊學を許されて、神田お玉ヶ池附近に自ら塾を開き、傍ら以前の如く一齋先生の門に出入しました。越えて天保十三年藩主眞田感應公が幕府より新たに海防係を命ぜられるや、先生はその顧問役となつて、大いに腕を揮ふ機會を得たのであります。即ち先生が三十二歳の時でありました。先生は藩命により先づ江川太郎左衛門に就いて砲術を學ぶことゝなりましたが、先生の意に満たない點があつたので、間もなく江川の門を辭し、自ら原書に就いて之を研究しようと決心しました。そこで弘化元年、三十四歳の時自分よりも年下の加賀藩醫黒川良庵を聘して之に蘭語を習ひ始めましたが、その年六月から翌年二月まで僅か八ヶ月の間に先生は容易く原書を讀破し得るほど上達を遂げて了つたことは實に驚くべき努力家と云はざるを得ません。而も、そのみでなく、更に進んで、一般世人が科學の知識に通するやうにしなければ國を進めることは出来ないと云ふ考へから、その當時中々手に入らなかつた「江戸ハルマ」

と稱する蘭語辭書を訂正増補し且つ之を和譯して出版しようといふ計畫を立てました。ところが之には費用が千二百兩かゝるので松代藩にその出資を願ひ出ましたが、當時安政の大震災の後で國費多端の折柄とて遂に却下されました。先生は之に屈せず自身の知行百石を抵當にして家老恩田頼母から千二百兩を借り受け之を資金として辭書の編纂に着手したのであります。その借用證文は今も残つて居ります。かうして辭書の原稿が出来上りましたので、嘉永二年十月先生は態々上京して之が出版の許可を幕府に願ひ出でました。然るに不幸にも、西洋の學問に對する反感から漢方醫と儒者とが私かに反對運動をした爲に、幕府でも遂に之を許さなかつたので、その發行を見るに至らなかつたことは、洵に千載の恨事と申すべきであります。而も先生の偉大なる努力は後人をして感奮興起せしめるに足るものがあると信じます。

申すまでもなく、先生は非常な讀書家でありました。何しろ語學を八ヶ月で修得した位ですから、種々の洋書を買ひ求めて盛んに讀んだのであります。殊に愛讀したのはシヨメールの百科全書(十六卷)と、ソンメル（三卷）の宇宙記(三卷)——シヨメールの百科全書は現在東京帝室博物館に一部所藏されて居る——とでありましたが、後者は當時我國では幕府の天文方、薩摩藩侯及先生の所有せる二部あるのみで甚だ珍重せられ、シヨメールの百科全書は四十兩、宇宙記は五十五兩

といふ高價なものであります。

嘉永四年先生四十一歳の時上京して砲術教授の塾を開いたが、吉田松陰、小林虎三郎も此の時入門しました。松陰は其の時二十二歳で最初平服の儘塾を訪れた爲め、「弟子の禮を以て來れ」と先生に叱られたので更めて上下を着用して行き始めて入門を許されたこととあります。松陰は兄の許へ「象山は當今の豪傑、都下第一に御座候云々」とその感想を送つて居り又松陰の書いた幽囚録には「余象山に師事し深く其の持論に服し、事毎に決を象山に取る」とあるのを見ても如何に先生に心服して居たかゞ窺はれるのであります。彼が海外渡航の企も實は先生の勸告に依るもので、土佐の漂民萬次郎と呼ばれたものに真似る積りであつたらしいと云はれて居ります。先生も亦松陰を評して「忠直義烈の士」と褒めて居ります。

嘉永六年、松陰は長崎から密かに露西亞の船に乗つて外國の事情を調べに行かうと云ふので、先生に別れを告げました。その時先生は「之（子）有（三）靈骨」といふ詩を作つて之を餞別とし且つ旅費の補助にとて金四圓を與へました。然るに松陰が長崎に着いた時には既に露船は出帆した後だつたので、彼は殘念ながら引返し、右の金四圓を先生に返却しました。斯ういふ几帳面な點も今日の青年にとつて大いに手本になることと思ひます。

安政元年四月米艦九隻ベルリに率ゐられて江戸灣に入り乗組の米人等横濱村に上陸したので、松代藩は小倉藩と共に警備の役に當りました。そこで先生は藩命に依り警備の任に就く爲め野戰砲二門、天砲三門、銃卒百名、刀槍士五十名を率ゐて神奈川に繰込みましたが、幕府では米使の感情を害することを恐れて此の一隊の近寄ることを許しませんでした。同年二月下田及函館の二港を開くことに決定した由を聞き、先生は大に下田の不利なるを述べ、横濱に代へられんことを主張したけれども、遂に用ゐられなかつたのであります。

三月三日和親條約の調印が済みベルリは下田に去ることゝなつたので、松陰は密かに同志一名と共に米船に搭乘せんと企てたが遂に露顯して獄に繋がれることゝなりました。この時先生も松陰に與へた餞別の詩から連坐の罪に問はれ同年四月江戸傳馬町の獄に送られました。先生四十四歳の時であります。在獄五ヶ月にして出所、それより更に九年間信州松代に蟄居を命ぜられました。先生獄中に於ける詩文章を集めたものは之を省儉録と題して、明治四年門人勝海舟に依つて刊行せられたことは世間に知らるゝ通りであります。

先生松代に蟄居中は主に科學の研究と實驗に耽り、或は詩歌文章を作り、書畫を嗜み、又時には醫者として病人を治療しました。そこで面會者は表向は病人と稱して先生を訪ねたのであります。一友人の病むに際し「御家御大切と思召候はゞ御身御大切に成さるべく御身御大切と思召され候はゞ酒煙御禁止可相成候」とその養生を勸めて居るのを見ても如何に先生が親切心に富んでゐたかゞ想像されるのであります。

先生の蟄居中に松陰はその高弟高杉晋作を派して先生に紹介し自分の境涯を述べ「幕府諸侯何れの處か待むべき、神州の恢復何れの處にか先づ手を下すべき、丈夫の死所何處か最も當れる」の三項に就いて尋ねました。先生は謹慎中とて表向は高杉との會見を拒絶したが、松陰の門人と聞いて、俠商壽山堂山口屋甚右衛門を喚び私かに策を授け、「急患差起り象山の治療を受け度」と稱して出願せしめ藩の許可を得たので面會することが出来ました。この時高杉晋作の感想として「自分は今迄多くの人に交りもし逢ひもしたが、佐久間先生程儼然として威儀の正しき人に出逢つたことがない、而も其の中に掬すべき温情がある」と人に語つて居ります。然るに松陰は安政四年九月京都に於て他の志士五十餘名と共に幕吏に捕へられ、六年五月江戸に送られた爲め、遂に高杉の報告を聞くことが出来なかつたのは、松陰にとり定めし残念なことであつたらうと思はれます。

先生は幽閉中、前述の百科全書と宇宙記とを熟讀して、物理化學の研究を遂げ、之に依つて大

に科學的知識を養ふことが出来たので、その結果醫學といはず、工學といはず、農業といはず、凡ゆる方面に亘つて有益な施設を實現せしめるの基となつたのであります。今少しく其等の事蹟に就いて申述べて見ませう。

弘化元年、先生はシヨメールの百科全書に依り舶來の所謂「ギヤマン」に當る上等の硝子瓶を製造し、それを「グルングラス」と名づけて知人に與へて居ります。同じく弘化元年、杵野、佐野、湯田中といふ三ヶ村の利用掛を命ぜられました。前述の二書に依つて得た知識を本として、土地を拓き馬鈴薯を植ゑ農藝の道を講じ、尙その他の施設に就いて藩に意見書を提出しました。その意見書の中には、杵野の山に鐵礦があること、明礬製造のこと、木を焼いて「ポツタース」を得ること、湯治人の尿尿から硝石を採ること、石墨から鉛筆を造ること、白根山にある硫黄から火薬を製造すること、湯田中の「ケレート」（粘土）や石膏は陶器の原料になること等を詳しく論じて居ります。尤もこの意見書の事柄がどれだけ實行されたかは不明でありますけれども、硝石の實驗を行つたことは確かであり、又この地方の人は今でも野生の山葡萄から葡萄酒を造ることを知つて居るのは、當時先生から教へて貰つたのだと傳へられて居ります。兎に角斯様に先生が一世に秀でた慧眼と卓識とを備へて居つたことは推服に堪へません。

先生は更にギラルチンの著書を読んで、化學分析を學び、杵野地方巡視の際には銀坑や銅坑を發見したり、その銀鑛を吹分けて、生野の銀鑛よりは鐵分が少いが亞鉛が割合に多く含まれて居るといふやうな實驗を試みたり、又先程申した三つの村の温泉の溫度を測つたりその組成を分析したりして、何れも硫酸泉であることを確め、就中澁の温泉は硫酸鐵を含むから皮膚の爲に宜しいとか、一本瀧の温泉は硫酸「ポツタース」に富んで居るから凝りをとく効力があるとか、又角間の温泉は硫酸曹達があるから腹部の多血から來る諸病に効能が多いとか、色々のことを調べ上げて居ります。又この年には豫て藩命に依り西洋式に倣つて鑄造した大砲數門の發射試験を松代城の東、道島に於て行ひました。即ち先生は砲術等にもなかく秀でて居たので、その工夫に成る色々の構造に就いては詳しい製圖が今日も残つて居ります。

嘉永二年、三十九歳の時、先生が電氣の試験に用ひた絹卷銅線の一片は現に遞信省の博物館に保管されてあります。越えて安政元年、四十四歳の時、横濱警備の任に赴いたことは既に述べましたが、其處で米人が當時流行のダゲロ式寫眞機を以て先生の乗馬姿を撮影しました。この機械は沃度銀に光線を働かして之に水銀蒸氣を觸れしめる仕掛のものであります。その際先生は例の研究心から米人に向ひ、寫眞の種板を作るには沃素を用ひるか或は臭素を以てするかと尋ねた

ので、米人はその博學に驚き、どうしてそんな事を知つて居るかと反問したさうで、先生も亦米人が寫眞のピントを合せるのに螺旋を使つて居るのを見て非常に感心したとのであります。先生はその後早速寫眞機を買込んで之を留影鏡と名づけ珍重しました。

安政五年四十八歳の時、先生は磁石を作り之を人造磁塊と呼んで、地震報知機に應用しました。これは馬蹄形をなした磁石に三角形の鐵片を吸着けさせてブラリと振子のやうに垂らしたものであります。之に百三十匁程の錘を附けて置くと地震の起つた時、その機械的振動で早く豫知することが出来る、夜中眠つて居る時には之に適當な方法で鈴を附けて置けば、地震の際鈴が鳴るか目が覺めるといふのであります。之を幾つか作つて實費で人に頒けてやつたのが現今も數個残つて居ります。又同年ダニエル電池を作りました。

萬延元年、五十歳の時、先生は瓦爾華尼衝動機ガバニツシエスノックマシネと稱する機械を考案しましたが、之に就いて御話する前に、私の専門である電氣工學の方面から、所謂「エレキテル」の研究に關係の深い有名な平賀源内先生並に橋本宗吉先生の事をも總括的に簡単に申上げて見たいと思ひます。

平賀源内先生（號は鳩溪）は享保十四年讃岐國志度浦に生れ、今（昭和五年）から百五十一年前の安永八年、五十一歳で亡くなりましたが、元來非凡の人材故、高松藩を辭職の上何處か適

當の地へ乗り出して大に雄飛しようと思つて居りました。併し藩主は、あれだけの才物が他所へ行くことを惜んで、暇だけはやるが他に仕へてはならぬと禁じられたので、已むを得ず民間へ下つて其の奇才を發揮したのであります。平賀先生の作られた「エレキテル」は、今日知られてゐる範囲内では日本に於ける最初の發電機かと思はれます。之はどういふ工合になつて居るか申しますと、二つの圓筒形のロールがあつて、その一方は表面に錫箔を張り附けてあり、他方はフランネルの様な布を巻き付けてあります。そのどちらか一方を廻すと兩方互に摩擦するからそこに電氣を生ずるのであります。この陰陽二種の摩擦電氣を適當な接觸装置を経て、突出せる二つの線端に導き、之に鎖の様な可撓性の導電體をつなぎ、その兩端を把つて色々の實驗を行つたのであります。吾々がよくシャツを脱いだり着たりする時など、それが頭の毛と擦り合つてピリ／＼といふ音がするが、あれは陰陽兩電氣の放電であつて、上述と全く同じ理窟なのであります。とにかく平賀先生のエレキテルは日本で作られた最初の發電機であります。これは恐らく長崎で蘭學を學び（寶曆二年）、且つその後、長崎再遊の節購ひ歸つたエレキテル（明和七年）の知識に基いて作つたものと思はれます。その製作年代は多分安永元年（百五十八年前）頃で、今日尙その中の二個が残存して居るさうであります。後に大阪の橋本疊齋先生が作つたのも之と同一

の原理によるものであります。

平賀先生は又、石綿火洗布を造つたり、寒暖計、測量機械、望遠鏡の一として反射眼鏡、源内焼(磁器)等を作つたりしました。尙又先生は素人として日本に於ける油繪の元祖で、これは直接外人から習つたものらしいとのことです。世間では司馬江漢の方が先だといふ説もありますが、彼は専門家であり、先生は素人であつて而も玄人を凌ぐ腕を示したのであります。油繪の専門家としては豊臣時代の山田右衛門作などが我國最初の人であらうと云はれてをります。

平賀先生の肖像を見ると、俳優のやうな面影がありますが、彼の有名な「神靈矢口渡」外數種の脚本の作者として寔に故あるかなと思はれます。先生は鑛山學にも造詣が深く、これに依つて秋田の佐竹家の顧問となつたこともあり、又秩父で自ら鑛山の開發を試みて失敗し、その爲め一時炭焼にまで成り下がつて漸く糊口を凌いだと云ふことも傳へられて居ります。それから、眞偽や當否は不明の逸話ですが、例の土用鰻の宣傳なども平賀先生が始めたものださうで、これは恐らく先生の頓智に過ぎなかつたものを世間が眞に受けて習慣となつたものでありませう。又或る時先生は宿屋へ泊つて宿錢が拂へなかつたので、その代償に福神漬の漬け方を教へて勘辨して貰つたなどいふ話もあります。或は源内節を作つて吉原の花魁に教へたり、源内櫛や丸髻等を考案

したのも先生だといはれて居ります。これ等は多趣味多才な先生の風格の一端を偲ぶ爲めに一寸附け加へておきます。

平賀先生も亦信州に縁故のある人で、先生の祖先は信州南佐久郡の出身であり、先生はその分家なのであります。

次に、橋本宗吉先生(大阪の人、號は曇齋、寶曆十三年生、天保七年五月歿)に就いては茲に多くを申しませんが、先生は二十歳頃、某家のエレキテルを弄び、その後更に遊學中、松原右仲の製作に係るエレキテルに就いてその機構を研究したとありますが、歸阪後(文化六、七年頃)蘭書の中からエレキテルに関する記事を抄出してこれを綜合し、自らもエレキテルを作つて種々の實驗を試み、そしてこれに関する著書二卷を公にし、これを「和蘭陀始制エレキテル究理原」と名けて居ります。又蘭書に據つて雷の實驗を知り門人にその方法を授けて實驗せしめたさうで、日本のフランクリンとも稱すべき人でありませう。橋本先生の師たる大槻玄澤は幕府の命によりシヨメールの百科全書を翻譯する際、その「エ」(E)の部に於てエレキテルを説明するに當り特に平賀先生の電機創製の事及橋本先生の「エレキテル究理原」述作の事を擧げて大いに推賞して居ります。「エレキテル究理原」は恐らく舊幕時代を通じて唯一の電氣單行本と稱すべ

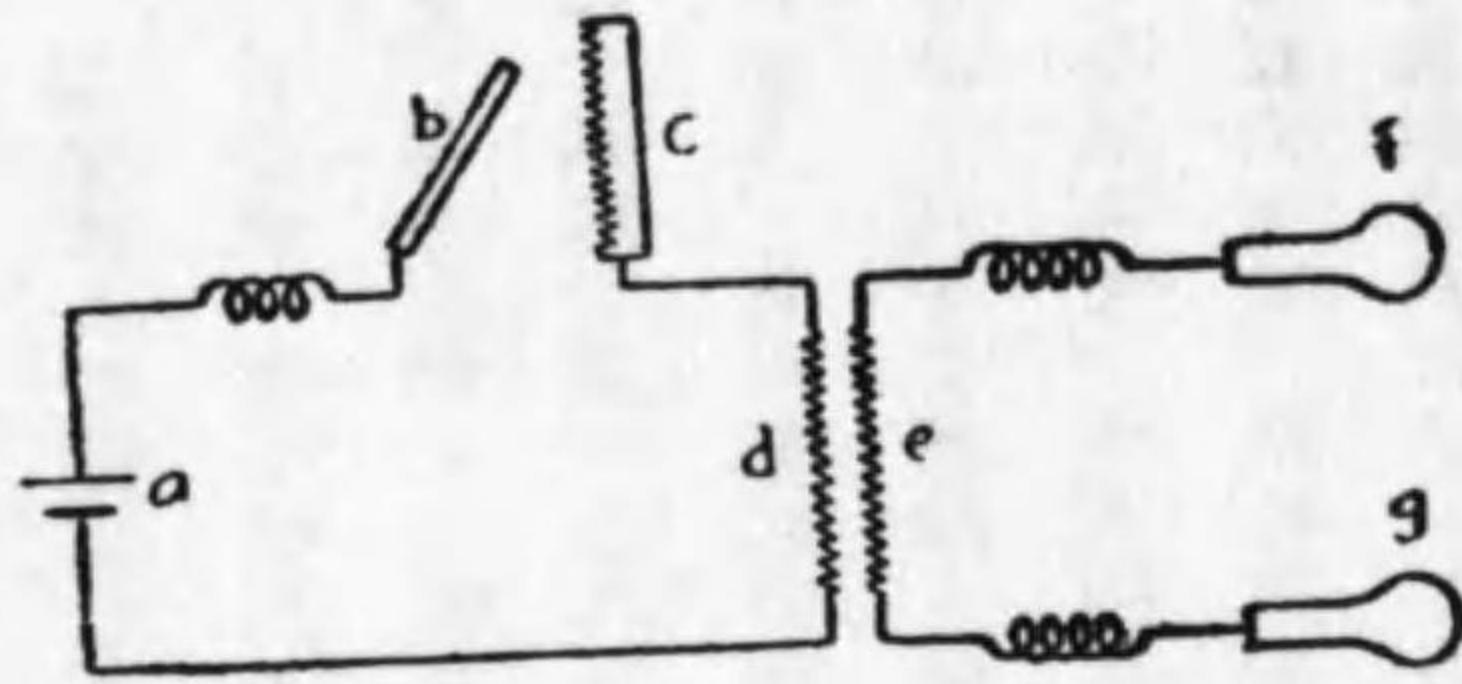


きものでありませう。

斯様に平賀、橋本両先生のエレキテルは何れも摩擦電気の原理に基いて製作されたもので、平賀先生は大地との絶縁に松脂の臺を用ひ、又圓筒用金屬として錫箔を使用しましたが、橋本先生は之に代ふるに鐵を以つてした點が異なるのみであります。

然るに、その後象山先生の作つた前述のガルバニウム・エレクトロマシーン瓦爾華尼衝動機即ち電氣治療機は、此等と全く原理を異にし誘導線輪（絶縁電線を輪狀に幾重にも捲いて作つたもの）に依る感應電氣を應用したもので發電機が主要部分を占めて居ります。之を簡単に説明致しますと、左の圖に示す通り「ダニエル」電池から發した直流電氣を誘導線輪に依つて交流電氣に變へるのであります。

電池（a）の一端には電線を経て、金屬棒（b）があり、其の他端には誘導線輪（d）を経てギザ／＼の齒を刻んだ金屬片（c）が繋がれて居る。この金屬片は劍の様な形をなし、その又歯を刻んだものもあり、或は圓輪となしてその内面に齒を附けたものもあります。誘導線輪（d）及（e）はどういふのかと云ふと、これは互に絶縁した二つの線輪を重ねて卷いたもので、線輪（e）の兩端は電線にて握棒（f）及び（g）に繋がれて居る。鐵心はあつたかも知れませんが今日残つて居るものには見當りません。さてこの装置を如何にして働かすかと云ふに、金屬



棒（b）で金屬片の齒面に沿うて迅速に上下に摩擦すると電池より供給される直流電氣が一秒時間何十回となく線輪（d）内を流れたり切れたりする爲め、誘導作用に依つて線輪（e）内に交流電氣が発生するのであります。この電氣を起しながら、象山先生は握棒（f）及（g）の何れか一つを右手で握り他を患者に握らせ己れの左手を患者の患部に觸れることに依つて治療を試みられたものゝ様であります。

是より先き（安政六年七月）獨人シーボルトが和蘭より再度我國に派遣された際齎らした發電機（その外見は寫眞によると象山先生のと多分同様の感應發電機であつたかと思はれます）を福島縣須賀川町在の醫師江藤某が長崎にて米百俵と交換して持ち歸り、今尙同家に傳へられて居ると云ふことであります。

象山先生が作つたと稱せらるゝ右の電氣治療機械は、今日我國内に三個發見されて居ります。一は遞信省の博物館に、一は松代の小學校に、一は松代の眞田家に保存されて居ります。斯ういふ物は實に大切な資料でありますから火災などのため焼失しないやう成るべく安全な場所に保管

して置きたいものであります。その装置を見るに萬年茸と人形とを機械の箱の上に飾つてありますが、これは治療上患者に善い印象を與へる爲めかと思はれます。そしてその形にも色々のものがあつたやうであります。

先生はこの機械をどういふ風に治療に應用したかといふ一例を擧げて見ますと、文久二年九月一日の夜、即ち松代に幽閉されて居つた當時（五十一歳の時）のこと、先生が讀書して居られると、奥さんが——奥さんは御承知の通り門人勝海舟の妹で順子さんと申され先生が四十一歳の時に十六歳で迎へられた方であります。——先生の部屋に來られて、「どうも胸が悪くて吐きさうにあり、且つ惡寒で身體がぞく／＼します」と訴へられた。そこで先生は芳香酸に炭酸マグネシウムを混ぜて頓服させたけれども、吐き出してしまひ、續いて手の指や胸、肩などが痺れて來たといふので、虎列刺病かも知れぬと大に心配され、尙も色々と藥を用ゐてみたけれども病勢が募るばかりで、終には精神混沌、呼吸困難となり眼も釣上つて、まるで生きた顔つきがない、そこで先生は更にカンフル丁幾を胸や腹に塗つたり、兩手を摩擦させたり、熱湯で芥子泥を造つて各部へ塗つたり莞菁膏を作つて頭に貼つたりしたら少しは良くなつたやうだけれども、まだ中々利目が無い、そこで不圖思出したのは瓦爾華尼衝動機ガムベニラシエスプロシネのことで、之は虎列刺病に効能があると云ふ

ことだから使つてみようかと考へ、早速この機械を取出して前申した如くその一端を病人に握らせ他端を自分の右の手で握り、左手を病人の肩に觸れたところ、人間の身體は良導體であるから交流電氣が通つて、奥さんの釣上つた眼は元の通りに下り、呼吸も段々安らかになつたので、次には患者の額へ觸れると忽ち痙攣も止み手や脚が漸次元の通りになつた、そこで、大いに驚喜し尙も痙攣が起る度毎に、この治療を繰返しつゝ甘汞の下劑をかけたりにして一週間程経つと全く發作も止み、更に數日を経て全治したさうであります。然るにその年の秋頃になつて松代に虎列刺が流行し、今度は先生始め召使の一、二人が多少感染の氣味があつたので、得たりや賢しと又もや右の機械を應用して、幸に無事なるを得たと傳へられて居ります。之は勿論今日の醫學から見れば少しく亂暴な所もありましたでせうけれども、兎に角思ひ切つて之を實行した所に先生の面目が窺はれると思ひます。先生は之を喜んで次のやうな意味のことを書き残してあります。

「自分が若し書物を讀まなければ醫術を知らず、醫術を知らなければ妻も自分も或は助からなかつたかも知れない。誰が自分に書物を讀ませて醫術の理法に通じさせたのか、これ自分が天寵を得て居るからではないか。云々」

「天の寵を得た」と云ふ語は是より前にも先生の文中に使はれて居りますが、これは深く味ふべ

き言葉だと思ひます。吾々が象山先生の傳記を読む場合、この點に注目するのが、特に我國の現狀に照らして最も大切な事柄だと思ふのであります。何故なれば、人間は内に確乎たる信仰心があれば、到底斯かる言葉を述べ得ないからであります。今日我國では少し物を覺えたり技倆が出来たりすると直ぐに得意になつて慢心する人が少くない。だから、それ切り進歩が鈍り或は止つて仕舞ふ。之は信仰心のない證據であります。若し信仰心があれば、何時までも謙虚な氣分で、自分の上達は神明の加護や天寵の御かけであると信ずるが故に、常に感謝の念を持ち決して慢心など起さない筈であります。今日の智識階級に於ても、自分が何か一つ仕事を仕上げた場合に象山先生の如く、これは神の御蔭であり天の寵を得て居るからであると信じて、自ら誇らず謹んで之に感謝し得る人が果して幾人あるでせうか、恐らく寥々たるものでありませう。さうしてこの無信仰の風潮こそ實に我國現時の一大缺陷であると私は深く憂ふるのであります。

さて話は元に戻つて、萬延元年幕府では條約批准交換の爲め、米國へ使節を派遣することになり、先生の門弟たる勝海舟を船長として咸臨丸を彼地に差向けました。之が太平洋を横切つた我國最初の船であります。さうして、この事は即ち象山先生の持論たる開國論の一部が實現されたわけであります。

然るに御承知の通り、同年三月三日井伊大老が暗殺されました。幕府では安藤對馬守等の意見に依り公武合體策を以て時局を救ふものとなし、家茂將軍の簾中として皇妹和宮親子内親王の御降嫁を願ひ出しましたが、内親王はこの時既に有栖川宮家に御縁組の御内定になつて居たのを、國家のためならばとて御決心の上、幕府の方へ御許が出たので、翌文久元年冬御降嫁を仰いだのであります。この公武合體の結果、幕府は一々朝廷の御命令を遵奉することになりました。

象山先生はこの際の改革に就いて幕府へ上書しようとして文章を認められました。その中には、朱子窮理の學と西洋の科學とを以つて世の中の學問を統一したいこと、向後外國人を排斥したり、之を夷狄戎狄など呼ばないこと等が書いてあります。先生の以前に書かれた上書や詩文の中には矢張り外人を夷狄と呼んでありましたが、この上書に於て斯く改められて居るのは、自身、よく西洋の事情を研究された結果でありませう。

併し世間では公武合體の後却つて一層攘夷論が盛んになつて、外人を殺したり外館を焼き拂つたりするやうなものがあり物情騒然たる有様でありました。斯かる狀勢の中に在つて敢然として攘夷論を排斥したのは實に先生の堅き信念の然らしむる所で非常な卓見であると思ひます。

右上書の終りに國力培養を論じてありますが、その要點を申しますと、遊民の多きを警むること

と、貿易、理財、産業、力學、器學を盛んにすべきこと、例へば僧侶の數を減じ、儒禮を以て喪祭を行ふことを許し、廢寺は學校に代用すること、貿易で得た利益を以つて海防費を支出すること、僧侶の數を減じて代りに職工を養ひ、力學器學を應用して工作場を建て、五世界の輸出品を得て之を利用すれば國力益々擴張せられ、世界第一の強國となること數年の後であると結んであるが、これ等の見解も恐らく幽閉中に於ける研究より得た結果であつて、今日の國是にもよく合致して居ることは實に炯眼達識と申すべきではありませんか。

文久二年勅使を以つて攘夷決行を幕府に迫られたので幕府は一先づ御受けして「攘夷と決したから策略を申出よ」と諸藩に通達しました。松代藩でも先生に内問した處が、先生は同年十二月左の如き意味の意見書を上つて居ります。

「私共は勿論のこと假令楠公なりとも將又孔明、孫子、大公望と雖も攘夷の策は立ち申さず、何となれば日本は五大洲の二百分の一にも及ばず、然も外國は學術の技巧遙かに卓越し、天文、地理、船艦、銃砲制等を始めとし蒸氣船、蒸氣車、鐵道等短きも數十里、長きは千里に餘り、その國力の富有強大なること實に驚くばかりで、之に比すれば我國の如きは恰も裸體空手に等しい有様である。我國では彼等の事情を知るところを忽にして居るが、私共は恐らく和蘭にも對抗覺束な

いと思ふ、況んやその他の四大強國を合せてをや。我國の今日に至れるは畢竟鎖國の罪である。故に到底この上鎖國は續けられないから、速に外國に禮儀を以つて交通し、その間に公武合體を進め、共々に精勵して我國の長所を發揮し、萬國以上に秀ることが出来るやうになれば野心のある國々も之を畏れて跡を絶ち、或は徳化を慕うて臣服するものもあるであらう。然るにその徳その義如何に卓越するも國力及ばずば叶ひ難きこと自明の理である。天朝大朝共々にその本に反り輕舉無之様」といふ意味であつて、實に堂々たる論旨と申すべきであります。

文久二年冬、先生五十二歳の時、幕府より九ヶ年間の蟄居を宥されました。そこで先生は翌年正月十日松代藩に上書して當路の無能を擧げ誠意國家の爲めを圖らんとせられたけれども遂に用ひられませんでした。

當時京洛の地たるや全く攘夷論者の巢窟であつて、少しでも軟論を唱へるものは直ちに制裁を加へられ、高言壯語、紛々として所謂百楠公輩出と世間に評せらるゝ有様でありました。斯くて攘夷論者は益々氣勢を高め、幕府の因循姑息到底爲すなきを慨して御親征を請ふこととなり、殊に長州藩が率先して風聲を擁し討幕の師を起すとの噂さへ起るに至りました。

そこで幕府も遂に象山先生の智慧を借らうといふことになり、元治元年三月先生に上洛を命じ